

びは、まづ始より、神書といふすぢの物、古き近き、是や彼やと、よみつるを、甘ばかりの程より、わきて心ざしは有りしかど、取立て難と學ぶ事はなかりしに、京に上りては、わざと學ばむと、志はすゝみぬるを、かの契沖が歌ぶみの説にならずらへて、皇國の古の意をおもふに、世に神道者といふものい説おもむきは、みないたくながへりと、はやくさとりぬれば、神と相むべき人もなかりし程に、われいかて、古のまことのむねをかむがへ出むと、思ふ志深かりしにあはせて、かの延壽考を得て、かへすゝよみあぢはふほどに、いよゝ心ざしふかくなりつゝ、此大人をしたふ心、日にそへてせちなりしに、一年此うし、田安の殿の御事をうけ給はり給ひて、此いせの國より、大和、山城など、こゝかしこと尋ねめぐられし事の有しなり、此松坂の里にも、二日三日、留り給へりしを、さることつゆしらて、後にきいていみじく、ちをしかりしを、かへるさまにも、又一夜やどり給へるを、うかひひまちて、いとくうれしく、いそぎやどりにまうて、始めて見え奉りたりき。さて遂に名簿を奉りて、教をうけ給はるることにはなりたりきかし。

門人録

〔鈴屋門人録〕 授業門人姓名録

- |          |                 |      |              |
|----------|-----------------|------|--------------|
| 伊勢松坂     | 小津清右衛門 正啓 後發齋   | 伊勢松坂 | 小島 幸助 崇基     |
| 同        | 中津伊右衛門 光多       | 同    | 伴 元 格 忠世     |
| 同        | 稻掛 什助 棟隆        | 同    | 服部 義中 時保     |
| 同        | 須賀 正藏 直見        | 同    | 注 住 寺 秀覚     |
| 同        | 濱田 八郎兵衛 明造      | 同    | 海 嶺 寺 大圓     |
| 同        | 村坂 嘉左衛門 道生 改高行  | 同    | 最 勝 寺 形春     |
| 同        | 覺 性 院 戒言        | 同    | 竹 内 市 元之 後發齋 |
| 同        | 青木 喜右衛門 車房 車房男也 | 同    | 瀧 古 喜兵衛 中行   |
| 同        | 同 甚 蔵 成房        | 同    | 村 上 小三郎 龍之   |
| 同        | 森田 興右衛門 雅行 車房男也 | 同    | 同 院 車房       |
| 伊勢飯高郡大津村 | 折戸 太右衛門 氏盛      | 同    | 同 院 車房       |
| 同 松坂     | 徳力 普八郎 明造       |      |              |

- |          |                        |             |                 |
|----------|------------------------|-------------|-----------------|
| 伊勢志保郡上野縣 | 伊藤 大郎 殿典               | 伊勢一志郡久保     | 田中 元 使 町彦       |
| 同 度會郡澁柄  | 岩 崎 源五 忠屋              | 同 松坂        | 中里 平兵衛 常秋       |
| 同        | 向井 作兵衛 正隆              | 同 度會郡宇治     | 大園 雅樂其妻 郡地      |
| 同        | 向井 市郎兵衛 喜長             | 同           | 中川 大 炊 守光 荒木田神主 |
| 同        | 向井 三郎兵衛 清品             | 同           |                 |
| 同        | 藤井 市郎右門 道治             | ○安永五年丙申     | 成 道 寺 慶隆        |
| 同 松坂     | 稻掛 十介 大平 初茂穂           | 伊勢松坂        | 上 島 喜右衛門 英臣     |
| 同        | 長谷川 武右衛門 常雄 初中里氏       | 同           | 瀧 川 久太郎 信清      |
| 同        | 山路 喜兵衛 孝正              | 同           | 小津 次郎左衛門 信兼 初信實 |
| 同        | 村田 中 香 光胤 (印本)         | ○安永六年丁酉     |                 |
| 同        | 種森 喜平太 茂隆              | 伊勢三重郡野土方家中  | 早 川 (印本) 源忠顯    |
| 同        | 四方 寺 守忍                | 同           | 加 藤 氏 藤正典       |
| 同        | 中里 重五郎 常國              | ○安永七年戊戌     | 神 宮 寺 一如        |
| 同        | 中里 新三郎 常岳              | 伊勢飯高郡丹生村    |                 |
| 同        | 飯高郡下村                  | ○安永八年己亥     | 岡 山 入 郎 治 正典    |
| 同 松坂     | 藤田 徳右衛門 元能 後發齋         | 同           | 三 井 總 十郎 高隆 初高照 |
| 同        | 島 川 齋 秀尹               | 同           | 長 谷 川 平 藏 定規    |
| 同        | 中條 源兵衛 直基              | ○安永九年庚子     | 五十一歳            |
| 同        | 谷 榮左衛門 高峯              | 美濃多勢郡橋本村    | 田 中 庄 兵衛 道隆 後道全 |
| 同        | 長谷川 彦之助 光寛             | 備前岡山 備前備後   | 平 野 齋 健行        |
| 同        | 祖新四十四歳 右安永二年癸巳以前 郡四十三人 | 石見濱田 道江源松被譽 | 小 篠 大 肥 敏 初得道冲  |
| 伊勢河渡郡津   | ○安永三年甲午                | 伊勢松坂        | 小津 七 郎 次 正邦 正啓男 |
| ○安永四年乙未  | 柴田 四郎右衛門 常昭            | 同           | 増 田 元 榮 忠實      |







伊勢飯高郡藤田村	垣本庄右衛門 茂良	出羽山形	海生阿 秀起
伊勢八代郡末木村 醫師	辻 保 順 守 瓶	尾張名古屋	加藤善七 定房
同 同郡一之宮村	古屋音之助 伴直富	同 御家中	渡邊源右衛門 綱
尾張海東郡木田村	大宿佐右衛門 美 民	同 同	同 人 妻 山 瓦
遠江長上郡有玉村	高林勝三郎 方 期	伊勢桑名郡桑名横野 醫師	井上 喜 正 春
筑前福岡 家中	田尻才兵衛 武官	遠江岡部郡一ノ宮宮代村小	野村多門 茂時
伊勢四日市	田中吉郎次 滿齋	同 同郡主東政二年九月	鈴木 豐 前 小 園 秀 雄
尾張名古屋	河村九兵衛 正雄	同 豐田郡敷地村	山下 武 助 正 彦
同 御家中	鈴木仙藏 眞實	同 敷野郡細田村	石 塚 安 右 衛 門 龍 慶
同 同	鳥居覺右衛門 海人彦	三河吉田	鈴木 龍 興 龍 實 野 隆 高 昌 男
同 同	新井宇兵衛 有雄	美濃大垣 大垣在給村	岡田勝之右衛門 三 貞
同 同	稻葉喜藏 通邦	伊勢津 天明己酉九年正月	倉田金十郎 秋 滿
同 同	大橋丹治 直亮	土佐高知 家中	刈谷 謙 三 郎 博 風
同 同	原田道川 勝男	伊勢度會守治	岡田七郎主 荒木田神主 守 龍
同 同	八木養碩 啓名	筑前福岡 家中	青柳 勝 大 大 廣 權 信 隆 慶
同 同	河村德助 正古	尾張起原本陣	加藤 七 右 衛 門 龍 足
同 同	植松忠兵衛 有信	○寛政二年庚戌	泉 右 門 會 榮 荒 木 田 神 主
同 同	坂本吉兵衛 列峯	伊勢度會守治	森川 文 翠 直 定
同 同	山田新助 幸來	同飯高郡名殘村	小浦 彦 之 丞 朝 通
同 同	河村善次郎 正保	紀伊若山 御家中	四川 柳 右 衛 門 行 久
同 同	細田平右衛門 宗則	同 同	河地 小 右 衛 門 重 矩 重 門 兄
同 同	伊藤平右衛門 公興	美濃大垣	芝 原 武 大 郎 幸 房
同 同	石 上 寺 賢 成	伊勢安濃津	
同 同	鈴木大 學 誠		

筑前早良郡飯盛村	牛尾大 學 誠	印本ニハ伊勢一志郡須川村池田辰三郎同令トアリテ因幡島取	伊勢松坂	横田久三郎 朝 龍
同 飯盛宮神主	伊藤大 藏 道 信	尾張五名郡分田村八幡社司杉	同 飯高郡田原村	横山 久 五 利 龍
同 穴牟運神司村大	富田八十右衛門 龍 風	尾張神守 藤	○寛政四年壬子	石 塚 喜 左 衛 門 正 明
越中射水郡高岡	米 原 玄 仙 充 興 敬 孝 弟	遠江城東郡門原村高松社司中山 將 隆 藤 吉 雄	尾張安濃津古川八王子社司倉田山城守 有 成	備口 又 兵 衛 好 古
石見奈賀郡上市三隅	野上 雅 樂 賢 房	尾張名古屋 御家中	同 同	笑 浦 興 右 衛 門 龍 男
同 郡上市	山根 民 部 信 滿	同 同	同 同	島 居 嘉 八 郎 忠 基 海 人 彦 男
同 郡同村 八幡社司	大黒屋新兵衛 佐 登 風	同 同	同 同	阿 知 波 七 之 助 正 春
尾張名古屋	米田 忠 八 郎 芳 慶	同 同	同 同	藤 井 六 郎 次 龍 盛
安藝廣島	谷 文 藏 高 富	同 同	同 同	松 岡 廣 助 壯 廣 輔 朝 利 長
伊勢松坂	小島 宇 兵 衛 雅 秀	同 同	同 同	水 野 權 平 平 正 勝
阿波麻殖郡兒島村	阿部 勝 五 郎 定 央	同 同	同 同	村 瀬 善 左 衛 門 景 美
同 同	今 井 要 人 一 清	同 同	同 同	志 村 作 左 衛 門 隆 長
伊勢一志郡幸洲 神社司	藤 木 勇 久 茂	同 同	同 同	横 井 十 郎 左 衛 門 千 足 初 穂 兼 吉 千 秋
度會山田	松 居 正 平 安 國	同 同	同 同	法 橋 加 藤 文 中 文 中
○寛政三年辛亥	鬼頭 新 左 衛 門 元 吉 政 吉 之	同 同	同 同	法 橋 小 園 龍 實 寬
近江彦根 家中	網 少 進 荒 木 田 邦 壽	同 同	同 同	有 又 塔 元 俊
尾張春日井郡清洲	酒井 健 之 助 長 興	同 同	同 同	同 同
伊勢宇治	三 谷 景 介 比 曾 半	同 同	同 同	同 同
同 一志郡小川村	大 館 吉 郎 次 信 綱	同 同	同 同	同 同
尾張木田村	林 伊 右 衛 門 利 長	同 同	同 同	同 同
伊勢松坂	早川 清 大 夫 文 明	同 同	同 同	同 同
尾張清洲	衣川 宗 記 長 秋 中 島 豐 足 之 家	同 同	同 同	同 同
一志郡須川因幡島取		同 同	同 同	同 同



尾張名古屋	佐藤興市 正準	河曲郡神戶柳村	小崎七郎兵衛
同	内田源兵衛 宜經	播磨縣東郡・林田庄	三木三左衛門
同	岩田傳兵衛 政隆	肥前長崎 伊勢宮神主	鳥入百道 出雲日置重
同	花井市右衛門 知方	京生國伯	熊澤真澄 源為重
同	早川新六 雄儀 直廣男	同 後藤經助家	松岡恒太郎 龍古
同	加藤理兵衛 知景	同 生國尾張	神戶為藏
同	林杏助 越智廣海	同	富田吉左衛門
同	鈴木常助 期 誠隆屋	同	廣瀬牛兵衛
同	淨瑞 寺了榮	同	江尻佐兵衛
同	同 東本願寺宗	同	清水高兵衛 廣勝
同	同 同宗	同	林宗兵衛 龍主
同	春日井郡高田寺村	同	同 松尾社人
同	白山社司	同	山城伏見松平土佐守殿家中
同	中島郡福島村	同	尾張名古屋
同	同 郡	同	山城伏見松平土佐守殿家中
同	美濃大垣	同	尾張名古屋
同	伊勢一志郡須川村八王子	同	山城伏見松平土佐守殿家中
同	同 一志郡矢野村	同	尾張名古屋
同	江戶小笠原播磨守殿家中	同	山城伏見松平土佐守殿家中
同	出雲大社于家國造俊秀舍弟千	同	尾張名古屋
同	筑前 櫻井	同	山城伏見松平土佐守殿家中
同	○寛政五年癸丑	同	尾張名古屋
同	甲斐 一之宮社人	同	山城伏見松平土佐守殿家中
同	同 巨摩郡古市場	同	尾張名古屋
同	紀伊若山	同	山城伏見松平土佐守殿家中

伊勢字治	中瀬嘉大夫 泰以勝	同 醫師	丹羽有 有
同 山田	中津長大夫 益孝	同 醫師	水谷治吉
同 三河吉田城内	鈴木若狭 藤武重	同 醫師	加藤立見 正成
同 鎮守天王神主	細井利幸 藤三千代歴	同 醫師	神戶文左衛門 伊藤
同 筑前福岡 家中	小野七郎右衛門 菅滿	同 醫師	川村九兵衛 志見龍
同 甲斐山梨郡田中村	飯田大藏 正房 源姓	同 醫師	鈴木藤九郎 清樹
同 酒折宮神主	大山治左衛門母 健	同 醫師	四光 守 昇空
同 三河吉田	小川傳吉 榮宣	同 醫師	向井城右衛門 明辨
同 尾張名古屋	同 人 妻 國	同 醫師	中川茂右衛門 政英
同	同 春 粹 處生	同 醫師	岩崎慶藏 義政
同 醫師	伊豆田清三郎 金雨	同 醫師	藤井佐左衛門 實通
同 飯高郡塚本村	曾根益五郎 孝直	同 醫師	向井八五郎 原江
同 伊勢松坂	森田信兵衛 興茂	同 醫師	大森七兵衛 武信
同	山崎直之助 源隆知	同 醫師	竹内五兵衛 健民
同 飯野郡上七見村	藤井長門守 高尙	同 醫師	關谷敬藏 澄
同 備中 吉備津宮社人	右至寛政五年 都二百九十七人也	同 醫師	多久元 真
○寛政六年甲寅		同 醫師	千頭琢七 守原雲根
伊勢松坂 三月入門	殿村助 吉安守 後稱佐五平	同 醫師	富水興八 基家
同 三河八名郡大野村	戸村具八郎 俊行	同 醫師	國井安 時
同	加藤長左衛門 廣富	同 醫師	秋井勘兵衛 時信
同	小河喜右衛門 道足	同 醫師	村田仁吉
同 美濃高田	酒井彦八郎 忠雄(芳印本)	同 醫師	外山善兵衛 成廣
同 尾張名古屋	坂井勘三郎 行方	同 醫師	吉澤主水 度會末重
		同 醫師	山田大膳主殿 元春











門人に興へし和歌

師の説に拘泥せざる事

巻にも當るべき、細字の大巻にて、凡て世の學者の眼目を新にせしむる書どもなり。今し國學者、歌學家、文章家、物語家、音韻家、語釋家、俳諧家、戲作家など云ふ、一小家を立て、我は説なる體、ひとりも其の御座を察らぬは無きぞかし。

〔古學要〕 鈴屋翁の教子の中に、歌のみに心がけず、ひろく漢籍をよみわたし、やまとぶみども、國史、律令、儀式、などに、こゝろがけて、わが世のかぎり、學事にて名をあげ、いみじき先生とならむと、高くおもひあがれる若人ありて、その人ある時、師にこひていはく、何にまれおのれにをしへ示し給ふ事、かきて給へとこひたるに、そののち三日四日ありて、

家の業、なむこたりそれ、みやびをの、ふみはよむとも、歌はよむとも。

といふ歌をなむ、かきてあたへられける。家のなりとは、武士にまれ、農業にまれ、商人にまれ、先職の代より、わざとしてつとむる家業をいふことなり。

〔玉勝問〕 師の説になづまざる事。

おのれ古典をとくに、師の説とたがへること多く、師の説のわるき事あるをば、わきまへいふこともおほかるを、いとあるまじきことと思ふ人おほかめれど、これすなはち、わが師の心に、つれにをしへられしは、後によき考への出来たらんには、かならずしも、師の説にたがふとて、なほばかりそとなむ、教へられし。こはいとたふときをしへて、わが師のよにすぐれ給へる一つなり。大かた、古をかむがふる事、さらに、ひとり二人の力もて、ことごとく、くあきらめつくすべくもあらず。又よき人の説ならんからに、多くの中に、誤もなごかなからむ。必わろきこともまじらては、えあらず。そのおの心が、今はいにしへのこゝろ、ことごとく、明らかなり。これをかきては、あるべくもあらずと、思ひ定めたることも、おもひの外に、又人のことなるよきかむがへも、いづくるわざなり。あまたの手を経るまに、く、さきく、の考のうへを、なほよく考へきはむるからに、つぎく、にくほしくなりもて、ゆくわざなれば、師の説なりとて、かならず、なづか守るべきにもあらず。よきあしきないはず、ひたぶるにふるきをまもるは、學問の道には、いふがひなきわざなり。又おの師などの、わるきことをいひあらはすは、いとまかしこくはあれど、それもいはずれば、世の學者、その説にまどひて、長くよきををしるこなし。師の説なりとして、わるきをしりながら

教へ子に誠めおくるやう

新なる説を出す事

らいはず、つゝみかくして、よさまにつくるひをらんば、たゞ師をのみ慕とみて、道をば思はざるなり。宣長は、道を尋み古を思ひて、ひたぶるに道の明らかならん事を思ひ、古の意のあきらかならんことをむねと思ふが故に、わたくしに師をたふとむことわりの、かけむことをば、えしもかへり見ざることをあるを、猶わるしとせしむらんは、そしりてよ。そはせんかたなし。われは人にせしられじ、よき人にならむとて、道をまげ、古の意をまけて、さてあるわざはえせずなん。これすなはち、わが師の心なれば、かへりては、師をたふとむにもあるべくや。そはいかにもあれ。

〔同上〕 わがをしへ子にいましめおくるやう。

吾にしたがひて物まなばむともがらも、わが後に、又よきかむがへのいできたらむには、かならず、わが説になづみそ、わがあしきゆゑをいひて、よき考へをひろめよすべておのが人ををしふるは、道を明らかにせむとなれば、かにもかくにも、道をあきらかにせむぞ、吾を用ふるには有ける。道を思はて、いたづらにわれをたふとまんは、わが心にあらざるぞかし。

〔玉勝問〕 あらたなる説を出す事。

ちかき世學問の道ひらけて、大かた萬のとりまかなひ、さとくかしこくなりぬるから、とりどりにあらたなる説を出す人おほく、其説よろしければ、世にもてはやさるゝによりて、なべての學者、いまだよくも、とのはぬほどより、われおとらじと、よにことなるめづらしき説を出して、人の耳をおどろかすこと、今のよのならひなり。其中には、つゝぬぶむによろしきことも、まれにはいてくめれど、大かた、いまだしき學者の心は、やり



て、いひ出ることとは、たゞ、人にまさらむ勝たんの心にて、かるがるしく、まへしりへをもよくも、考へ合さず、思ひよれるまゝに、うち出る故に、多くは、なかなかなるいみじきひがことのみなり、すべて新なる説を出すは、いと大事なり、いくたびもかへさひおもひて、よくたしかなるよりどころをとらへ、いづくまでも、ゆきとほりて、たがふ所なく、うごくまじきにあらずば、たやすくは出すまじきわざなり、その時には、うけばりてよしと思ふも、ほどへて後に、いま一たびよく思へば、なほわろかりけりと、我ながらだに、思ひならるゝ事の多きぞかし。

〔玉勝間さ〕 道のひめぐと。

いづれの道にも、その大事とて、世にひろくもらさず、ひめかくす事をほし、まことに其道大事ならば、殊に世に廣くこそせまほしけれ、あまりに重くして、たやすく傳へざれば、せばくなりて、絶やすきわざぞかし、そもみだりにひろくしぬれば、其道かるくしくなるるといふなるも、一わたりは、ことわりあるやうなれども、たとひかるくしくなるかたはありとて、なほ世にひろまるこそはよけれ、廣ければ、おのづから重きかたはあるぞかし、いかにおもしくしければとて、せばくかすかならむは、よきことにあらず、まして絶もせむには、何のいふかひかあらむ、されどちかき世に、道々に秘傳口訣などいふなるすぢ、おほくは、道を重くすといふは、たゞ名のみにて、まことは、人にしらすずて、おのれひとり物のにして、世にほこらんとする、わたくしのきたなき心、又それよりまさりて、きたなき心なるぞ、おほかる、さるたぐひも、もろくのは、かなき伎藝の道などは、とてもかくてもありぬべけれど、うるはしくは、かゝしき道には、さること有べくもあらず。

道の秘傳

〔玉樽さ〕 抑荷田の翁の立てられし意は、香てふ羅にて、ふみ分けよ、後にはあらぬ、眞身の、あつとを見るのみ、人の道かは、と詠まれ、阿部翁の意は、新室ほぎに臨へる、教へ子たちに示すとて、飛騨たくみ、ほめて作れる、眞木柱、たてし心は、動かざらまし、と詠まれたり、此の次に、鈴屋の翁の今の歌を、詠み味ひて、次々に古へ學の道の、調ひもて來し有さまなも辨ふべし。

東嶽と眞淵と  
宜長

服部中麻呂が平  
田篤胤に訓へ  
しやう

高天の原の説

〔同上〕 さて御歸り路(享和元年六月、京都より伊勢へ歸られし時)は、服部の中麻呂、御供しけるに、道すがら申せるやう、今までは、殿につとめの忙しくて、懈怠し侍れど、此の秋より、暇ある身と成りぬれば、歌よみ文かく學びに、勤み侍らむと申しけるに、大人問給ひて、教子どもに、其の事を好む人のみ多く、宗と立たる古へ學する人なきは、歎きて、歎がはし、然れば、汝は、先々も云ひし如く、神世の道を明さむ事を務めて、然るすぢの事にな心とめ、神世の學問に、深く心を留むる者のなき故に、別にいましに、依託すと宜へりとぞ。

〔古事記傳三〕 高天原は、すなはち天なり、かくてたゞ天と云と、高天原と云との差別は、如何ぞと云に、まづ天は、天神の坐す御國なるが故に、山川木草のたぐひ、宮殿そのほか、萬の物も事も、全御孫命の所知看、此御國土の如くにして、なほすぐれたる處にしあれば、大方のありさまも、神だちの御上の萬の事も、此國土に有る事の如くになむあるを、高天原としも云は、其天にして、有る事を語るとき、稱なり、さて然稱ふる由は、高とは、是も天を云稱にて、たゞに高き意に云るとは、いさゝか異なり、日の統嗣に、高光と云も、天照と同意、高御座も、天の御座と云ふことにて、是等の高も同じ、又高行や率別などは、虚空を高と云るなり、今世にも、天つ虚空を然言ふことあり、原とは、廣く平なる處を云、海原、野原、河原、葦原などの如し、萬葉の歌には、國原ともあり、かゝれば、天をも、天原とは云なり、さて其に高てふ言を添て、高天原とは、此國土より云ことなり、されば、天照大



迦微の説

御神の天石屋に隠れる處の御言、又書紀の須佐之男命の天に上坐時、又御言の處の天照大御神の御言などには、皆たゞ天原とあり、其は天にして御言なるが故なり。これらの餘、此國土より云るところになむ、高天原とある、凡て古文は、かゝる事のいと正しきなり。

〔同上〕 迦微と申す名は、未思得ず。さて凡て迦微とは、古御典等に見えたる、天地の神の神だちを始め、其を祀れる社に坐御靈をも申し、又人はさらにも云ず、鳥獸草木のたぐひ、海山など、其餘何にまれ、尋常ならず、すぐれたる徳のありて、可畏き物を、迦微とは云なり。神迦微は、如此く種々にて、冥きもあり、疑きもあり、強きもあり、弱きもあり、善きもあり、惡きもありて、心も行も、其さまゝに隨ひて、とりゝにしあれば、大かた一むきに定めては、論ひがたき物になむありける。まして、善きも惡きも、いと尊くすぐれたる神だちの御言へに至りては、いとむも、妙に置る。ましくなむ坐ませば、さらに人の小き智を以て、其理など、ちへのひとへも、測り知らるべきわざに非ず。たゞ其尊きをたふとみ、可畏きを畏みてぞあるべき。

年譜  
畧年譜序

〔鈴屋翁畧年譜〕 略年譜序。

老行まゝに、過來しかたのみ、おもひいでられて、見るものさくものにつけて、むかしばかり、むかしきはなかりけり。春門はたかりのほど、鈴屋の大人ののみもとにまゐりせめしより、今は五十年どかくなむなりける。其程の事ども、とありきかゝりきと思へども、つきせす。春山にたなびく霞の、おほほしくながめわたるを、伴信友主、大人の略年譜といふもの、書出たりとて見せらるるをみれば、まのあたり見え奉りし時の事ども、おちかへり、今の現のごとく、備に見えてうれしとも、かなしとも、いはむかたなくなむ。しか思ふ我こゝろから、はやく世にひらく物せられよ。遠き國に住みて、大人にしたしく見え奉らざりし人々には、かゝるものみせまほしと、いひやりつるに、いで、いな、石上ふるごと、學びの道の、おやとたふとび奉ることなどは、今さらいふべくもあらざる。いほの、ほの、松のはのわかきほどは、よのつねの人なみに、はかなき事どもならひて、三すちかくて道にこゝろざし、川上のゆづいほむらのうごきなく、大いなるいさをたて給ひし事を、人にもしらせ、後まきのいれも、踏たのみありと、ふとく厚きこゝろざしを、立させばやとて、かくものしたるなれば、同じこゝろざしの人あらば、うつさせなどほしむすべしと、おれていは

れしを、今年春門、江戸へくだらむとしける。京の御座の人々、夜にまらせむと思ふなり。いとよきついでなれば、このことばからへと、いはるゝがうれしくて、こゝにくだりて、神世の山の松葉しひて、信友主にこひえたるなり。そも、我大人のつる龜の世をつくし給ふとも、踏あきたらじとおもふこゝろのなぐさめに、くりかへし、見ても、むかしきは、このとしたりになむありける。かくてこのはし辭、かくべき人、これかれあるべけれど、春門、ものすることばは、むかし信友主、大人の御もとに、なつき奉られし時、なただちせし故よしとあればと、かの主のゆるさるるにまかせてなりけり。

文政十二年が月廿日餘り五日の日、江戸の永田の風の旗やどりにて、

村田春門しるす

年譜

享保 一五	一、	五月七日子、刻、紀伊殿の知しめす、ひ勢、國飯高、野松坂、里にて生れ給ふ。小津富之助と稱す。
同 一六	二、	
同 一七	三、	
同 一八	四、	
同 一九	五、	
同 二〇	六、	
元文 元	七、	
同 二	八、	四村某を師として手習を始め給ふ。

本居宣長

(年譜)

五七九



元文 三、九	同 四一〇	同 五、一一	寛保 元、一二	同 二、一三	同 三、一四	延享 元、一五	同 二、一六	同 三、一七	同 四一八	寛延 元、一九
		四七月廿四日、父定治主殺られぬ。定治は定利の謀(マコト)○字を彌四郎と改給ふ。	名(ナ)を榮(エ)貞(チカ)と付(ツ)給ふ。○齊藤松菊に從ひて手習し。○岸江之伸によつて、四書を讀給ふ。又松菊の漢書を習ひたまふ。	七月因ありて、大和國吉野ノ深(コ)魚(イサ)、水分(ミヅ)ノ神社に詣て給ふ。	十一月廿二日、元服し給ふ。	此頃より尋常風(マコト)の歌をよみ給給ふ。○七月より濱田瑞雲(スミセウ)を師として射を學び。○又某に茶湯の式を問ひ。○既に正住院に就て五經を讀學給ふ。				四月五日、旗立して近江の多賀(タガ)ノ大社に詣、九日(ニ)京へ上り、廿一日の頃大坂へ下り、廿五日伏見宇治を経て京へ立寄り、五月三日朝鮮人の京の罷立を觀給ひ、四日京を立て、六日松坂に歸給ふ。

同 二、二〇	同 三、二一	寶曆 元、二二	同 二、二三	同 三、二四	同 四、二五	同 五、二六	同 六、二七	同 七、二八	同 八、二九	同 九、三〇	
		二月廿八日、兄定治、江戸にて歿る。子なきによりて、大人家を嗣給ふ。○三月、江戸へ下り、七月十日、江戸を立て歸るに、富士ノ峯に登り、廿日家に歸り給ふ。	三月、物學ひに京へ上り、まづ彌生山を師として、儒道(ニ)を學びたまひ、(三)茶山は誠助と稱て、其先(ニ)正意といへるに、保高主の弟子にて、代々安樂殿の儒士也。其(ニ)が終(ニ)小踏室町の南なる家に、寄宿したまへり。○此(ニ)る、家號小津をやめて、本の木居に復したまふ。	九月、字を健藏と改給ふ。	五月、典藥武川幸順法眼の弟子と成て、小兒科の醫術を學び、その靈町の南の家に寄宿し給へり。	三月、名を宣長、字を春庵と改給ふ。(但し中たび春字を、與と書給へり)	契沖が著せる百人一首改觀抄、古今餘材抄、勢語斷等を見て、始て古學の志を起し給へりとぞ。	七月京より歸りて、小兒科の醫を業とし始給ふ。これかれて、母刀白の意なりとぞ。○寶茂(ニ)武藏(ニ)の著されたる冠辭考を見て、ますく古學の志を定め給ひけるとぞ。			



寶曆一〇三	同 一、三三	眞淵翁、伊勢大和山城わたりものして、江戸へ歸るに、松坂に一夜宿り給へるをりにまうて、古學の書を問ひきたまひ、つひに名簿を通りて、弟子となり給ひぬ。此よりしばらく、書通はして、その書びし給へり。眞淵翁今年六十五歳。	
同 一、三三	同 一、三三	伊勢、阿波津人、草深玄弘が女を娶給ふ。同四月、母刀自磨子、信濃の善光寺に歸て、尼になられぬ。	
同 一、三四	同 一、三四	二月三日、長男健藏、春庭主生。	著述 石上叔波江既に成。(本後期)〇手枕既に成。(寛政三年期)〇古今選既に成。(本後期)〇六月紫文要領成。
明和元、三五	同 二、三六		古事記傳の稿を始給ふ。
同 二、三六	同 三、三七		
同 三、三八	同 四、三八	正月十四日、二男勝太郎春村生。	九月、草庵集玉符成(後年期)
同 五、三九	同 五、三九	正月朔日、母刀自殺られぬ。	九月、國歌入論、同斥非の評成。
同 六、四〇	同 六、四〇	十月晦日、師眞淵翁、七十三歳にて卒り給ひぬ。此翁の蓬萊雅樂に贈られたる書中に云。松坂庵へも御面談之由、弟子に御座候へども、	

同 七、四一	同 七、四一	未學業不弘候何とぞ宜くなれかしと存候事也。	
同 八、四二	同 八、四二	正月十二日、長女飛騨生。	直尾靈、組鏡等既に成(今年期)
安永元、四三	安永元、四三	三月五日旅立して、吉野にものして、十四日家に歸り給ふ。	吉野の紀行 菅笠日記(後年期)
同 二、四四	同 二、四四	正月二日、二女美濃生。	
同 三、四五	同 三、四五		既に 四十三人
同 四、四六	同 四、四六		一人門人
同 四、四六	同 四、四六	正月十日、字音假字川格成(五年期成)	弟子 四人
同 五、四七	同 五、四七	正月十五日、三女能登生。	四人
同 六、四八	同 六、四八		二人
同 七、四九	同 七、四九		一人
同 八、五〇	同 八、五〇		三人



安永 九、五一、	天明 元、五二、	同 二、五三、	同 三、五四、	同 四、五五、	同 五、五六、	同 六、五七、	同 七、五八、
	此頃より、家の名を鈴屋と改め給ふ。						十二月、やむことなき所より同せ給ふによりて、玉匣と題たる書を上り、既に著し置れる玉匣をば、別巻として添へて上り給へりとぞ。
十一月廿二日、葛花成(平後刻)	正月十六日、真淵齋十三回忌追善の歌集、手向草成(後年刻)○九月十二日、真淵考成(寛政元年刻)				漢字三音考既に成(今年刻)○十二月、譜狂人成。	玉匣既に成(寛政元年刻) ○古事記上巻の傳、既に成、白からも形したる書給ひ、寛政の始刻成。	正月、阿刺改成。 ○國語考既に成(今年刻) ○玉匣百首詠既に成 (今年刻、後年大平注、解を著、刻成) ○十二月、秘本玉匣成。
六人	三人	二人	九人	十三人	七人	六人	二十六人

同 八、五九、	寛政 元、六〇、	同 二、六一、	同 三、六二、	同 四、六三、	同 五、六四、
	弟子の晴申によりて、二月、尾張の名見屋にものし給ふ。	八月、白ラ俵をうつし、齎きて歌よみて、書添給ふ。其歌「師木島の、倭心を、人とはひ、朝日に匂ふ、山櫻花○十一月、都に上りて、廿二日、新造の内裡に、遷幸の御よそほひをながみ給ふ。			弟子の晴によりて、三月三日、旅立て郡に上り給ひ、其ほど難波へものして、四月十日、京を立て歸るまに、近江美濃へ立より、又名古屋へおもむき、しばしとゞまり給ひて、三十日、家に歸り給ふ。
五月廿日、神代正語成(後年刻)	十一月、遷幸をながみて、長歌を詠給ふ(後年刻)	四月、新古今集漢讀家巻、同折添成(六年家巻刻、九年折添刻)	玉匣既に成(今年刻、後年三井高屋、辨玉匣論を著)	○古事記中巻の傳成。	正月子ノ日より、玉匣問を書給給ふ。(三巻六年に刻、又三巻、九年に刻、卒後六巻刻成) ○給ひ給たる枕の草紙成 ○出雲國邊神志詞後釋成(八年刻)
十九人	三十六人	二十一人	十三人	三十七人	四十四人



同 一〇、六九	同 九、六八	同 八、六七	同 七、六六	寛政 六、六五	紀伊、殿に召されて、十月十日に出立、若山に参りたまひ、御前にて大祝詞、古今集、序等を進讀し、又詠歌大概を本文にして、歌道な説き聞え参らせ給ふ。此度奥宮師の列に召加へられて俸を賜はり、又御紋の服に種々の縁をさへに賜はり給ひて、四十一月廿三日、罷立て歸るに、難波を経て都にもつして、十二月某日、家に歸り給ふ。此時よみ給へる歌「われはもよ、みけしたばりぬ、さきくさの、みつ葉の葵の、あやのみけしを(此たび稻掛大平主をぐし給へり)	紀行 紀見のめぐみ成。 此度稻掛大平主紀行 名神の演習成。	四十人
			二月、字を中衛と改給ふ。		大祝詞後釋成(寛政八年刻)	二十人	
					天龍御城神舞既成(今年刻)	二十二	
					○此頃、源氏物語玉小櫛成(後年刻)		
					古今集遠鏡既成(今年刻)	十六人	
					古事記下巻の傳成。		
					(卒後文政五年に至て、全部刻成、紀伊、殿實たまひて、御みづから其難波を寄て、大平主に賜ひけるを、奉形りて巻の首に載す)	二十一	
					○七月、家譜修得成。		

同 一一、七〇	同 一二、七一	二月、紀伊國に参り、踊るま吉野に物し給ふ。	○十月、初山詣成(十一年刻)	○給儀の文集歌集を香詞へ給ふ(卒後刻)	二十三人
			○古訓古事記成(卒後刻)		
			既朝御編解既成(今年みづから形したる書おき給ふ(卒後刻))		
			○神代卷御山藤既成(今年刻)	○此頃、櫻の歌あまたよみ給へるを、十月に寄あつめて、枕の山と名づけ給ふ。	
			○地名字音釋川例成(卒後刻)		
			○擬書神既成		
			○武所考不審神既成		
			○臣道既成(此書は、或人、君に事る道と同たるに、示し給へる書にて、難波なきを今かく名付たるなり)		
			○五部書説辨加詳(こほまきに、祝舞の本書の中に、いたくたがへるところに、おしがみして物せられたるを、今かくいふ)		
			○本末の歌		
			既此長歌をよみて、道の意をしめされたりけるを、歌集にも何にも、漏たりとおほゆればこゝとに擧ぐ。		二十四人
		今年、伊勢國飯高郡山室の妙樂寺の山に、建てて墓所を建て、標の石を建てたまふ。その時よみ給へる歌、 「山むろに、千年の春の、やどしめて、風にしられぬ、花をこみ見ぬ。			



		<p>○尾張運物部連系圖既に編し給ふ。 ○百部活川抄稿(門人田中道廣に示して、既に書しめ給へり。詞入番のおや書といふべし)</p>	
<p>人々の請申せるによりて、四月某日、旗立て都に上り、四條烏丸の東に宮どりたまひぬ。此時大人の許につどひて、ものまなびするともがら多かり。諸卿よりさしつたへて、僅りあひたるもありけり。此ほど、やむことなき御あたりにては、中山大納言忠尹卿の御許にたびたび召されて、延喜式の祝詞を進請せらる。御息宰相中将忠頼卿も聞食れけり。また花山院右大將愛徳卿、岡大納言基理卿、東園侍從基仲朝臣、大炊御門中納言經久卿、河内</p>	<p>伊勢二宮さまの御既に成(今年八月朔) ○後撰集訂案の東結成 今年の秋、とみに書とものへ給ひて、御本にせんとて、みづから彫した三枚書さして奉り給ひぬ。翌年刻。</p>	<p>○年頃弟子の間に、答給へる答問の書どもか、とりあつめて、餘部答問録といへる一巻あり。別あるべし。又弟子の歌合の列じ給へるを、とりあつめたる書もあり。</p>	<p>二十一人 奉後及 びて 三人 弟子四十 餘部の人、 合四百九 十人</p>
	<p>宰相實祐卿、今城中將定成朝臣、三條大納言公修卿、野宮左少將定兼朝臣、同侍從定靜朝臣なども、入來まして御禮聞あり。また日野一位實枝卿、富小路新三位良直卿、芝山中納言持豐卿、岡大納言經等より、召れて参り給へり。又四條の宮にて、萬葉集の講説せられるを、聞食しにとて、うちうにさませるさみだちには、富小路殿、日野中宮權大通實愛朝臣、錦小路三位朝理卿、外山三位光實卿、倉橋中將權少輔兼行朝臣など、又祝詞の講説の時には、綾小路中納言俊實卿、富小路殿、錦小路殿、日野權大通殿、源氏物語の時には、富小路殿、外山殿、日野權大通殿、なども入らせ給ひぬ。其ほか、芝山宮内大輔國豐朝臣、日野一位殿なども、うちうち宮に訪ひ來ませり。其外にも新ありけむかし。さて此たび公家のさみだち、多く歌よみて給ひける中に、富小路殿は古風の長きも短きも、殊によくよみとものへたまひけり。「山城の、とはにかつきて、伊勢の海の、玉の光りに、我もあはばや。又鳥のはなむけに、遠き本居大人歸(伊勢國)作(一首)短調とて、二神風の、伊勢の國なる、松坂の、まつかひありて、うちひさす、都に上り、草枕、夜やと</p>		

	<p>享和 元、七二、</p>	<p>りして、なりの葉の、名におふ宮の、ふることの、萬のこと葉、朝よひに、ときかたらふと、持り、音に聞つし、さす竹の、大宮人も、しづたまき、いやしき人も、明くれば、日のくるいまで、夕まれば、夜のおくるさばみ、しじもの、腰折ふせて、玉かつら、絶ることなく、我もまた、教みうけて、つがの木、いやつきくに、いそのかみ、ふるの中道、ふみ見れば、あやにたふとく、分入ば、あやにかしこみ、けしきやし、まなびの親と、大船の、おもひたのみて、たひまなく、いゆきとひしに、あら玉の、月も輝ずして、朝鳥の、朝たちゆけば、いはむすべ、せむすべしに、なくこなす、したひうせふれ、玉錦の、道に出立て、ふるさとの、二見の浦の、ふた、びも、さきくいまして、かにかくに、のぼり來ませと、菅の根の、れしころにのる、けふの別れ路、天つ水、あふぎてぞまつ、玉くしげ、二見の浦の、名をしたのみて。とよませたまへるも、その中のひとつたつなり。かくて大人の身まかり給ひける後、何その故やありけん。伊勢の海の、清き浦に、けふよりは、わがたまとする、玉をひろはむ。と口ずさみ給ひけるとぞ。そもく、平安の都となりてよりこのかた、千年あまりにおよぶまで、大宮人の、古風の歌よみ給へることの、をさく世にはきこえざりけるに、いとめてたくたふとし。さて又、このたび公家の公だちの御會、また贈答の歌どもを、弟子の書あつめて、玉の名づきと名づけたる一巻あり。又此とき、門人石塚龍廣、遠江より京に参りあひて、松坂まで送りまわらせけり。其程の事を記しとめて、宮古日記といふを、大人の見て讀みかみて書添給ひけり。六月十二日、松坂の家にかへり給ふ。○九月十八日より、こゝちわづらひ給ひけるが、やうやくにあつくなりて、廿九日(小)の晩、身まかり給ひぬ。十月二日、かねて定置給ひつる、山室山の嶽の墓所に葬めよむらす。塚の上に櫻を植て、碑に本居宣長之墓と銘せり。此文字は、既にみづから書おき給へり。此墓所は、松樂寺の境内にて、松坂より南のかた、二里ばかりにあり。さて此時の事どもは、門人骨木茂房の書とものへたるがありて、歌の下書といふ。また尾張の起入、加藤藤足が、時雨の日記といふもあり。さて又大人の書を、秋津彦美豆櫻根大人と稱へ申す。平常に手馴し給ひける、櫻木にて造りたる筒の形したるものなを、謄して、謄を書つけて家に記り置らす。又松坂なる僧敬守といふは、祖だちの墓所なりければ、其所にも碑を建て、僧か呼ぶなる戒名さまの名をものして、家族の常に讀るところとす。これらの事どもは、かれて百おき給へるおもむきの有しゆふなりとぞ。</p>
		<p>文政九丙戌年九月廿九日 藤編集。</p>



年譜後香

鈴屋翁略年譜後香

此一巻は、伴信友主のかきしるされたるなり。これかきしるされたる、そのはじめの心ざしをとおふに、いにし享和のはじめの年、おなじく江戸にありて、心あへる村田春門主を、中人として名譽おくりて、鈴屋の門人となりて、したしくそのをしへごとうけつぎてむと、思ひたられたるを、そのころしも、はやく、翁はなくなられぬと、いとくちをしくきとおどるきて、いであなかなし、あたち大人ばやと、なげきかなしびて、さばれ、今よりは、そのかきのおもたれたる書どもをよく見あきらめて、その教はうけつぎてむ。うつゝいをしへならさらむからに、ことなるべきことかばと、その後しも、大平がもとにことかよはして、うつし巻のかぎりうつしとりて、直く正しきこととし、とを、人よりことに心にしめて、尊び思ひあふがるゝがあまり、學のすぢにさとくかしこく、世に功たてられたるのみならず、翁がうまれつきつれのおこなひさへ世人に似ず、まめに正しかりし事をもきき傳へて、道のをしへごとのみならず、かきおかれたることは、何にても見まほしと、あながちに、もとめらるゝにより、わらはのほど、わらは心にしるしおかれたる、いとほかなき筆のすさみをも、かきうつして、見せにやりければ、そのいさしけ事をも、そのほどのとしなみについでしるして、それらのことまで、かきしるされたるなりけり。かくてのち又、大平がもとに見せにおこせて、こはわがうみの子の末につたへて、かくなむとしめさまほしくてなむ。翁もれたる事はなしや、ひがことばまじらずやといひおこされけるに、いさしかもたがへる所なしとこたへて、かへしつかばさむと思へる、そのなりしも、春門翁のちかきほどに江戸に出たゝるゝよしきいて、いとよきたよりと思ひて、ことづけたりけるを、此翁難波より出たちて、京の御舎の友だちにて、藤垣内の蔵板になしてしがなと、ねぎもとむることゝなりて、そのよし江戸に物してのち、信友主にあひて、しかくゝなむとかたられければ、そほともかくもとて、うべなひゆるして、かく事なりぬるなりけり。これがゆゑよししくなむ。

年譜正誤

〔鈴屋翁略年譜附録〕 鈴屋翁略年譜の誤を正す。

本居大平

其一

伴信友主の編せられし鈴屋翁略年譜は、はやく世に流布して、人々の信とする書なれど、誤謬多ければ、常に遺憾に思ひ居りしが、こたび全集に附して、新に刊行するよし聞きては、うち給て讀みて、是れが誤を正さんとす。されど、己れが所持せる異年譜は、寫本なれば、謄寫の際の誤なしとは言ふべからず。若しさることありなば、己れの不行届として、見許されんことを乞ふ。

其二

其の一  
寛保元年の條に、名を榮貞と付き給ふとあれど、當時は之れを榮貞と唱へしを、寛延二年九月十六日、二十歳の時、みづから榮貞と改めしにて、山田の今井田氏に養はるる程のことなり。(寛延元年十一月十四日、紙商今井田氏の養子となりしが、故ありて、寛延三年十二月離縁)

其三

其の二  
延享三年の條下に、此頃より尋常風の歌をよみ給給ふとあり、此は玉勝岡の二に、十七八歳の頃より、歌をよみしよし記せるによりて、書かれたるなるべけれど、玉勝岡に、十七八歳とあるは、唯そのおほよそにして、實は寛延元年、十九歳の頃よりなり。そは寛延二年の日記に、去辰の年より、和歌道に志し、今年己の年より、専ら歌道に心をよすとあるを以て明なり。

其四

其の三  
同じ條に、既に正住院に就て、五經を讀學給ふとあるも、誤にこそ、日記寛延二年十月二日の條を見るに、素讀を學正住院、易經よむ。詩經よむ。書經よむ。とあれば、之れ又二十歳の時のことにして、今井田氏にありしほどのことなり。

其五

其の四  
寶曆二年の條に、景山の先祖、正意を恒富の門人なるやうに記したれど、實是が手記せるものによれば、道春の弟子なり。又景山の家を綾小路室町の南とせるは、四の誤なり。

其の五  
寶曆七年の條に、京より歸りしを、七月としたれど、十月なり。

本居宣長

(年譜)

五九一



眞淵翁の松坂に一宿せられしを、寶曆十一年、卅二歳の時となしたるは、大なる誤にして、又直ちに名簿を奉りて、弟子となりし如く記したるも誤れり。是は日記、寶曆十三年五月廿五日の條に、岡部衛士、當所新上屋一宿、始て對面すと見え、同年十二月二十八日の條に、去五月、江戸岡部衛士、賀茂縣主眞淵、當所一宿之節、始對面、其後狀通入門、今日有許諾之返事、とあるを以て明なり。されば始めての對面は、三十四歳の夏にして、十二月に至り、門人の列には加へられたるなり。

其六

其の六

天明元年の條に、此頃より、家の名を鈴屋と號け給ふとあれど、鈴屋とは、宜長が書齋にて、建設せし四疊半に名づけし號にして、其の書齋は日記によるに、天明二年十月十三日に、普請を起し、十二月上旬に、その功をなへしなれば、天明元年に鈴屋の號あるべくもなし。されど此の屋號、いつごろ名付けけん。日記には、天明八年十一月廿一日、鈴屋臨時歌會とありて、鈴屋の二字、こゝに始めて見えたるやうなれど、之より早く、此の號ありしかと覺ゆ。

其七

其の七

寛政元年、名古屋への旅行を、二月とあれど、三月十九日なり。又寛政五年の條下なる、三月三日は、三月一日、四月十日は、四月十二日、三十日は、廿九日の誤なり。又同十一年の紀州行を、單に二月とあれど、一月廿一日に發足、二月廿八日に歸着なり。歸途吉野へ立ち寄り、れしことは、日記には見えぬ。又享和元年上京せしを、四月某日と記しあれど、是れも三月廿八日の發足なり。此の他、なほ疑はしき所々あれど、今は詳に知り難き事もあり、又康右衛門の書齋に乏しければ、その誤を指すあたはざる條もあり、若し書齋にいたりては、後照すべき書齋、ことごとく松坂の家に残しおきたれば、陋覽に便ならず。よりて一も言ふあたはず。門人の數の誤れるは、門人錄によりて明なれば、わざと省きぬ。猶他日便を得ば、重ねて述ぶべし。

本居五論記す

年譜は信友の作にあらざりて、堤朝風の著なり

經歷

十一歳父に別る

縣居入門以前

〔古史本辭經〕 今に悲しく思ふは、堤朝風なり。眞淵翁自たぐひなき人にて、信友よりも著き、學びの兄なるが若かりし程より、鈴屋翁の年譜をかき記さむと志して、享和三年の事なりき。春庭主と、大平主とに其志をいひやり、切にこひて、故大人の自記なる本居系圖と、家の昔物語とを借りよせたる、これ此二書の世に出でたる初にて、それを眞淵翁が寫して、其由を地書にし、其後信友に朝風が志を語りて、また寫させたりき。斯て故大人の事が、種々に亂し明して、遂に其年譜の成たるを、物なく板に彫ること能はず、歎き居けるに、文政六年の事とおぼゆ。我家にて堤と伴と始めて遇たる時に、己かたり出て、彼年譜を作にかし見する事とはなりき。然るに信友、その年譜に、いさゝか筆を加へし、例の己が有と爲たり、抑人の傳、また年譜などを書くこと、紙數は少かるも、大に心用ひある事にて、實は存身ならぬ事なるを、最も惜なき事ならずや。朝風かつて人を怒むる事などは、云はざりし人なれど、せめて書のはしに、我が名を一言だに云ひて有まし物と、今はにも云へりし言の、今も耳に留まれり。そは己が取もちて借たる譜にて有ればなり。疑ひ自身も同じ意に、元より記し置たるが有りしにもあれ。右の手つゞき有れば、朝風が志をも顯すべき事ならずや。神の御世より、人の名を顯はし知しむるをこそ、人の太き徳とは爲たりけれ。

〔家の昔物語〕 元文五年、十一歳の時、道樹君に、おくれまむらせぬ、そもくそのをりの事よ、かくれ給ひぬるよし、江戸より、早便りして告おこせたる、それよりさきに、おもく病み給ふよし告たる狀と、事され給へるよし告たると、同じ夜に、ふけて來つきて、門たたきても來たるに、惠勝大姉のいみじく驚きて、かなしみ泣給しこと、われもわらは心に、いとかなしかりし事など、今もほのかにおぼえたるを、思ひ出るも、夢のやうにかなし。かの御面影は、たしかにおぼえてあるなり、そのとし彌四郎と改名す。〔宮の字は、信友の字に似たり〕



寛保元年榮貞と名け魚町に移る

てなり。彌四郎は、道寛保元年、實名榮貞とつく。同年五月十四日、本町の宅より魚町一町目の今の宅に、惠勝大姉、子ども四人をぐして、移り給ふ。

此魚町の宅は、道休君の世、承應三年に、本町の宅地と合せて、買得給へる地にして、(妙法尼、同年此地に居住、其後、享保十一年、唱阿君、職人町の隠居を此地に移し、建て、榮保大姉とともに住給ひし家なり。職人町は、はなれて便りあしかりし故に、此地にはうつされしなり。さて榮保大姉、かくれ給ひて、後、人にかしおきたりしを、此度富家の住宅とはなせるなり。此地は、本町の宅地と、うち合せにつゞきて、即今川ふるぬりこども、清造いふ。このぬりこめ、父の世に三井兵へ賣り拂はれたり、地所も共になり、本町宅の隣にて、かの町の地に臨るなり。

寛保二年吉野水分神社に詣つ

同二年、宣長十三歳、惠勝大姉、道樹君の、かの願たておき給ひしことをおぼして、七月に吉野の水分の神社にまうてしめ給ふ。此里は御嶽まうてする人々のあるに、たぐひてなりけり。われまだいとけなれば、うひ旅をうしろめたくおぼして、ふる手代なる茂八といふ者と、宗兵衛とて、年久しくつかふ従者と、二人をそへて、出たせ給ふ。かの社にまうて、かへり申して、たぐへる人々とともに、御たけにもまうて、事なくかへりぬれば、惠勝大姉、涙おとして、ぞよろこび給ひける。道樹君の御事、いかにおぼし出けん。延享元年十二月廿一日、十五歳にて、元服といふことす。寛延元年には、ある人の子になりて、山田にゆきて、二年あまり有しが、ねがふ心になはぬ事有しによりて、同三年、離縁して、歸りぬ。かく人の子となし給へる故は、そのかみ道喜君、江戸にはおぼしなながら、こゝにては三四右衛門と申て、此家の主にてはおぼすればなりけり。

延享元年元服養子となる

家名相續

さるに、寛保元年、道喜君うせ給へる故に、われ家をつぎぬ。此時江戸の店は、大傳馬町なるも、堀留町なる二店も、皆すてになくなりて、道喜君、その残れる資のうち、わづかに金四百兩を、隠居家孫右衛門の店に預れいれて、その年々の利息をもて、わが家の産とさだめおき給へりしを、此ぬしなくなり給ひては、惠勝大姉、みづから家の事をはからひ給ふに、跡つぐ彌四郎、あきなひのすぢにはうとくて、たゞ書をよむことをのみこのめば、今より後、商人となるとも、事ゆかじ。又家の資も、隠居家の店、おとろへぬれば、ゆくさきうしろめだし。もしかの店、ことあらんには、われら何を以てか世をわたらん。かねてその心づかひせては、あるべからず。然れば彌四郎は、京にのぼりて、學問をし、くずしにならむ。こそよからめ。とぞおぼしおきて給へりける。すべて此惠勝大姉は、女ながら、男にはまかるすぢの事、いとかしこくぞおぼしける。かくおぼしおきてたるも、しるく、いくほどなく、明和元年に、隠居家の店なくなりて、のこれる資も、みなあつた。わたくしに引こめて、しかば、かのわが家の資も、朝の露とぞ消うせぬ。われも、し、くずし、のわが資も、はじめらましかば、家の産、絶はてなまし。を、惠勝大姉のはからひは、かへすくも、有がた、くおぼしめる。かくて、寛保二年三月に、京にのぼりて、まづ景山先生と申せしが、弟子になりて、儒のまなびをす。此先生は、彌助と申して、先祖、景山先生の弟子、彌正、先生より、世々安齋殿のより小津といひし稱をやめて、むかしの本居にかへれり。

寛保二年景山に就て學ぶ

寛保三年健藏と改む  
寛保四年寺願の門に入る

同三年九月、彌四郎を健藏と改む。  
同四年五月より、武川幸順法眼の弟子となりて、くずしのわざをまなぶ。此先生、南山先生と號す。世々



寶曆五年春庵と改む

寶曆七年春業を開く

結婚  
寛政七年中衛と改む

二十八歳

見くずしにて、其業いへり。盛に行はれ、後桃園天皇の、いまだ親王と申し、御ほどより、典義として、つかうまつり給へり。宣長同年の十月より、かの室町四條の南なる家に寄居せり。同五年三月、健藏を改めて、春庵と號す。名を宣長とあらたむ。かくて、此ほどの皇朝の學びのすぢの事は、玉かつまにいへるが如し。

同七年十月に、京より松坂にかへり、これよりくずしのわざをもて、家の産とはして、のわざをらて、産とすることはいとつたなく、こゝろきたなくして、ますらをのほいにもあらねども、おのれいさぎよからんとて、親先祖のおとを、心ももて、まはんは、いよく、道の業にあらず。力の及ばむかざりは、産業をまめや、かにつとめて、家をすまめず、おもはら皇朝のまなびに、とさばらんやうをはかるべきものぞ。これのりながい、こゝろなるなり。おもはら皇朝のまなびに心をいれて、よるひるといはず、いそしみつとめぬ。

同十年、魚町村田彦太郎某の女を娶れりしが、離別して同十二年に、阿波津の草深氏の女を娶て、男子二人、女子三人を生り。寛政七年二月に、春庵といふを改めて、中衛と稱す。〔玉禪丸〕元文五年閏七月に、父ぬし身退られぬ。大人十一歳の時なり。此年に字を彌四郎と改めらる。十二歳の時に、名を榮良とつけ給ひ、十七歳の頃より、尋常風の歌をよみ始め給へり。此頃までに、大人の習ひ給へる事ども、八歳の時、四村某を師として、手習ひを始め給ひ、十二歳の時に、書藤松菊に從ひて、手習ひし。岸江之仲につきて、四書を讀み、また讀樂の管曲ならひ、十五歳の十一月に元服し給ひ、延享三年、十七歳の頃より、歌をよみ始め、其年の七月より、濱田瑞雲を師として、射術を學び、また茶に茶道の式をとひ、既に正住院に就て、五經を讀學たまへりとぞ。

〔况齋雜話下〕 二十八歳。

本居氏ハ、千古卓絶ノ人ナリ。段玉鏡モ歴世無類ノ人ナリ。本居氏ハ、年廿八ノトキ、縣居ノ冠許考ナミテ、古學ノ志ヲ定メテ、遂ニ縣居ノ門ニ入リ。段玉鏡モ、兼賞ニ京師ニテ、初メテアヒテ、師事セラレタル年、二十八ナリ。本居氏廿八ニテ、志ハ定メラレ、而シテ、師事セラレタル年、廿八ナリ。伊勢ノ松坂ニ、縣居、一夜ナドリ給フ。ノアリタルニ、ヤガテ二字ナリ。經シテ、廿二歳ノトキ、伊勢ノ松坂ニ、縣居、一夜ナドリ給フ。ノアリタルニ、ヤガテ二字ナリ。

クラレタリ。モシ廿八歳ノトキ、縣居對ニアハレタランニハ、ヤガテ給テトウレベキ。イフモサラナリ。後漢ノ達人、イヅレモ年廿八ニテ、名師ヲ得タル、不可思議ト云ベシ。本居氏ノ、年譜ニミエ、段氏ノ、ハ、説文解字卷十四、許序ノ注ニミヅカライヘリ。後漢ノ光武ハ、歷代帝王ノ中ニテ、殊ニスグレタルヲ、初メテ起兵サレタル年、廿八ノトキナリ。本紀ニミエタリ。孔明ノ蜀ノ先生ニアヘルモ、二十八歳ナリ。李克用ガ黃巢ニ打勝テ、李唐僭宗ノ爲ニ、長安ノ都ヲトリカヘシ、其時ニ功第一ニテアリシ、温史唐紀七十一(僖宗中和三年)ニミエタリ。克用時年二十八トアリ。コレ五代ノ後唐莊宗天下之主トナル蓋屬也。克用ノ子、莊宗ナリ。西土ノ、ハ、シベラオク。幸ハ二十八歳ノトキ、先師月齋清水(濱区)先生物故シタマヘリ。〔文政七年甲申〕剛氏トウウヘニテ、學業ノ成就セザル、オノヅカラ定數アルコトナリ。儒者ノイヘル命ナリ。皇國ニテイハバ、神ノ御意ニコソ、ソモ、浮屠ニイハバ、前世ノ因果トソイフベキ。

寶曆十一年武淵の門に入る

〔玉禪丸〕 寶曆十一年、三十二歳の時より、縣居の大人の教子になり給ひ、もはら皇朝の學びに心をいれて、晝夜といはず、勤み給へりとぞ。縣居の大人、この時六十五歳なり。縣居入門以後

冠辭考を見て志を立つ

〔同上〕 こは上に引たる、玉勝間の文の續きに國に歸りたりし年頃、江戸より上れりし人の、近き頃出たりとて、冠辭考といふ書を見せたるにぞ。縣居の大人の御名をも始めて知りける。斯くて其ふみ、始めに、一とわたり見しには、更に思ひもかけぬ事のみにして、餘り事とほく異しきやうに覺えて、更に信ずる心は有らざりしかど、猶あるやう有べしと思ひて、立ちかへり、今一とたび見れば、まれくには、實に然もやと覺ゆるよし。ぶしも出來ければ、又立ちかへり見るに、いよくげにと覺ゆること多くなりて、見る



たびに信ずる心の出来つゝ終に古ぶりの心ことばの實にさる事を悟りぬかくて後に思ひくらぶれば彼の契沖が萬葉の説はなほ未だしき説のみぞ多かりける己が歌學びの有しやう大かたかくの如くなりき借また道の學びはまづ始めより神書といふすぢの物古き近きこれやかれと讀みつるを二十ばかりの程よりわきて心ざしありしかど取りたてゝわざと學ぶ事は無ししに京に上りてはわざとも學ばんと志は進みぬるをかの契沖が歌よみの説に准へて皇國の古への意を思ふに世に神道者といふ者の説く趣きはみな甚く違へりと早く悟りぬれば師と頼むべき人も無しし程に吾いかで古へのまことの旨を考へ出むと思ふ心ざし深かりしに合せてかの冠辭考を得てかへすく讀み味はふほどにいよく心ざし深くなりつゝ此の大人をしつたふ心日にそへて切なりしに一と年此うし田安の殿の仰せ事をうけ賜はり給ひて此いせの國より大和山城などこゝかしこと尋ねめぐられし事の有しをり此の松坂の里にも二日三日とゞまり給へりしを然ること露しらて後にきいていみじく口惜かりしを歸るさにもまた一と夜やどり給へるを伺ひ待ていとく嬉しく急ぎ宿りにまうてゝ始めて見え奉りたりき借つひに名簿を奉りて教をうけ賜はる事には成たりきかしとありかくて其の始めて見給ひし時に古事記の注釋を物せむと思せる志しを述べられるに縣居の大人の諭し給へる御語は既に上に記せるが如しなほ玉がつまにのれ縣居の大人の教を受しやう師の説に泥まざる事などある條々また

鈴屋集なる縣居の大人の御前にのみ申せる詞とあるなどを見て縣居の大人に教を受られたる趣を見るべし。

明和九年吉野  
本分神社に詣

〔菅笠日記〕 ことし明和の九年といふとしいかなるよき年にかあるらむよき人のよく見てよしといひおきける吉野の花見にと思ひたつて萬葉一にいひし吉野よく見よき人よき人もくこの山分衣のあらましは廿年ばかりにも成ぬるを春ごとにはさほのみしていたづらに心のうちにふりにしをさのみやばとあながちに思ひおこして出たつになん有ける(中畧)ころは三月のはじめ五日の晩まだよをこめて出立ける(中畧)なほのぼりて藏王堂より十八町といふに子守の神まします此御やしるはよろづの所よりも心いれてしづかに拜み奉るさるはむかし我父なりける人子もたらぬ事を深くなげき給ひてはるくこの神にしもねざごとし給ひけるし有て程もなくほなりし人たゞならずなり給ひしかばかつく願ひかなひぬといみじう悦びて同じくはをのこごえさせ給へとなんいよく深くねんじ奉り給ひけるわれはさてうまれつる身ぞかし十三になりなばかならずみづからゐてまうてかへり申しはせせんとのたまひわたりつる物を今すこしえたへ給はてわが十一といふになん父はうせ給ひぬると母なんものゝついでごとにはのたまひいて涙おとし給ひしかくて其としにも成しかば父のぐわんはたさせんとてかひくしう出たせせてまうてさせ給ひしを今はその人さへなくなり給ひにしかばさながら夢のやうに



思ひ出る、そのかみ垣に、たむけして、麻よりしげく、ちるなみだかな、袖もしぼりあへずなん。かの度は、むげにわかくて、まだ何事も覚えぬ程なりしを、やう／＼ひととなりて、物の心もわきまへしるにつけては、むかしの物語をきいて、神の御めぐみの、おろかならざりし事をし思へば、心にかけて、朝ごとに、こなたにひきてをがみつゝ、又ふりはへてももうてまほしく、思ひわたりしことなれど、何くれとまざれつゝ、過こしに、三十年を経て、今年又四十三にて、かくまうでつるも、突あさからず、年ごろのほいか、なひつるこゝちして、いとうれしきにも、おちそふなみだは一ツなり、そも花のたよりは、すこし心あさきやうなれど、こと事のついでならんよりは、さりととも神も、おほしゆるして、うけ引給ふらんと、猶たのもしくこそ、かゝる深きよしあれば、此神の御事は、こゝとによそならず、覚え奉りて、としごろ書を見るにも、萬に心を附て、尋ね奉りしに、(中略)さて我父も、こゝにはいのり給ひしなりけり、此御門のまへに、櫻おほかる、いまさかりなり。

〔鈴屋集〕 水分神社にまうづ

宜 長

みくまりの、かみのちはひの、なかりせば、これのあが身は、うまれこめやも。  
ちゝは、いの、むかし思へば、袖ぬれぬ、みくまりやまに、雨はふられど。

水分の、山をし見れば、かす／＼に、わが世のむかし、おもほゆるかも。  
命ありて、三たびまゐきて、なるがむも、此水分の、神のみたまぞ。

〔玉櫛〕 天明元年正月十六日に、縣居の翁の十三回追慕の祭りに、歌の合し給ふ其の

天明元年賀茂  
第十三回忌

時の歌集を手向草と云ふ。

〔鈴屋集〕 天明二年の冬、家のうちに高き屋を造りて、又の年の三月九日の日、友だちをつとへて、はじめて歌の四居しける時によめる、(歌は前五三八頁を見よ)

〔藤垣内集〕 此たかき屋につねにかけおかる、鈴の歌

鈴の屋の、鈴がねのよき、紅の、こそめの糸を、三つあひに、八尋よりはへ、其緒さへ、ひかる小鈴の、さく鈴を、しゝにぬきたれ、高き屋の、眞木の柱に、長々に、とりかけおきて、朝には、いびきゆらおし、夕べには、い引きならさす、鈴がねのよき。

〔玉櫛〕 さて寛政六年、六十五歳になり給ふ十月に、紀伊の殿に召されて、若山に参り給ひ、御前にて、大被の詞、古今集の序などを聞えまをし、また詠歌大概を本文にして、歌

寛政六年紀伊  
侯に召さる

の道を説き聞え参らせ給ふ。此の度に、奥醫師の列に召し加へられて、俸を賜はり、また御紋の服に、種々の縁をさへに賜はりて、十二月に家に歸り給ふ。此の時よみ給へる歌に、我はもよ、御衣たばりぬ、さき草の、三つ葉の葵のあやの御けしを、此の時の日記を、きみのめぐみとて一卷あり。

〔後鈴屋集〕

父のめし出されける御よるこびに、若山にものせられけるなり、御前にて、詠歌など、つかうまつりしに、有がたき仰ごとくもありければ、かへりてのち、打退知海といふ題にて、人々に歌よませられけるに、

おきつ波、たちても居ても、きの海の、深きめぐみを、わすれやはする。

寛政十一年三  
遊び吉野山に

〔玉櫛〕 寛政十一年二月に、紀伊の國に参りて、歸るさに、吉野に物し給へり、其の時の歌、吉野百首あり、鈴の屋集の水分の神社にまうて、詠給へる歌ども多かる中に、水く



まりの神のちはひの、無りせば、これのあが身は、生れこめやも、水分の山をし見れば、か  
ずくゝに、わが世のむかし、思ほゆるかも、命ありて、三たびまゐ來て、ふろがむも、此水分  
の神のみたまぞ、水分の神のさきは、命あらば、又かへりみむ、みよし野の山なども見  
えたり。

享和元年京師  
に上る

〔同上〕 享和元年、七十二歳になり給ふ。四月に、人々の請申せるに依りて、四月に旅立ち  
て京に上り、四條烏丸の東に寓り給ひし時に、諸國より聞傳へて、學問に参り合たるも  
多く、又閑院の宮、妙法院の宮などへも召されて、歌よみて奉られ、日野殿、岡殿、芝山殿、中  
山殿、富小路殿、萩原殿などへも参り給ひて、古へ學の事ども申し給へる中にも、中山前  
の大納言愛親卿の御館にて、延喜式の祝詞の卷を口説せられし時は、殊にやごとなき  
雲上方にも、多く聽聞おはし坐けり。其の御方々には、御息宰相中將忠頼卿、花山の院右  
大將愛徳卿、園の大納言基理卿、東園侍從基仲朝臣、大炊御門中納言經久卿、河鱈宰相實  
祐卿、今城右中將定成朝臣、三條大納言公修卿、野の宮左小將定業朝臣、同侍從定靜朝臣、  
花園殿なども御坐けり。其の會日は四月廿九日、五月四日、十五日、十八日、廿三日、廿六日  
なりき。なほ此の時に、聽聞ありし人々の名ども、玉の名づきといふものに委しく見え  
たり。また四條の寓居にて、萬葉集、祝詞式、源氏物語など、講説せられしも、入來りまして、  
聽聞ありし君たちも、多く坐ましき。其の御方には、富小路殿、日野中宮權の大進資愛朝  
臣、錦の小路三位頼理卿、外山三位光實卿、倉橋中務の權の少輔泰行朝臣、榎の小路中納

言俊資卿などなり。地下の聽衆は、今計ふるに暇あらず。雲上方にも、大人の學問を感き  
こえ給ひける事は、日野一位資枝卿の御館に参られし時に、立よれば、わかぬ浦松、高き  
枝に、かけむ言ばも、波の下草とて奉られける御返しに、宣長より、浪の下草とよみて贈  
られしかば、と詞がきし給ひて、和歌の浦や、千代まつ蔭の、みるふさを、誰かは波の、下草  
と見む。また、同じ卿の令孫資愛卿、四條の寓居に訪ひおはして、和歌のうらに、行方をた  
どる。海士をぶね、今より君をかちと頼まむ。と宣ひ、この時大人の御返しに、君にかく、と  
はれましや。は、賤がやを、和歌の浦路の、たよりならずば、思ひきや、植生のをやの、さむし  
ろに、日野のわくこの、入りまさむとは、芝山宮内の大輔殿はじめ、入來まして、宿とひ  
て、君にかたらふ、嬉しさは、雲はれて月を見るこゝちせり。恙なき、姿はいまも、いせ島の、  
和歌の松原、みるに嬉しも。とあり。大人の御かへしに、とはれつる、君が光に、こよひより、  
旅ねの、とこの、露も消ぬべし。年をへて君をあひ見し、嬉しさに、老木もけふは、和歌の松  
原。富小路貞直卿の始て訪ひ來ませる時に、山城の、とはにかづきて、伊勢の海、玉の光  
に、吾もあえばや。と宣ひ、大人の御かへしに、いせの海士の、身におはねども、山城のとは  
むに、仰が君が光りを、大人の國に歸り給ふ時に、同じ卿の馬の、餞し給ふに、送本居大人  
歸伊勢國作詩一首。並に短誦とて、神風の、伊勢の國なる、松坂の、まつかひありて、内日さ  
す、都にのぼり、草まくら、旅宿りして、奈良の、葉の名におふ宮の、古こと、萬のこと、葉朝  
よひに、説談らふと、梓弓、おとに聞つゝ、刺竹の、大宮人も、しづ手、観いやしき人も、あけく



れば、日の暮るまで、夕されば、夜の明るきはみ、まじもの、膝折りふせて、玉かづら、絶ることなく、我れもまた、教をうけて、櫻の木、いや、繼々に、石の上、ふるの中道、ふみ見れば、綾にたふとく、分入れれば、綾にかしこみ、はしきやし、學びの親と、大船の、思ひ頼みて、度まねく、いゆき訪ひにし、新玉の、月も、經ずして、朝鳥の、朝たち行けば、云はむすべ、せむすべ知らに、鳴子なす、慕ひうらぶれ、玉銚の、道に立出て、ふる里の、二た見の、浦の、ふた、びも、幸く、いまして、かにかくに、上り來ませと、菅根の、ねもころに告る、今日の、わかれぢ、天つ水仰ぎて、ぞまつ、玉くしげ、二見の、浦の名をし頼みて、と詠ませる、杯にて、知べし、大人此の御歌を見給ひて、かくめて、たき古の、代のふりを、本末露の、亂れなく、いとよく物し給へる事と、いたく感給ひけりとぞ、そも、平安の、都となりて、より以來、千年あまりに及ぶまで、大宮人の、古へ風の、歌よみ給へる事、の、をさ、世には、聞えざりけるに、斯しも長歌を、さへに、能くよみ調へて、賜ひけるは、甚もめて、たき御事に、ぞ有ける、斯くて、大人の身まかり給ひける後に、人々と共に、歌合せといふこと、爲給ひしより、事おこりて、雲の上なる、師の、君に捨られ給ひける時に、思ほす御むねや、ありけむ、伊勢の、うみの、清きなぎさに、今日よりは、吾が、玉とする、玉をひろはむ、と口ずさび給ひけりとぞ、篤胤さきに、その御前にて、たゞに、伺ひ奉れる、御歌なり、扱この、二條に、大人の、寓り給ひし、間の有ける事どもを、其時したがひ、上れる人だちの、書集めて、玉の名づきと名けたる、一と巻あり、また石塚の、龍麻呂も、遠江より、参りあひて、松坂まで、送り参らせしほどの事ども、

六月十二日伊勢に歸る

最後の會

九月二十九日歿す

山室の墓所に葬る

革命の運

記し留めて、都日記と名けしを、大人の、見まして、歌よみて、書添たまへる物もあり、委くは、其の書どもを見て、知るべし、さて、六月十二日に、松坂の家、に歸り給へるが、此の年の九月十三夜に、大平ぬしの、別荘、御かべの、屋にて、人々と共に、月を見給ふ、是ぞ、大人の終の會には、有ける、鈴の、屋集の、八の、巻に、九月十三夜、例よりも、殊に、さやかなりければ、と詞書して、見るまゝに、猶長かれと、長月の、夜をさへをしむ、影の、さやけさ、と有るは、此の會の、御歌なり、また此の會の、當座に、菊の、露といふ題にて、長き夜の、一と夜を、千よに、なづらへて、明れば、菊の、露も、さえに、き、と詠れしとぞ、此歌は、集に出されず、さて、此の二首を、其ころ、人々、いと聞あしき、御歌なりと、密に、さだし申せるが、後に、思ひ合されけりとぞ。

〔同上〕 斯て同じ月の十八日より、心ち煩ひ給ひけるが、漸く、篤くなりて、二十九日の曉になむ、身まかり給ひぬる、御歳七十二歳なり。

さて十月二日に、かねて、定め置き給ひつる、山室の、嶺の、墓所に、葬め参らせ、塚の上に、櫻とを、植て、碑に、本居宣長之、奥墓と、銘せり、此の、文字は、既に、自ら、書置給へるなり、その墓所は、妙樂寺の、境内にて、松坂より、南の方、二里ばかりに、在り、凡て、此時の、事どもは、弟子なる、國人、青木茂房の、書きと、のへて、歎の下、露と云ふ、また、美濃の、越人、加藤磯足が、時雨の、日記と云ふも、有り。

〔同上〕 石原の、正明が、辛酉、隨筆に、ことしは、革命の、運なれば、何事か、あらむと、ゆゑし、が、りしに、



追悼の歌

名高き物しりだちこそおほくうせにしか。何よりも本居先生こそあたらしけれ。古事記傳など、寶とある事つくり出、やことなきあたりにも、物きこしめし、弟子などもよろしきが多かれば、其方ばかりかぬ事なけれど、病退樂の期おそ、からむには、めてなき説教ども、有べく、阿彌迦業も、敷ふべきを辛酉の厄、これぞいみじき事なりける、と云へり。是もげに然る説なり。

〔後鈴屋集下〕

みな人のしのおるけふの、ことのはを、かきあつめてぞ、われはかなしき。

〔うけらが花〕

本居宣長、長月の半よりやみて、廿日あまり九日になんみまかりぬる。ときいて、かたみに、年高くなりぬる物から、今更のやうに驚かれて、

伊勢の海や、二見の浦の、二つなき、玉にたぐへし、人をしぞ思ふ。

わくらばに、同じ世にしも、立へつゝ、迷ひも見ざりし、事の悔しき。

古ことの、道あきらめし、いさをこそ、萬代までの、形見なりけれ。

三大人

〔三十六家下〕 海内英才の上、貴となく、賤となく、其風下に坐して、益道を明かにし、學いよ、いよ盛んなり、嗚呼世の學徒、今に至つて、東瀛、眞淵、宣長の三翁をして、三大人と稱し、古學の祖とし、神の如く敬重して、これを祀るも宜なり。

閑雅

〔玉禪〕 大人の古道のために、心を碎きて、教へ置かれたる有功のほど、また心ばへの、雄々しく閑雅に、正しかりし事も、みな其著されたる、筆の迹どもに、炳焉ければ、記さず、實や大平ぬしも、略傳に書れし如く、神世の古事を説きあかし、大御國の眞事を論じて、空蟬の世に朽せぬ、功を立られけるは、皇神の御靈の、人よりは殊に、幸はひ給へる故よしぞ有けむと、最も辱なく、いと尊くなむ有ける。

〔贈稻掛太平書〕 思ふに、鈴の屋の大人、今は世にならぶ人なう、學の道にかしこうおは

歌風一家を成す

して藍よりも青し、と誰も許しきこえたるに、歌の事は、猶おぼしうるかたありて、群居の教には、更に從ひ給はて、おのれと、一つの門をこそ、立て給ひにたれ。

古學道統の教

〔玉禪〕 然れば此の教へと、古き祝詞、古き歌などを、讀みときて、古意を得たらむ上に、て、神世の道に學び至れ、といふ教へと、我が古道の道統の教とも稱すべくなむ。然るを今の世に、鈴の屋の流れならぬ古學の徒など、大人の、師説を多く論ひ直されたるを、憎み誦るも多かるは、此旨を得知らざる故にぞ有ける。

古學の影響

〔同上〕 こゝに思ひ出たる物語あり。そはいにし文化の中頃なりしが、齋藤彦麻呂が家に、或る俳諧者流の、來りて語りけるは、此間わが知れる人の來て、云ふやう、己が庭に、何處よりか來けむ、ふと龜の子の出たるが、此はめてたき、鮮なれば、その文を書きて得させよと云ふに、予諾ひて、其賀辭を書て與へたるが、其中に、ゆくりなく龜の子の出たる、云々と書るを、龜の子のぬし見て云ふやう、總ての文は宜しけれど、此のゆくりなく、と云詞の有ては、此の頃の戯作物めきて、開ゆれば、此は改めてよと云へるを、心を入れて書たるものを、とは思ふ物から、やがて書替へて得させたりと云ひて、其の俳諧者、その文を持來て、我にも見せたるを、甚をかしく覺えたりと、彦麻呂が語りたりき、此を思ふに、俳諧家は更なり、戯作者までも、かゝる詞を知りて、書く事と成たるは、専ら大人だちの古へ學の、御功德の、世に弘まりて、いつと無く古言を辨へ、吾しらず、其恩顧を蒙れる印にぞ有ける。



縣門中の秀才

〔同上〕 俗、縣居の大人の教子も、百をもて計ふるばかり、多かりしと聞ゆる中に、我が師の大人のみぞ、抜出て、その古道學の大義を貫き得られしを、餘りは大かた歌作りとぞ成たりける。是に就て思ふに、漢籍千百年眼といふ物に、王羲之が經濟の識慮に、精深なりし事共を、記して、然る大才も、字を書くわざの名高きに、蓋はれて、世に知られざる事を論へるは、實に、然る事なり。其は縣居、大人の實に大人たる所以は、古道の意を説出られし功なるを、其事を稱せるは、鈴屋、大人ののみ有りて、餘りはみな、歌を能く詠れしを以て稱へ申せり。詠歌の上手なりしは、彼の大人にとりては、何ばかりの事にも非ざるを、不肖なる徒の、大を識らず、小を知るならひとは、云ひながら、大人の歌に名高きは、いと惜しきことなり。然るに鈴屋の翁の歌は、も、難すべき節こそ無けれ、面白からずと、吾さへに思ひ、世の歌人らも、然は云ふなれど、學問の力に於ては、適に吹毛の難を云ふのみにて、凡ては舌を巻きてぞ有める。是を思へば、縣居の翁の歌の面白きは、此翁の不幸と云ふべく、鈴屋翁の歌の面白からぬは、此翁の幸とも云べくや。其は大をもて稱せらるると、小をもて稱せらるゝとの差別あればなり。

我翁を誹る人ありとも捨ておくべきこと

〔氣吹舎筆下〕 我翁を誹る人ありとも捨ておくべきこと

さきの五條かしのするにつけて、また百ふべき事あり。然るば我徒の中に、俗の直からぬ學者どもの、老翁を誹る事を腹だちて、彼輩の許に消息を贈りて、嚴しく戒め、或は自ら彼等が家を詣ひなどして、人多かる中にて、いたく彼等に、耻見せなどする類まゝあり。いかさまに己が師と頼む人を、すぢなく誹られたらむは、いと口惜ければ、實に理は然る事なれども、己心に思ふや

鈴屋翁を誹る人々の論

う有り。然るは彼輩の、我翁を誹り聞かするを信なふは、彼等に隨ひて學問上願か、さうぬいとなほ、しき輩なり。實に心さとき直き人、たれかは彼輩のいふ事を、用ふべき。彼のとらぬの誹を信なふ類の人には、いかに説きかすとも、覺る世あるまじければ、曉さても有りなむ。人はいかに云ふとも、己も其善惡を知る事あり。人の言ふにのみ任するは、我心を人に預くといふものにて、然る輩を、己が目より見れば、悲しくも痛ましくもあるぞかし。かくをぢなく愚なる輩を、感し掠て、善人のよき事言へるをよしと言はて、あまさへに誹るなどは、實に惜き事なれども、我翁の尊く勝れまし、事は、天下に隠れなく、心さとき公平にもの學ぶ人は、誰も知れる事なれば、彼輩よしいかに云ふとも、其は、野へば、牛の角を蓋敷などのさすが如し。何の統となるばかりの事か有らむ。殊になべての人の耳にも、早く入るわざにて、己はかへりて、嬉とこそ思ふなれ。又師を誹られて、うち捨おくて、ふいひがひなき事の有らむや。其は師に實ならぬ事なり。などいふ人もあれど、己また云ふべき事あり。其は今世に古學者となりの、また歌を教ふる輩、我翁を誹れば、恐なるきはの輩は、猛く思ひて、何某は鈴屋にも、まされりなど云ひて、誹ふから、自ら弟子なども多くなりて、かの酒屋とかいふすぢとなりて、心安く世を渡らるゝ故の所爲なり。我翁の誹れたる事を稱たらむには、誰か彼の輩に隨ふ者あらむ。然れば今世に古學者の輩、歌教ふる輩、おのが榮を好まむとならば、我翁を誹るに及く事なし。これ我翁の高く大なる所なり。早き輩なれど、後泰宮とか偽りて、物もらふ類と思へば、腹たつ事も無きに非ずや。そのうへ、我翁の御心をおしはかるに、何事も古道の、大らかなるにならひ、見直し、聞直し、思ひ存め、事を好れたれば、打捨おかむこそ、返りて翁の御心に、はかなふべけれ。然れども、彼輩より、我たてとるすぢを、誹じて、背を著はし、または目のあたりにて、誹もしたらむには、其はよく理るべきものなり。此は翁もしかせられ、また西戎人だも、師のあなづりおふせし事は、いみじき事にしたりき。また愚者の一得とか云ふらむやうに、彼輩もしよき事をいひ出たらむには、取るべし。強に我翁の非事あれかしと、あなぐり求めるから、希には云ひあつる事も、絶て無かるべしとも云ふべからず。

〔同上〕 鈴屋翁を誹る人々の論

鈴屋翁、岩かくり賜ひてのち、かしこゝに、翁を誹る人ども出来にける。此は掛まくも可畏けれ



ど、神代に天照大神、天岩屋戸にさしこもりましければ、如安火かゝやく神の座を得て、まやぎける古事にひとしく、其が中に儒者どもの講は、己々が痼疾をためられて、幸きめ見たる事の口惜ければ、講るにて、此は彼其の口にくるしとかいふ類なれば、いふにたらず。學問する輩の中にも、つとめて老翁を講る者あるはず、明宮に天の下しるしめし、天孫の大御代に、清和たりさよ、他國人はしばらくおきていはず、明宮に天の下しるしめし、天孫の大御代に、清和たりまゐ來てのち、皇國に學問ふこと始りてより、千年を二かへりに近かれど、此老翁ばかり、正しくめてたき學問のすぢを、感たる人ある事なし、萬風かく云はゞ、彼我家の傳を尊しと稱る類に、聞なす人もあるべけれど、さにあらず。尤もまだ、いといはけなかりし類より、この老翁に置ひて、餘と競べ見ざる人には、まゝ然る類の人もありむか、其はいかにもめれ、己はいといわけなかりし程より、漢魏にのみ、耳なれ日なれ口なれて、大かた漢語にいへる事のみ、うべなひ語りけるを、遠きとし、此翁の香とも讀て、熱々味ひ試み、始て皇國の萬國に卓越て、尊き事をかほえ、古よりもろの識者、この老翁の如く、正く物を辨へたる人の無りし事を知りそめぬ。かゝれば、更になづみて、かくいふまてはなし。公平にもの學びする人は、よくこゝを辨へ給ふらむ。さて翁の學問は、しか大じき事なるを、彼の毛を吹て、疵を求むるとかいふらむやうに、少しの事を見出して、講らむとするは、腹あしきわざにあらずや。しか少かの事をいひて、人を講らば、天地の初りしよりこのかた、萬國にあやまりなしといふ人は、いかて一人もあらむや。翁へば、我翁の學問は、數丈にほびこりて、愛たく榮えたる松木の如し。さばかり大きな樹に、一葉二葉は、枯葉もなごか無るべき。その一葉二葉の枯葉をもて、其木の榮をそしるは、ひがことならじや。されば、古學する輩の、此老翁を講るなどは、學問の冥理もたえなむとぞ思ふ。然るは、しか講る輩、たれも、此翁の御臨察らぬ者もなく、其一葉二葉の小疵を求め出して、餘によき事を考ふばかりの眼になりたるも、皆この翁の賜はれる幸ぞかし。然るにさる事をば思はずて、よき事どもをば、己れひとりにて考へ得たる如く、さへづりまわるは、其した心さへ思ひやられて、いと片腹いたさずかし。見よ、さる輩のひがごとのみいひ居るを、さてしか言まわる輩をよく尋れば、大かたは、歸居翁の教子だちの、残り居る輩ぞ多かりける。然るは、此輩、いかなれば講るぞと思へば、我翁とは、同

翁の百年祭に當りて

じ縣居の教子にて、ひとつむしるに居たりしを、己々は、歳たけ観かゞみて、八東監しるくさへ、まがりなどするまで、何のなし出たる事もなく居る間に、翁はいとよく秀給ひて、數々の書を著し、其名天の下にとゞろきて知らぬ者なく、其弟子等にも、優れたるが如くなりなして、世に用ひらるゝ事をねたみての所爲なり。此は大かたの人情にて、己とひとしなみなりし人の、我より遙に立のぼりたるには、嫉く思ふもわりなき事なれども、此輩の翁の秀られしを、嫉むなどは、餘に己が身の分を、はからぬものにて、俗の語にいふ、鶴の飛ぶを見て、いし鶴のじだむむと、かいふ類なり。此輩實に我翁の眼にひがごとく思ふよしあらば、なごて世におはしける間に、數く論ひて、其ひが事を改めまゐらせざりしぞ。たまゝ玉あられ論などの如き物もあれど、論に二十枚ばかりの物を、三人四人して考へしるし、其うへきたなくも、其名を隠して、長みながら、世にほどこらしけれど、一訂もいひあてたる事のあるかは、三井高隆の答にて、更に一ことも出ぬにあらずや。然れど、是らばまだしも、翁の世におはしける間に、言へれば、少しく益き所もあれど、世に居給へるを、りは、鈴屋老先生、翁は天下の模範、百世の師なる事疑ひなしなどいひ、長て物とひ、實に奴顏婢膝ともいふべきさまに敬ひたるを、世人の其を知らずと思ふにや。此頃も聞くに、本居は、藝術醫學、宣長は、不學文盲などいひて、人に消息せる者もありとなむ。いかに今は世に坐ぬとて、よくもかゝる狂言をば放ちけるよと、そゝるに可笑くもあり。またあはれ、世をこ人も思ふぞかし。此輩の所爲は、響へばいと剛き犬の通る時は、弱き犬どもは、耳をたれ、尻を尻にかいばさみ、人の軒下などに深く潜みて、聲だにあげず、いと見苦しきものなるか、其剛き犬の遠く行すぎで、影だに見えぬほど、やうく軒下より這出て、大きな聲して、盛々しく吠なむとするものなり。此輩は、誠この弱犬のしわざに異なる事なし。かくても、丈夫といふべきやば。

〔國語のため〕 本居宣長翁の百年祭にあたりて

予輩は、深く翁が百年祭の日に遇ふを得たる稀有の幸運を悦び、こゝに翁が學問の歴史に於ける地位を、その先輩、その教育的研究、並にその成功等の種々の方面より追憶して、以て聊か翁を祭る辭にかへんと欲す。蓋し享保十五年五月七日、即ち西曆千七百



三十年六月二十一日より享和元年九月廿九日、即ち西曆千八百零一年十一月五日晩に至るまでの翁が七十二年の生涯は、實に後世の研究を値するもの一にして足らざればなり。

願ふに、學問は常に發達の歴史を有し、いかなる偉人といへども、亦た古き時代の見にして、同時に新らしき時勢の父たるに過ぎず、殊に學術の綜合統一の側に成功したる翁の如きにありては、嘗て翁の前に出てたる幾多の學者は、悉く翁の先輩たる名譽を辭すべきにあらず。まづ翁が學問の正系たる皇學及び神道の上に、刺を奉れる師真淵あるを始めとして、音韻學の上には、契沖、文雄及び當時の悉學學者たる桑門の先輩あり。手爾波研究の上には、定家以降、長伯一室等に至る歌學者及び同時代の學者として、翁の最も畏敬せる富士谷成章あり。動詞研究の上には、真淵蘆庵あり。古書を解釋する上には、契沖、季吟、真淵あり。かくの如く多數の先輩ある中に、殊に予輩の注意すべきものを契沖阿闍梨とす。

翁に對する真淵の地位は、多言するを須ひず、既に師弟の誼あり、からざるを清くはなれて、もはら古のこゝろ詞をたづぬる學問は、わが縣居の大人よりぞはじまりける、といへるも自然のことなり。たゞ予輩は、わが國語學の興祖として、其學説は三百年の思想界を支配しつゝ、しかも釋門の徒たる故を以て、國學者の崇敬を受くること少かりし契沖が、いかに翁に影響を與へたるかを看取せざるべからず。まづ翁が始めて其

契沖と宣長と

一生を國學に貢獻せんと覺悟するに至りたる契機は、實に契沖其人の興へたるころならずや。玉勝間卷二の「己が物學びのありしやうの條に、翁は自ら説明していへらく、さて京に上りしほどに、百人一首の改觀抄を、人にかりて見て、始めて契沖といひし人の説を知り、その世に卓れたる程をも知りて、此人の著したるもの、餘材抄、勢語斷などを始めて、其外も次々に求め出て、見る程に、すべて歌學のすぢの善惡けぢめをも、漸々わきまへさとりつ云々、これ寶曆六年の事にして、翁が二十七歳の時なりしなり。

かくの如くして、兩者は默契し、難波の一阿闍梨は、其死後五十餘年にして、茲にこの高弟を得たるなり。

しかも其の翌年、即ち翁が二十八歳の時、真淵の冠辭考を見て、益々古學を修むる志を堅くし、遂に其の三十二歳の時、一夜の謁を縣居の門にとるに至れるも、其契機は、實に五年前、改觀抄を見たる時に成りしにあらずや。されば、己が古學は、契沖はやく其の端を開けりといひ、この側に於ても、契沖の真淵よりも、寧ろ先輩たるを認めたるもの、決して怪しむに足らざるなり。殊に肥傳其の他の著書に於ては、本居翁の學説は、真淵よりは、寧ろ其系統を契沖に有することを見得べし。たとへば肥傳卷一に、四聲を論じて、平上去聲の事をのべ、日樋火、毛蹴氣、橋端著、弦釣鶴の如き、音的分化をとけるが如き、又同卷に、假名遣法を説きて、こゝに難波に契沖といひし僧ぞ、古書をよく考へて、古の假



字遣ひの正しかりしことをば、始めて見得たりし。凡て古學の道は、此時よりぞ、かつかつも開けそめける。いと／＼ありがたき功になむ有りける。といへるが如き、祖述の跡の明かなるもの、一にして足らず。これを要するに、翁が偉大なる學問の系統は、一たび契沖より出て、分岐發達せる研究の、再びこゝに統一せられたるものとして考ふるも、甚だしき謬見にはあらざるべし。

一方に契沖の勢力が、此の如く大なると共に、翁を識るものは、又一方に新井白石を想ひ出でざるを得ざるべし。白石の歿せるは、享保十年にして、即ち翁とは六年を隔て、相知るを得ざりしなり。この均しく日本國民の誇るを得べき、兩偉人の間に存する著しき類似と、甚だしき差異とは、翁を研究する者の看過するを得ざる處ならむ。まづ漢意を排し、國學を復興せん事は、既に早く白石の唱へたる所ならずや。白石は、漢文が我國語の發達を妨げたるを論じ、大に之を悲しみたり。白石は漢學者なり。しかも主客の別を辨へたる漢學者なりしなり。この點より見て、わが翁は、其友谷川士清と共に、大に白石に負ふものありといはざるべからず。なほ其事業の多面多趣なること、兩者の間に著しき類似をなせり。綿密なる財政家として、敏腕なる外交家として、歴史家として、文章家として、詩人として、さては西洋學の鼻祖、卓見に富みたる語學家として、驚くべき多能多才なる白石は、皇學及び神道を中心として、神學者として、歴史家として、又一個の語學家として、而して又たとへ秀拔せる他位を有し得ざるにせよ。詩人とし

新井白石と宣長と

て、文學批評家として、この翁と雙々相對して、我學界に異彩をはなてるにあらざや。しかも此兩偉人を比較して、殊に予輩の趣味を感ずるものは、蓋し他の一方に於て、奇怪にも多くの反對、若くは差異の點を認め得るによるなり。今これらの點を述べんとするは、單に興味ある事業たるのみならず、同時に、また翁が真正の面白を發揮するに必要なればなり。

白石との比較  
其一

其二

其三

其四

其五

翁と白石との間に存する反對の點は、第一に、白石の峻嚴冬霜の如きに對し、翁の濃厚春風の如きにあり。一方は廟堂に立て、堂々の議をなし、君の息にふれて、毫も顧みざるに、一方は庵を結び鈴を鳴らして、從容自適す。性格の差異驚くべきにあらざや。第二は、白石が弟子を遺さざりしに反し、翁は全國に門弟を有し、享保年間に至ては、其數四百九十人、六十六國中、弟子の無きは、たゞ二國なりといふ。第三に、白石は政治上の偉能あり。翁は此側にては、殆ど無能なり。性格と時勢とは、自らかくの如くならしめたるなり。第四に、兩者は均く博學多識なれども、白石は事物の實質に立ち入りて、創始を喜び、啓發を事とせるに、翁は考證を基とし、既成の事物を綜合組織するに長ぜり。讀史餘論を見よ。東雅を見よ。東音譜を見よ。前人をぬき出る白石の創始的才能は、明に見るを得べし。之に反して、記傳を見よ。玉之緒を見よ。三音考を見よ。前代及び其同時代の學問は、偉大なる手腕の下に統一せられて、後世發達の基礎の、玆に置かれたるを知らむ。第五に、白石は理を本とし、宣長は信仰を本とせるを見る。一方は科學者なり、一方は少くも或



其六

度までは宗教家なり。彼は韓語、梵語、宋元の音進みては西南洋の蕃語までが國語の中に侵入したるを説き、此は鼻音を排し、半濁を説き、濁濁なる外國音の清純なる國音を侵す能はざるを説く。第六に、白石は實地の日本にむかひ、翁は理想の世界に進み入らんとする。由來復古學は一種の理想なり。

其七

讀史餘論、藩翰譜折たく柴記を讀むて、肥傳、玉勝間に及べば、著しき徑庭を感ずべし。第七に、其の生涯の徑路に、大なる差異ある事は、いはてもあるべし。土屋侯の一足輕の子として、人を驚かしたる幼年時代と、失意に滿ちたる中年時代とを、送りたる後、堀田甲府二侯に歴仕し、忽ちにして天下の大事に參與し、榮譽寵遇を極めたりしも、六十一歳時勢の變に遇ひ、一朝にして榮辱地をかへ、寂しく晩年を終りたる白石と、幸福なる木綿問屋の息子として、十分の普通教育をうけ、書を好むが故に、醫を學ばしめられ、紀州侯の奥殿に奉仕して、靜かに好學の心を養ひ、家には二男三女を擁し、遂に山室山に千歳の春を樂めるわが翁と、驚くべき境遇の變化は、又たその性格に差異を生じたる一の原因なるべし。第八に、伊勢の如き平和の地に生れて、徐に其の學問を發達せしめ、一は江戸の如き混亂の渦中に投じて、世と戦へり。翁と白石とは、性格境遇の差異、此の如く大なれども、均しくこれ日本の人傑にして、同一の大なる天才が、兩個の極端に發達せる好例を遺せるものといふべし。

其八

富士谷成章と  
宣長と

契沖、眞淵の外、尙翁に一の大きな關係を有したる者を、富士谷成章とす。此の同時代の

人爲の教化

兩學者が學術上の關係に就ては、予輩多く之を知らず、或は兩者の研究、同一の源泉より出て、異りたる方向に發達せしにもあるべし。翁が玉勝問卷八に、口を極めて成章を賛したるを見れば、相互の關係が、決して尋常のものにあらずしことを想ひ得べきなり。

予輩は既に翁の先輩に就て述べたり。予輩はこれよりかくの如き先輩を有したる翁が、いかなる人爲の教化をうけたるかを見ざるべからず。傳によれば、翁は大和國吉野にいつき奉る、水分神社の申し子にして、繁盛せる一の商家に生れ、當時の中等以上の教育を受けたるもの、如し。八歳の時、西村某に師事して、手習を始め、十二歳には、齋藤松菊に従て手習し、岸江之中によりて、四書を讀み、又猿樂の謡曲を習ひ、十七歳にして歌を讀み始め、濱田瑞雲に射を學び、又茶の湯を習ひ、正住院に就て、五經を讀みたりといへば、當時に於ては、立派なる士人の教育を受けたるといひて不可なし。二十二歳の時、兄定治、江戸にて歿するによつて、家をつぎ、二十三歳京に上り、堀景山によりて漢學を究め、次で二十五歳には、典藥武川幸順法眼の弟子となりて、小兒科を學び、春庵と號し、二十八歳、郷に歸りて、小兒科醫を業とせり。其の前二十七歳、契沖の書を讀て、古學研究の志を起し、これより學業並び進みたるべし。蓋し翁が七十二年の長生涯は、其の結婚したる三十三の年、即ち寶曆十二年、西曆千七百六十一年を以て、前後の兩期を畫することを得べく、而して翁は、この三十三年の前半期に於て、深遠なる素養を積



その旅行

みたるものなり。されば結婚せし翌年、寶曆十三年には、既に石上私淑言業文要領等成り、又天明和元年には、記傳の大著述が起稿せらるゝに至れること、決して偶然にあらず。かくの如く幸福なる教育を受けて、充分の素養を積み得たるに伴ひ、なほ學術の發達に幸運を與へたるは、その旅行なることを忘るべからず。蓋し旅行が、人の見識を廣め、性格を高めて、偉才の素養をなすことは、古來常に見る所にして、翁も亦この好運を有したるものとす。即ち十三歳の時、大和水分神社に詣り、十九歳の時、近江多賀神社に詣り、次で京都の間を往復し、二十二歳の時、江戸に行き、富士に登り、其の京に上りて堀景山に師事せしは、二十三歳の時にして、家に還りて醫業を開きしは、其の二十八歳の頃なり。凡て其の修業時代におけるこれらの旅行は、一方に常感を養成せしと共に、一方には日本の地理、歴史を理解する上に、正しき根據を得しめたり。即ち本居家の學問をして、不動の基礎に立たしめたり。

學問と其成功

予輩は既に翁が教育素養等に就て述べたり。余輩は今の翁が、學問と其成功とに就き、漢意を卻け、皇國の道を廣め、大和魂を發揮し、以て一世の迷夢を覺醒せんとは、いふまでもなく、翁が學問の中心にして、歌學、文學、語學、史學の如き各學は、皆この中心に貢獻すべき手段たるに過ぎず。しかも手段たる各學は、何れも後世それ自身に發達すべき基礎を得たり。春滿、真淵のはじめたる文献學は、翁に依て初てその基礎を得、契沖によりてうちたてられたる國語學は、翁に至て遂に時期を盡せり。社會に於ける地位は、紀

社會に於ける地位

著述

伊家の奥醫にして、門弟には、名古屋の横井千秋、鈴木辰の如き名士あり。歿年即ち享和元年には、四月上京して、四條烏丸等諸公卿の前に講筵を開けり。地下の學者には、學術上の敵ともいふべき堂上家、諸公卿の招きをうけ、歴世の名門をして、甘じてわが講筵に侍せしめしに至ては、翁が成功も亦た極まれりといはざるべからず。一生を論争の渦中に没し、後世をして、始めて自説の眞價を認めしむるが如きものは、其の幸福、蓋し同日の論にあらざるなり。翁の研學の進境が、いかに速かなりしかは、其の著書の際績として成れるを見て知るべし。三十四歳の時、即ち寶曆十三年、石上私淑言始めて成りてより、同じき年に手枕成り、古今選成り、業文要領成り、翌明和元年には、古事記傳既に起稿せられ、三十五箇年丹精の偉業は、茲に始まれり。これより寛政十二年、翁の齡七十一歳に至るまで、毎歲殆ど一種若くは數種の著述あらざる無く、その能動誠に驚くべし。試に學術の方面を窺はむか、音韻學者としては、字音假字遣に、始めて於乎の所屬を辨じ、文法學者としては、玉緒に手爾波研究の統一を與へ、活用抄には、八衢の生るべき默契を與へ、さては古語の註釋家としては、記傳の大著あること、更に述べんまでも無し。又た翁は、専門の歌人にもあらず、文人にもあらず、されど玉霞、阿刺波、鉗狂人、國歌八論評などにおける所論は、優に翁をして、一世の文學批評家たらしむるに足れり。その研究の此の如く多趣に、その成功のかくの如く完美なる上に、余輩は翁が學問の模範者として、欽慕すべき抱負と、崇敬すべき地位とを有することを忘る可らず。この

音韻學者

文法家

古典學者

歌學者

文學批評家



側に二個の點あり。その一は玉勝問卷二の己が教へ子にいましめおくやうの條にすべておのが人を教ふるは道を明にせむとなれば、かにもかくにも道をあきらかにせむぞ、吾を用ふるに有ける道を思はて、徒にわれをたふとまんは、わが心にあらざるぞかしといへる、これにして、わが徒に、又よき考のいて來らむには、必ずわが説にならざるみそといへる縣居の金言は、又た翁の家訓なり、惜いかな門弟輩、其の師を離らず、朋黨を結び、相比周して、終に斯學の發達を妨げたり、そのことは、翁が新しき學説を主張せることにして、しか世の中の論さだまりて、皆人のしたがつ世になりては、始よりすみやかに改めしたが、ひつる人は、かしく心さどくおもはれ、ふるきにかゝづらひて、かくとほほれる人は、心おそくいふがひなく思はるゝぞかしといへるなど、玉勝問一の新説を出すことの條、同二の新にいひ出でたる説は、とみに人のうけひかぬ事の條などを見れば、明に翁のわが學界に於ける革新の先覺たるを知るべし、それかくの如し、故にこれを前にしては、幾多の先輩あり、これを同時代にしては、成章の如き碩學あるにも關らず、一世の師表として、本居家の學風を建立するに至れるもの、誠に偶然にあらず、明治の聖世に當り、我國語、國文の學は、たとへ其の根底より改造せらるべき氣運に向へるにもせよ、しかく斯學を發達せしめたる偉人偉業に對しては、余輩は最も熱心に尊敬と感謝とを表白するに躊躇せざるなり、故に余輩は、生をこの紀念すべき日に享けたる幸運を思ひ、茲に翁が偉業の一斑を陳述して、以て祭詞に代ふと云ふ、明治

雜載

像の上にかける詞

三十四年七月稿、上田萬年氏

〔藤垣内文集〕 わが翁の像のうへにかける詞

此繪は、わが翁の像のうへにかける詞、六十一の秋、みづから書うつして、その上に、しきしまの、やまと心を、人とは、朝日に、ほふ、山櫻花、といふ歌をかきおかけける、そのかたをうつしとれるなり、おきなは、池大納言頼益卿六世の後、本居縣判官平朝臣建郷の末にて、建郷主の曾孫、左馬助武武主より、世々伊勢國司北畠の家につきて、一志郡阿阪になん住れける、そのうち、翁が五世の祖、左兵衛武秀主は、蒲生宰相氏郷に仕へて、陸奥の會津にうつり、天正十九年といふとし、南無九戸といふ所の戦ひに、敵あまたうちとり、武きふるまひありて、軍のうちにうせられきとぞ、そのつぎは、此松坂にすみ、民にてありしかど、むげにいやしきにはあらで、家も富榮えてなんありけるを、父定利主の世に、年経て子なき事をうれひて、大和國眞野にます、水分の神にこひ申されける、そのしるしありてなん、享保十五年五月七日、此人は生れ出られける、かくて十一のとし、父主におかれてのち、大かた母刀白の心おきてにしたがひ、相ばかりて、廿三の春より、京にありて、まづからぶみ學び、次に醫師の學びと、六とせばかりをへて、國にかへりて、醫のわざをなん、家のなりとはせられける、又をさなかりし時より、書見る事を好み、歌學びの道にふかく入たり、古き集どもの註さくなどに、心ざしめられしより、ありこし學びのありさま、又縣居の大人の教子となりて、古事學びにまめやかなりしも、玉かつまの書にしろされたるが如し、神の道のために、心をくだきて、れもごろにをしへおかれたる功のほども、又こゝろばへのみやびかに正しくて、萬にいたりふかく、さばしく、雄々しかりしも、みなそのならはされたる巻々の、筆の跡どもにしろされたれば、こゝにはしるさず、六十あまりにて、わが肥の殿にめされてより、度かみれ若山にゆきかひつゝ、殿の御前にさふらひて、文どもよみつかへまつりて、さまゝ厚きめぐみの賜物どもありけり、その字はじめは春庵といひしを、末の頃ほひより、中庵とぞ、改められける、すべてよはひの末まで、物かく手つき、書よむこわづかひをはじめ、立居のさまも、世の老人のやうにはあらで、わかく物きよげに、いづこ一つ、老おとろへたりとも見えずて、耳のみなん、年月



水分社に詣  
て詠める歌

にそへて、たど／＼しかりけるしも、脚長かるべきしなるべしと、みな人たのもしう思ひわたりけるを、享和元年九月廿九日、とし七十二にて、十日ばかりがほど、はかなきこゝちにわづらひて、うせられぬるぞ、あかずかなしきわざなりける。森は松坂の雨、同じ飯高郡、山室の妙樂寺山の上にて、松と櫻を植ゑたる、その森のまへに、石ぶみをたて、本居宣長之奥墓としるせり。神の代の古事をとよあかし、大御國の道のまこととをさとして、うつせみの世に、くちせぬ功を立てられけるも、皇神の御靈の人よりは、ことにさきはひ給へるゆゑよしぞありけむと、いともかたじけなく、尊くなんありける。かれ後の名、秋津彦美豆櫻根大人とたへいよ。

わがうしの、うつしをみれば、宇都志意美、今のうつしに、ますことおもほゆ。

〔鈴屋集〕

紀國よりかへるさに、吉野にもおのして、水分社の御社にまうて、

本居宣長

〔鈴屋集〕

とりあへぬ、旅にしあれば、二つなき、心のぬさを、神はうけてよ。

本居宣長

像に添へし歌

〔玉樽〕寛政二年、六十一になり給ふ八月に、みづから像をうつし置きて、歌よみて添へ給ひき。其の歌は、師木鶴の、後心を人とは、朝日に、ほふ、山櫻花。となむありける。此は子孫の末に傳へよと、家に遺されしなり。

後に教へ子たちの、其の像を得まほしがりて、畫工に寫さしめむと請まをすに、法橋、宮藤有慶といひし、畫工の寫せるが、大人の御心に叶ひて、此れが寫せる像を、其の齡の数ほど、六十一枚に、かの歌をかき給ひしとぞ。其有慶が身まかりて、後、尾張の吉川義信といひしが、寫せるを、めて給ひしと、聞たり。己れもその六十一枚の中を、一輻得たり。また義信にあつらへて、遺しめたるも有り。

〔稻葉集〕

故翁の像の、かけ物の箱のふたに、大平が筆そへよと、常雄がこへるに、

起居動作

玉銚百首解  
結

〔玉樽〕千代までも、かけてわするな、をしへおく、此師さしまの、やまと心を。の老人のさまには、非ずて、若く物清げに、いづこ一つ、老衰へたりとも見えず。耳のみなむ年月にそひて、遠くなりけるも、脚長かるべきと、昔人たのもしく思ひわたりけるを、十日ばかりが、脚はかなき心に、煩ひて、交られけるは、飽かず懸しき事なりしと、語られしは、御傍に近く、久しく仕へ奉れる主に、し有れば、實に然も有べき事にこそ。

〔玉銚百首解〕

（前略）

此ふるまなびの、始は、難波の契神あざり、古き代の書どもを見

鈴屋集後書

明らかめて、すぐれたる註釋どもを物せられたるを、そのかみ、大かたの世には、しる人もなかりしを、たゞ一所、水戸の殿の、さときこしめし信じて、安藤何がしを使にさして、せんごろにとぶらばせ給ひつゝ、萬葉集の代匠記など、かゝしめ給ひけるなどぞ、そのはじめなりけむ。しかば、あれど、世にひろく行はるゝ事は、遠江のくにの岡部、大人の、田安の殿につかうまつりて、さまよ、仰ごとくもをうけたまはり、雄々しき後、たましひをたて、正しきいにしへ、意を、ひたぶるに、しへみちびき、世の人々をいざなひて、うけはり物せられけるほどに、なん、やう／＼天の下には、ひろまりにけるを、わが本居、大人は、その學を受つぎて、いにしへ今の書どもの、意ことばを、いよ、いよ深く考へて、神代の御ふみの尊く、妙なるおもむきを、深くさとり、こまかにわきまへて、なん、こゝらの書ども、書あらはし給ひけるほどに、わが殿の、殿人にめして、つかうまつらしめ給ひな、ど、厚き御惠の光さへそひて、大人の功も、いよ／＼、たちて、このまなびの道、世にみさかりになる、まゝに、年ごろ四方の國々より、したひまわりて、したがへるともがらも、いよ／＼おもひはげみ、つゝ、その業をあひたすけて、世にひろむるなかに、（下略）

〔鈴屋集後書〕

わが翁、いとわかしくしほどより、ふみ見ることも、歌よむことも、なんこのみて、何となく物せられけるほどに、年月にそへて、いとゞしく、心にしみて、何わざより、おもしきことになんせられけるとぞ。さるはもとより、心のいたり、遠からぬ人にやありけむ。よるひるとなく、ひろく學び、深くたどりつゝ、世にしるく功見えける。道のをしへば、さるものにて、奈其のはの名におふ御代の、萬の言の業を、はじめ、それよりあがりての世々の御門の、高きしちへ、又こ



遠言

「家の昔物語」 遠言の事

ちよりの御代々の撰集にいたるまで、いとよく考へて、其とけおたきをときあはせらるのみならず、詞のつかひさまてに、なほのさだまりの、おろかに思ひすまじきゆえしをわきまへ、又ちかき世の一ふりには、いやしくよからぬくせあることをしりなど、すべて代々の要、人々のよみさまをも、よくあぢはひてなんありければ云々。(本居大平)

一、我等相果候は、必其日を以て忌日と定むべし。勝手任せ、日取を違候事、有之間敷候。擇時刻は、前夜の九時過より、其日の夜の九時迄を、其日と定むべし。誓へば晦日の夜の九時過よりは、来月朔日にて、朔日の夜九時迄朔日なり。右の刻を以て定め候べし。

一、相果候て、葬送迄の間、念佛申候事無用に候。但し法樹院後候て、佛前にて、勤致候儀は格別なり。一、沐浴は世間並にてよろし。沐浴相濟候は、如平日盤を剃候て、髪を結可申候。衣服はさらし木綿之綿入登、帯同断、尤裕にても、單物にても、帷子にても、其時節之服可爲候。麻之十纏、木造之纏、物、尤脇指計にて宜候。随分慶末にて、只形計の遣り付にて宜候。棺中へさらし木綿之小き布團を敷可申候。随分細うすくて宜候。惣體衣服随分慶末成布木綿を可用候。襦袢を紙にていくつも包み、棺中所々死骸之不動様につめ可申候。但し丁零にひしとつめ候には、不及、動き不申候に所々つめ候てよろしく候。棺は箱にて、板は一通り之杉之六分板に可爲、さつと一返り削り、内外共美濃紙にて一返張可申候。蓋同断、釘メ、尤ちやんなど、濡し候には、不及、必々板等念入候儀は、可爲無用候。随分慶相成板にて宜候。

一、右棺者山室妙樂寺へ葬可申候。夜中密々、右之寺へ送り可申候。太郎兵衛、並門弟之内、空州人送り可被、參候。

一、送葬の式は、掛歌寺にて、執行候事勿論なり。右之寺迄、行列如左。

○提灯持  
○提灯持

一 提灯はかけ流し、白紙りの箱提灯なり。持人か、んばん盛箱、

一 良刀白布之袋掛々持人衣服等平日之通り

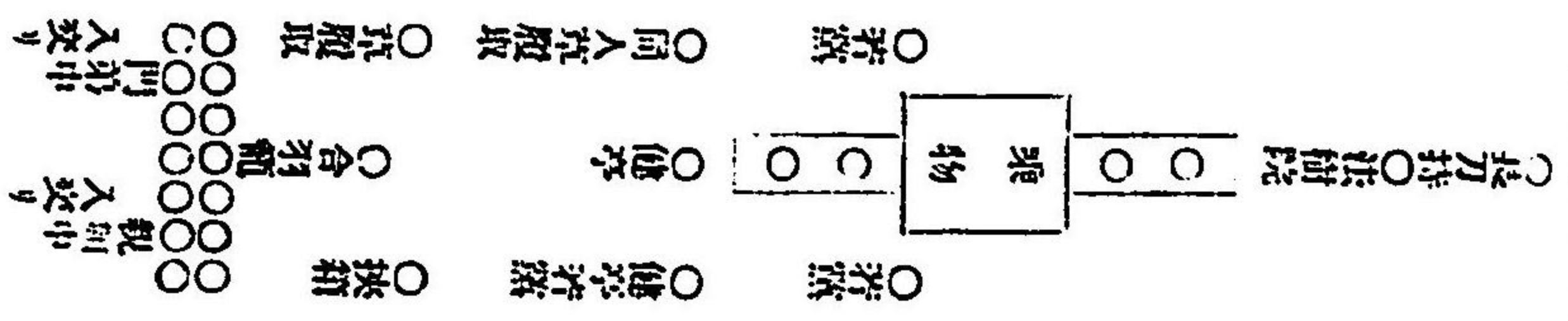
一 乘物 白布にて包む俵同敷

一 四枚盾、障尺衣服常體

一 健卒衣服白衣服ノ十纏  
大小紙にて包

一 袂箱、白布ゆたん

一 したしき門弟中  
座上下可爲



本居宣長

(雜載)

282



巳上

右之通にて、樹敬寺木堂迄空送なり。  
位牌三具足等、初めより木堂に飾り置くべし。

幡、天蓋、挑灯等無用可爲。

樹敬寺へ乗物、並道具代、相應に致施入、乗物長刀等、此方へ持歸るべし。

一樹敬寺にて、墓は道休大徳御墓之右際へつゞけ、道へ張出し、地取可致候。尤右之地面、貳尺五寸許、道へ出し候所、樹敬寺へ致相對買取可申候。後日お勝相果候は、此墓地へ葬可申候。

一我等死骸之儀は、妙樂寺へ葬り申度、葬式は樹敬寺勿論之事。

右之段本人遺言致候旨、樹敬寺へ送葬以前、早速に相斷り可被申候。  
右は隨分子細は無之儀に候。

樹敬寺墓へ建候石塔之圖

蓋は一重



駁  
居士年号月日没

脇  
大姉年号月日没

裏  
本居春庭建

高岳院石上道啟居士  
圓明院清室惠鏡大姉

家内佛壇に安置候位牌も此通可爲候

右戒名之儀者、書付候而樹敬寺方丈へ道し、此通りに付被矣候様に申入、方丈より書付取可申候。

一妙樂寺墓地之儀は、右之寺境内にて能き所見つくり、七尺四方許之地面、買取候間、相定可申候。

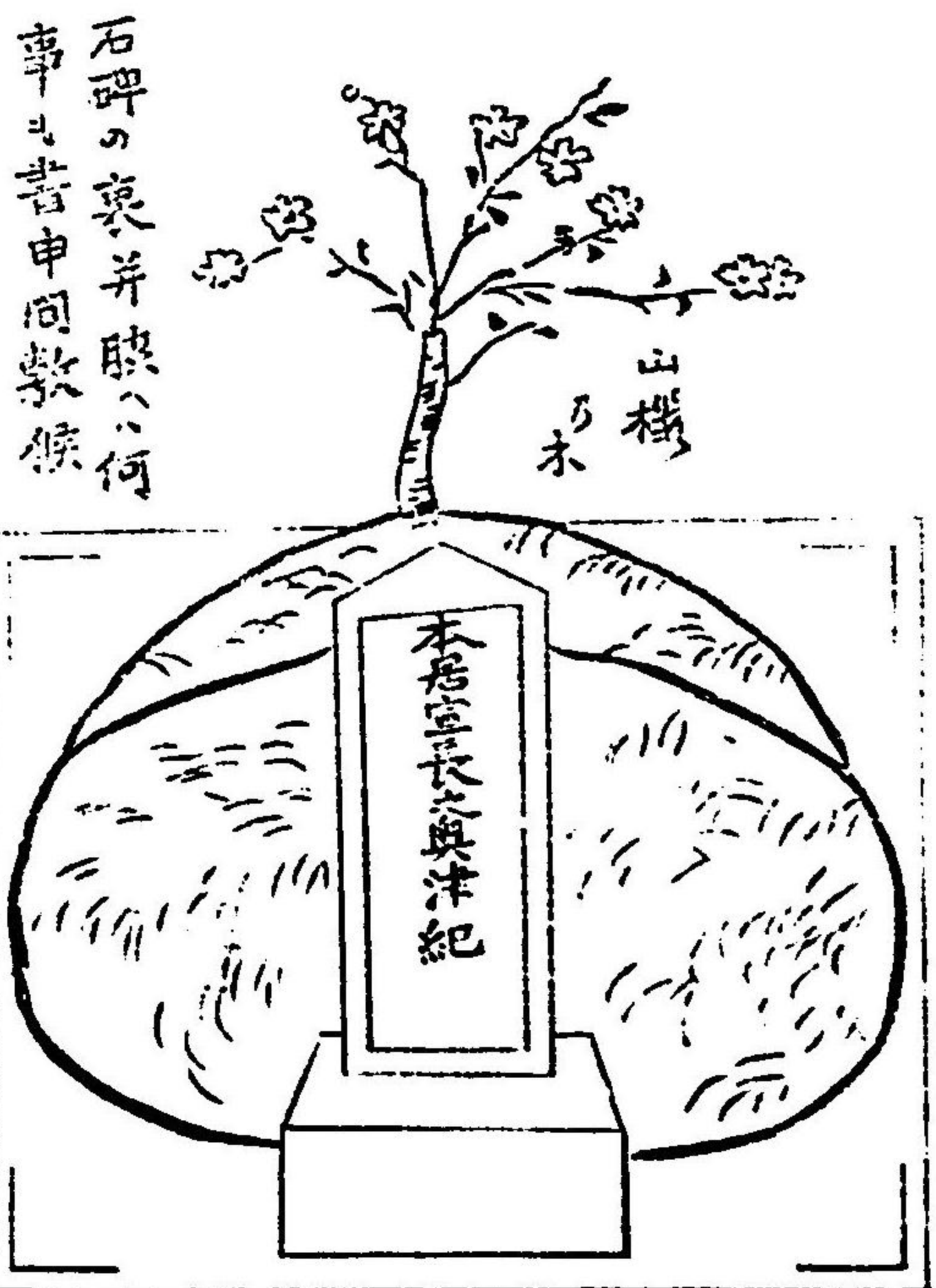
本居宣長

(雜載)



候。葬候節、穴深さ七尺餘にて宜候。埋め候世間並にて、子孫無之候。  
 一 墓地七尺四方計、真中少後ろへ寄せて、塚を築候而、其上  
 へ櫻の木を植可申候。塚之前に石碑を建可申候。塚高さ  
 三四尺許、惣體芝を伏せ、随分堅く致し、崩れ不申候様々  
 若崩れ候所あらば、折々見廻り直し可申候。植候櫻は、山  
 櫻之隨分花之宜き木を、致吟味植可申候。勿論種々とし  
 粘候は、植替可申候。

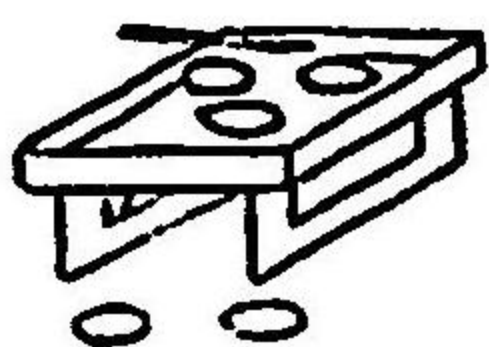
地取  
之圖



右石碑之頭は、如圖( )ヶ様に可致候。碑高さは此外なり。四尺計横井厚さは石等、見合せたるべし。尤至重なり。石碑之前に花筒など立候事、無用に候。惣地取り七尺四方之塚にも、墓石を伏せ申度候へ共、餘程代物掛り可申候間、夫は道而之事に致し、先當分丸石にてもひろひ集め、並べ置可申候。

- 一 後々妙樂寺墓參は、一年に壹度、祥月計にて宜候。夫も雨天、或は去支等有之候は、必當日には不限、前後之内見計ひ參可申候。祥月には、毎年妙樂寺へ齋米壹升、銀札壹包づゝ納入可致候。毎月忌日墓參りは、樹敬寺にて宜候。
- 一 他所他國之人、我等墓を尋候は、妙樂寺を教へ道し可申候。
- 一 忌中之儀、法事其外、諸事世間並に致可致候。初盆、並年忌等右同斷、世間並可爲候。
- 一 忌中之内、一度當所門弟中へ、非時を致さるべし。尤宅内は、間狭に候得者、法樹院にて可致候。
- 一 染筆歌五十枚、認置候間、したしき門弟中へ、見合壹枚づゝ、道し可申候。
- 一 毎年祥月には、前夜より座敷床へ俵掛物を掛け、平生用候我等机を置き、掛物の前正面へ靈牌を立て、時節之花を立て、燈をともし、香を焼候事は無用、膳を備へ可申候。尤膳料理は、魚類にて四作り、給汁飯平しやうじん物計にてよろし、焼物(切燒)右之通可爲候。酒はみき徳利一對、膳具は白木之足付のべん、椀は茶碗。

俵掛物の前へ立置候靈牌之圖如左



かくのごとし  
 尤べんは白木の常體之足付なり  
 三方は無用なり。



是は平日机之傍に置き、日々手馴候櫻之木の筒有之候。右之筒を即此靈牌に用可申候。尤齋へ立候所は、筒之本をば切りくはさず、其儘にて齋を廻り候て、左込やうにすべし。此靈牌常には、大切に致し、仕懸置べし。



後シテ 秋アキ 彦ヒコ 彦ヒコ 美ミ 豆マメ 櫻オウソウ 根ネ 大人オホタチ

一 毎年祥月には一度づゝ可成長ク、手前にて歌會を催し、門弟中相集り可申候。尤祥月當日には不暇、日取りは前後之内都合宜き日可爲なり。當日にあらず共、歌會之節も儀掛り、右之通り可申候。但し其節、別に儀へ懸備へ候には不及。懸は當日にて宜候。歌會の節は、酒計備へ可申候。且又歌會客支度、一汁一菜精進可爲候。

一 家内佛壇へ致安置候位牌は、世間並之通り、戒名前段之通りなり。尤毎月の忌日靈體等も、是迄致來候御先祖述之通りに可致候。致精進候儀も同断に候。  
一 家相續跡々總體之事は、一々不及申置候。親族中斷分むつまじく致、家業出納家門結斷無之儀、永く相續之所、肝要にて候。御先祖父母へ之奉行不遇之候以上。

宣政十二年申七月

健 享殿

太郎兵衛殿

宣 長判

〔帝國文學三〕

本居宣長の書讀

其讀 本居宣長の書

御細書之御趣、委細承知仕候。

一 記傳每卷の終り、木綿宛御成板の記讀の内へ、本文撰者筆註、一筆。

右之趣も御記し被成度被思召御座候由、委細御座候御趣承知仕候。或程右も相聞し申候て可宜被存候。夫ニ付色々案じ見申候處、右の趣は、每卷の終り毎に記し候も、何とやら人あまり事々しく、且又書きぶりも色々案じ見申候へ共、不都合に相聞え申候に付、右は上巻中巻下巻の終りの巻へ、相記させ可然歟と被存候。左候へば、都合三所に相成申候。先づ上巻の傳の終り、十七の巻の末へ、  
右記、本文は父大人みづから書れ、傳の文はおのれ書り。

本居 春庭

右の様成るもやうに記させ可申歟と奉存候。尤中巻の傳の終の巻、下巻も同前也。右の通りにても

可宜思召候は、左様に可仕候。尙御思召も御座候は、被仰聞可被下候。先は御座候のしるしの所へ、一つに毎巻に記し候義は、いかゞと奉存候故、右の通御相談申上候也。

一 記傳第一巻に、序目錄一卷、是は全部終り申候上ナラテ、目錄讀がたく候段、先述申上候通、御承知被下、夫に付此度第一巻出木に付、右序目錄、別に一巻は、全部出来の上、相添候よしを、中板ばかりの物にざつと相記し、初丁のあたりへさし入申候儀の思召、是又御尤の御義と奉存候。如仰大部の物に、一向序目錄無之候而は、先づ讀申候者、不齊に可存段、誠に左様に御座候。左候へば、如仰此義も甚可然御同心に奉存候。茲右書きぶり別紙に相認入御座申候。尙思召も御座候は、無御遠慮被仰聞可被下候。先づ讀にざつと相認申候也。

一 中巻ノ記傳出木ノさしかゝり時分には、又々上巻の如く、正語中の巻も、撰出可仕旨被仰聞、承知仕候。是は記傳ノ訓により、其まゝ相用申候事に御座候へば、さのみひまどり申候義も無御座候。一通り下書いたし、板下相認申候迄に御座候へば、早速出来仕候義、隨分兼々承知仕候。一わされと申す名、二字に書可申文字の事、右は先述而も沙汰有之色々案じ見申候へ共、輪實とより外は難書、此文字は面白からず被存候。尤早のワサと調申候事は、無理にて無御座候へ共、早稻と書候而は、ワセとよみ可申、又早根と書候ては、ハサキとよみ可申候へば、とかく正しくワサネとよみ可申書き方無御座候。全體ワサネと申す語、正しからず候故、二字には書かたく候也。是非共二字に書申候時は、右の輪實より外は、無之義と被存候へば、やはり從來の通、三字に假名書にいたされ可然奉存候。

一 正語、序、跋、校合摺御見せ被下、相文中候所誤も相見え不申、宜出来申候。且又外題も一見仕候。故早右正誤彫刻全出来、扱々大慶仕候。記傳第一巻も、不違内御出木可被成下旨、是又大慶不尠、蓋本儀の至りに奉存候。梓にも御加筆被成下、忝尙又、宜申上度段申候。先は右賞書申上候。早々加此御座候。尙奉期後信、恐惶謹言。

正月十二日

横井十郎左衛門様

尙々、記傳八の巻、板下此度差遣し申候間、御落手可被下候。

宣 長



編者云、右一書は、宣長が、尾張藩士横井千秋におくりたる文なり。いづれの年なりしかわかれども、文意にて察するに、寛政三四年の頃なるべし。横井氏は、神代正語(中)正語とあるは即此也)とはもとより古事記傳を板行するに當り、非常に盡力せし人なり。宣長が神代正語のゆゑよし、上略古事記傳を板にふるゝい、いはば此人ぞ事おこしてせらるるなれば、其摺本出来ぬほとに、まづ此神代のかなぶみを世にほどこらし、讀ならはせて、みやびたるいにしへことばを口なれしめ耳なれしめて、世の人のきたなき心を、すゝき清めんものこゝろさしなりけり。云々とあるにても、其板行に盡力せし事のおほるげならざるを知るべく、はた其志をも知るべし。さればもとより、古事記第一巻(神代卷)は、此人の家の蔵板なりしを、後故ありて、名古屋東壁堂へ譲り渡しとなり。木綿苑は、即ち千秋が屋號なり。

わかれのことは、これのみにて明かなられども、鈴木和佐彌のことならんか、尾張藩士にして、宣長の門人、眞實といひし人なるべし。

其二

其二

一、筆啓上仕候。酷暑之節、愈御不安御座被成候や、承度奉存候。次に拙子無事調在候。乍慮外御安意可被下候。然は先達而、段々御噂申上候。

兩宮辨書之儀、此節漸認終り申候に付、安田傳太夫方へ向け遣し申候。彼方より差上可申候間、御覽被成下候上、神宮衆中へも御見せ被下、印行仕候而も、いよゝゝ差標被申候儀は、無御座候説、いかゞ此段とくと御聞糺し被下候儀に奉願候。尤先達而御見せ被下候手紙に、板行之儀も是非之沙汰に及不申候旨有之候。右之通に而は、何れ共相分り不申、万一板行仕候上に而、さし標被申候儀御座候而は、迷惑に御座候故、何とぞ乍御面倒、此段とくと御聞糺し被下候。又々奉願候。尙又、右辨書之内、思召之品も御座候は、無御遠慮御噂被下度奉願候。

一、萬葉御解刻出来仕候而、板本此方へも廻り参り拜見仕候。本からも甚宜出来、細々御同前大悅候。次々も何とぞ、無御憚意、道々御出し被成候様奉待候。且又、外宮儀式帳之御註も、可被成思召立御座候由、是亦何とぞ、御考索、道々御成業奉仰候。八神殿滋廣之御考も、何とぞ御考可被成候。

古事記傳全部成就の月日

一、御令兄君、先頃は當地へ御越被成、親類方にて御講釋も被成、同前共出席拜罷仕存候。尙又、私へも大平へむけ、御懇情之御傳言被成下、悉承知仕候。右等之趣、御序之節、乍慮外宣被仰上被下度奉願候。

一、私古事記傳も、當月十三日、全部四十四卷卒業、草稿本書立申候。明和四年より書はじめ、廿二年にして終申候。命の程を危く存候處、皇神之御めぐみにかゝり、先存命仕候而、生涯之願望成就仕、大悅之至存候儀に御座候。乍慮外御歡可被下候。先は暑中御見遣、旁右等之儀、得宜意度如此御座候。尙期後信候、恐惶謹言。

六月十七日

本居宣長

宇治五十規模  
編者云、右は本居宣長が、荒木田、久老におくりたる書簡なり。

兩宮辨書は、伊勢二宮さまの辨のことなり。安田傳太夫は、伊勢山田の人、名は正起といひ、宣長の門人なり。神宮衆中へも御見せ被下、印行仕候て、いよゝゝ差標被申候儀は、無御座候や云々、以下數行は、さき竹の辨は、内外宮を辨じ、從來の御説を破りたれば、かく差標に氣遣ふものならん。

萬葉御解とあるは、萬葉觀落葉か。

末文、古事傳のことないへるは、文學史料上、貴重なるもの、とす。さるは、新か學生の大衆たる古事記傳全部成就の年は、既に明かなりしと雖も、其月日に至りては、伴信友の給、年譜を始めとして、他の之に關する諸書にも見えずりしを、此文に當月十三日、全部四十四卷、草稿本書立申候とあるにて、其成功は實に六月十三日にありしこと知られたり。明和四年より廿二年日は、寛政十年にして、翁が六十九歳の時なり。讀て此に至れば、當時翁が學生の願望成就して、いかに喜ばれたりけん、そのさまさながら見るが如し。而してたま多年辛苦博覽のあと、蔽ふべからざるものあるを見る。

〔消息文變遷〕

故橋千蔭藏、賀茂眞淵より  
先月の芳示、且綴紀の宣命一冊到來、彌御多福被成、御勤、欣喜仕候。小子無事消日月候。

賀茂眞淵より



一、右宣命の御考、巨細の事共多くて大悦の御事也。傍訓誤字の御考も宣候間、所念の事は、本文に傍書いたし申候。不日に皆調候て後返上可致候。あななひ、うむかし、などの類は、已も定説無之候。強たる考をなすのみ。又別の御疑問如何、傍書いたし候。但比來別て繁多、初夜の中、燈下に書し所も多く、老眼文字不明も有之候。御推察被成候。且御意多可有之候。御考も候は、重て再論可被成候。改候て是非可申入候。

一、古事記下巻、神樂歌御落手、御悦候山珍重也。神樂歌の類は、最前も申入候ごとく、俗人の家には有之べけれ、必他へ不出て難得もの也。御秘にて御他見被成まじく候。右御返の上次をも可道申候。去々度、神樂の注を出候所、思ひの外むづかしく、退屈いたし候へば、箱に納他日見改候はんと存候を、いづこに置候ひしや、見えかね候。紛失候は、残念也。

一、古言梯に漏候かな多候。此人多年の撰にて、先出来候。餘りに繁多故、思ひ落せしもの也。仍て追稿を出し可申心得に候へ共、容易には出候まじく候。猶又御見當候非事等有之候は、御札し頼入候。小子述作には無之候へども、門下の非説は、向く小子が愧に候へば也。用等のかな御子もいまだ心得ざるに、いかに思ひしにか、わぬ云々の音として、今まで書候を、此度の御考により候はん也。後世といへど、一條三條の代まては、固古意も殘候事も有之故、已ことを得ぬ時は、暫從て後を待べき事也。をりはへなぐいとほしは、先年より論定おきしを、いかでもらせしにや、さる事多かるべし。

一、アイウエヲを、或一傳のまゝに、まのかなを書しを、萬葉に、得をウのかなにせし所、三所ばかり見出しつ。得の音をばトのかなにせれば、ウはエの音の轉と見ゆれば、アイウエヲが、ソキヤエオの二つの内、一はエなるべし。悉盡家に用るに、アイウエヲなれば、今、是に仍て改むべし。已若時、あしき人に習候事心に残り、三十四年漸々改候へども、猶かゝる事有之候也。古言梯にも、その事改よといひしを、魚彦、先月上旬京都へ上、それより攝津へ下、大和一覽、伊勢、豊宮の主意也。依之よくも改あふせざるべし。伊勢へ登候は、登所を御尋可申と申候。左候は、御心安御物語可被成候。才は乏候へども、多年故、少は心得し事も有之。假字をば傍候へば、よく覺候も多也。御當地、拙の門人弟子ども、近年多死去いたし、濱古言梯の序を書たる、宇萬俊、尾張親王といふ

のみ、今御當地にては有之候。越て門弟に不仕合にて、去年才學立人、二人まで死別いたし、老後力落し申候。随分と入御情、此學落成候様、可被成候。儒學いたすもの多かれど、昔先人の謙を追候て、成功の人無之候。いまは皇朝の學のみ、漸ひらけかかり候へば、此上天下に唱べきは、是也。

一、小子皇朝の本意を、長歌か文に書て可通事、致承知し、かしながら、甚さし當候事ども多かれば、急事にはかなひがたし。されど心がけ候はん。

一、我朝の言古歌に残り、古事記、その書ながら、歌は句調の限り有て、助辭の略あり。紀も漢字に書しかば、全からず。たゞ祝詞宣命に助辭は見ゆてふ事、已いまだいはざる事にて、甚感服いたし候。此宣命考出来候は、序に書れ候へ。且宣命等を先記候て、後古事記の考を可被成候との事、是則既にいひし萬葉より入、歌文を得て後、記の考をなすべき指が本意也。天下の人、大を好みて大を得たる人なし。故に己は小盡て大に入べく、人代を盡て神代をうかむべく思ひて、今まで勤たり、其小を盡し、人代を盡さんとするに、先師ははやく物故、同門に無人、明言在滿は才子ながら、令律官位等から、半分の事のみ好候へば、相談に不合、只萬國にして、かくまても成しかば、今老極、隨事皆失、遠方に成候て遺恨也。併かの宇萬俊、墨生などは、御勤ほどに候へば、向來被仰合て、此事落成可被成候。但令後、藤原抄、古製、東古器物等の事も、一往心得ざれば不足に候。此事も未には、何とぞ書入候本にても傳へ可申也。是はむづかしけれど、物の方なれば得やすし。只皇朝の有様の意こそ得がたけれ。密可申述候へども、餘繁文多事故遺候也。

五月九日 宣長兄

是も臥學燈下の狀、御推察可被成候。萬葉卷一、清書判料を香かゝり候て、さてくも也。  
〔帝國文學〕 本居春庭、名宣長、號鈴屋、松坂三井ノ町ニ住居、松坂ニモシバヲ澤田、日々書候テ、國學專要之儀共論シ候テ、高論ヲ承統、歌文章ノ儀ハ、私多年ネリ候所、甚宜ト被賞申、別ニ論モノナク同心ニ御座候テ、萬葉家ノ古林ヲ好ハ、アレンキヲシ被申候。神代紀ナド論シ、神道ノ儀ハ大ニ益ヲ得申候。尤先生耳遠ク御座候テ、直談トハキカネ候事御座候。後ハ、不絶筆談ヲ

藤井高尙の消息中の一節



宣長の書簡

〔帝國文學〕

以、古書ヲ論シ、古學ヲ中國ニヒラキ申度志ノコシ申候處、甚被悅申候。僅ニオソハレ候ア、本朝ノ道、ウヅモレ候事、ナクヤニテ、國學ヲヒロメ候様ト、タレム被申、約ナシテ、此度多、古學者ニ逢申候へ共、三十好所ニ我意ヲタテ、シヒタル論、イフ人多御座候ニ、此先主ノ人ノ論ニモ被附申、其論公ニシテ、眞ノ古學者、眞ノ神道家ニ御座候。感シ申候テ、此書ニ隨身仕候。

〔帝國文學〕 おひた(宣長翁の長女)方へ、兩度御狀被遣、道々相届致被見候。次第に冷氣相増候へ共、彌御無事に候よし悦申候。此方親類中無事に候。

一切畑村(他の書面に依るに、京都の近邊にして、日醫師のある所也)より御歸り後、眼病相替候事も無之候由、其後もやはり藥は御用候由、其後も相替り候事も無之候説、承度存候。

一眞風主京都の人、澤眞風といひて、宣長翁の門人なり。他の書面によるに、春野翁は、湯京申、この主の世話を受けられしなり)にも、いまだ播州より歸り不致申候由、大阪にて、逗留の由、餘程長逗留にて御座候。應講釋はんじやうと違察致候。

一資殿、針治けいこの事、近ころ針治家へ入門被致、毎日けいこに御出候由、安心いたし候。右入門の醫師は、何と申入にて、所は何町にて御座候説、重て御狀に、右針治入門、師匠の姓名町所、おまゝいに御申越可有之候。

一、云々。(不必要なれば、畧す以下もおなじ)

一、おのと(宣長翁の末女)事も、森伊右衛門、岡山瓦治、段々世話いたし矣。山田、安田、傳太夫方へ遣し候様に、やくそく致候。先方よりは、霜月に引取申度由被申候へ共、若山より、いまだ頼ひ相濟不委候故、しかと雖定候。近々願相濟至候へば、彌霜月に遣し候筈に御座候。榮次郎(宣長翁の次男)何角と、のへ物等、世話いたし吳候。

一、云々。

一、云々。

十月二十三日

健亭殿

中 稿

宣長の書簡

〔消息文變遷〕

一筆啓上仕候。近日寒冷相増候節、愈御平安御座候説、承度存候。私儀、去月十日、松坂出立仕、同十三日、若山到着、其後無事逗留仕罷在候間、乍、彈御安情可被下候。採月三日五日六日と三度御城へ罷出、講釋申上候。三日五日兩日に、大藏の詞讀終り申候間、六日は、誦歌の大藏、一席にのみ終り申候。右講釋、殿様思召にも、相叶申候由、遣又役人中、聽衆の評判も、甚宜敷候由、唯申候。乍、彈御悅可被下候。然る處、殿様にも、熊野御遊行にて、來る十三日、御發駕之御候り、大藏廿四五日も御掛り被、遊候由に御座候。左候へば、右御發駕已前にも、はや御用も有之間敷存候。來月上旬迄は、先御留守に而御座候。御歸城後、御川之程相知れ不申、私歸國仕候儀も、未相知れ不申候。

一、私若山到着後、於旅宿、毎々講釋仕候。半の夜は、神代正語、丁の夜は、源氏物語よみ申候。御家中の人々、並神職等多く出席仕候。晝之間も、客來不絶。其上此地、殊外誦歌は、やり申候間、所々家中宅に而、度々歌合有之方々へ、番申候。當地は、歌人いづれも、京上方門弟に而御座候へ共、私此度番申候に付、多く承及、尋委申候。道々古學も被行可申と存候。

一、日前宮紀國遣も、先日私旅宿へ尋被委、對面仕候。是も古學信仰に御座候。當國遣飛鳥井殿御舍弟に而御座候。右日前宮社人も、かれこれ講釋てうもんに番申候。

一、私此方到着後、早速、愚札、様子申上候筈に御座候處、先上の御用之品、相分り申候上、様子可申上と存候。延引仕御無きた申上候。此段御存恕可被下候。乍、彈十郎左衛門様、其外御家内様方へも、可然被、御送被、下度奉願上候。尙此上様子道々可申上。此いも、日取込罷在早々、恐惶謹言。

霜月九日

横井田守様

宣 長

古事記傳の著

〔玉禰丸〕 そは、備前の殿人湯淺元禰號を常山と云ひし人の、文會雜記と云物に、伊勢の松坂、本居宣長、古事記傳十五卷を著す。此の中、首の卷を閱るに、聖人の道、吾が日本の道

本居宣長

(雜載)

六三七



と異なる論あり。日本紀は、全く漢字に潤色したる故、古事記を第一とするなりと有り。此の撰記は、其のころ記したる物なればなり。さて古事記傳は、天明六年、五十七歳の時に、上卷の傳成り、寛政四年十二月、六十三歳の時に、中卷の傳成り、同十年、六十九歳の時に、下卷の傳成り、同十一年の九月十三夜に、其よろこびの會し給ふ。寛政の始めより、板に彫りはじめて、次々に成りつゝ、文化五年まで三十年餘りにして、彫刻みな成り畢れり。

さて明和元年、三十五歳の時より、古事記傳の稿を始め給ひ、同八年、四十二歳の時は、直毘靈の稿も既に成れりき。

〔鈴屋集〕 寛政四年十二月廿日のほどに、古事記の中卷の傳、かきをへぬることなよろこびてよめる。

〔聲文私言〕 本居宣長が著述は、皆有用の物にて、中には古事記の直日靈と、取次敷言、錯狂人、花などは、詠歌作文の事にはあらで、皆皇國の道として、取めかしたる書なれば、早く讀べき書なり。但し珠の外に、から國聖人杯の道を懇くいひたるは、かへりて我が神祕の道にも背くところあり。一、わたりに云はなつべき事にも非ず、見む人心をとめてよむべし。又歌書には、詞の玉の緒、新古今美濃家集、草庵集玉等、この三部は、必ず常に手習し讀むべき書なり。歌の上にて、人の才智をまし、進歩なきしむるもの、此書に及ばざり。但し美濃の家集は、おしきもの、やうにいふ聲もあれど、歌を解くに味あること、誰かはこれに及ばむ。心をとめて見るべし。

〔うけらが花〕 本居宣長が、古事記の覺察に、事代主神を得て、  
あし原の、くにさかりつゝ、萬代に、神の御尾さき、つかへまつらす。  
加藤千庵

明和元年古事記傳の稿を起す

古事記傳中卷覺察の歌

宣長が著書の有益なること

古事記傳覺察の歌

著書

〔琴後集〕 本居宣長が古事記傳かきまはて、覺察の歌こひけるに、神直日神を、まがつひの、あらびあらせじと、神直日、神の御魂や、あれましにけむ。  
村田春海

〔國學院雜誌〕 本居宣長翁著書解題  
一、歴史及神道に關する書

一、古事記傳、刊本四十九冊  
この書本編四十四冊、首卷一冊、目錄三冊、

第十七の卷附卷一冊、合せて四十九冊なり。此の書の著述に従事せられし物は、明和元年に於て、寛政十年、全くなり、その間、三十五年のながき歲月を費されぬ。天明六七等頃より、刻本にかゝり、三十五六年を経て、文政五年に至り、全く刻成せり。本書は世人も詳く知れる如く、我が典籍の中、最古にして、且つ上古の言語もて、我が歴史の淵源を叙せる古事記を、解釋したるものにて、その中には、言語、歴史等の事は、言ふまでもなく、服飾器具、風俗など、古代に關係せることは、載せて漏さず。首卷には、題字、及序文あり。目錄三卷は、五十音の順もて、排列し、肝要語句、の他の事故を擧げて、搜索に便し、本書中、卷には、古記典等、總論、書紀の論ひ、記述の事、諸本の又註釋の事、文體の事、假名の事、古事記の論、讀法の事あり。終に直日靈の一篇ありて、我が皇國の大道と、宋儒のいふ道などは、甚く異なるよしを論ぜられたり。第二卷以下は、古事記の本文を掲げて、一々詳細なる註釋を施し、終に至る第十七附卷は、門人服部中齋が、天地泉の成出たる沿革を説きたる三千の考を載せたり。附のこの書を著されたるは、その師、賀茂真淵大人の旨に、おのれは萬葉を研究して日暮れぬ。子は前途遠し。萬葉の研究は、おのれに一任して、専ら古事記の註釋に心を用ゐよとありしに、激厲せられたるなりといふ。古往今來、古事記註釋書の巨擘なりといふべし。

一、直日靈、刊本一冊



この書は、世人が漢學に心酔し、尊外卑内の俗をなせるをなげきて、我が國の古傳により、大道の萬國に倣りて比類なきこと、儒教の我が國體に適合せざること、などを説きて、國學の精神を發揮したるものなり。文政八年の刊行なり。

一、葛花、刊本二冊

翁曾て、直日靈といふ書を著はして、皇國の大道を論ずる所ありしに、或人、まがのひれを著はして、これを辨駁せり。於是、翁更にこの書を著はして、辨駁せるなり。享和三年正月の刊行なり。

一、神代正語、刊本三冊

こは古事記を本とし、これに日本紀所載の事實をも取加へ、平假名もて、神代の事を簡易に知らしめむとて、ものせられたるなり。書中、あめつちのはじめのくだり、神代七代のくだり、おのころじまの段など分ち、假字の傍には、原本の漢字を當て、音の清濁、語の正否をたゞし、神代のことを知らしむると共に、正しき國語を用ひしめむとて、著されたるなり。書中、漢字には傍に和訓を施し、又別に註を施して、時は、あ、大登は、おほにへ。忌服屋は、いみはたや。壺島は、ふらこま。校は、ひの、如くせり。蓋、古傳の概要を、簡易に假名もて記せるもの、この書を以て嚆矢とすべし。

一、伊勢二宮さき竹の辨、刊本一冊

伊勢大神宮の祭神の事に關する辨にして、即ち外宮の方は、祭神の是非を辨じ、また、内宮は天照大神の、この地にてかくりまし、など、いふ妄説を辨じたる書なり。

一、天祖都城辨々、刊本一卷一冊

或人、神別本紀に、天照大神の都は、豐前國の中津なりといへるを破りて、天祖都城辨といふ書、一卷をあらはして、その所謂を辨ぜられたるものなり。寛政九年正月の刊行なり。

一、日本紀、華山蔭、刊本一冊

この書は、日本紀の文は、漢文にして、多く虚飾に過ぎ、古事記の如く、古傳のありのまゝならぬ

を難じ、上巻、天地のはじめのくだり、四代入柱神代など、標目をたて、文中の句をあげ、平假名交りにて、文字の用ひざまなど、凡てよからぬをあげて難ぜり。寛政十二年庚申の春刻せり。

一、鉗狂人、刊本壹冊

藤原貞幹、衝口發を著し、我が太古の事を論じて、疑を記紀二典に挿み、我が祖先の出處を論ず。我が古意に背くもの、極めて多し。翁これを憤慨し、一々その言を捉へて、駁撃辨證す。貞幹の説は、本朝通鑑に據りたるものにして、翁は、古事記、日本紀の正傳に基きて、駁したるなり。

一、駁我慨言、刊本三冊

程高羅山、徳川文學の初をなし、より、漢學は、汎く一般に行れて、通天の勢をなし、その極、尊外卑内の弊風を醸成するに至りぬ。翁慨然として、古學の眞旨を發揮し、彼の漢學心醉者に向ひて、一大鐵錘を打下す。この書、即ち是れなり。筆を大物主大神の正宮にて、祭神の朝、外國より或進したる事に起し、以て次々、外國の我が島化にまつるへる事例を擧げ、元弘の難、足利中葉の外交に至りては、最力を竭して辯論し、豊太郎の三韓征伐の如き、一々内外の史跡に徴して考證したり。

一、出雲國造神壽後釋、刊本二冊

往昔、年々二月三月の頃、出雲國造、朝廷にまわり、物献りて、神壽を奏すことあり、その神壽の詞は、延喜式八卷祝詞の部にあり。此書は、その註釋せるものにて、祝詞考の文を悉くあげ、類書をも併せ出し、次に考の誤を辯じ、自己の意見を加へたり。蓋し、後釋とは、祝詞考の後の註釋と云ふ意より出でたり。寛政八年完成せり。

和歌和文に關する書

一、萬葉集玉乃小琴、寫本一冊

この書は、萬葉集卷の一より、卷の三までの歌の中を取り出でて、これに註釋せられたるもの



なり。新白らの説に、賀茂翁の説をも交へて、歌句中の難を解す。安永八年の作、天保九年の刻なり。

一、萬葉集瑞櫻根の靈、寫本二十冊、

この書は、契沖翁、瀬山、今井似閑、樋口宗武の手を經し本を、翁の寶曆七年五月、京にて、白萬葉集に書入られたるを、軌足長秋が、其書入られし文のみを綴りて、如此名づけしなり。

一、萬葉集問目、寫本二冊、本居宣長問、岡部真淵答、

この書は、萬葉集の訓讀、解釋につきて、不審の條々を、本居宣長翁問ひ、賀茂翁答へられたるを記したるなり。

一、萬葉集再問、一名問再答、寫本、本居宣長問、岡部真淵答、

この書は、先の問目の後に生じたる不審を、翁の原稿より、藤居翁に問はれたるを、藤居翁の答へられたるなり。

一、萬葉集問問抄、寫本三冊、田中道廣問、本居宣長答、

この書は、萬葉集中、不審の箇處につき、田中道廣の問に對して、翁の原稿の答へられたるものなり。即卷中、字句の意義訓など、まゝ岡部翁の訓釋をも參考して、綴せられたり。

一、萬葉集山常百首、版本一冊、

この書は、古學に志す人に、まづさしあたり、その大意を會得せしめむとて、萬葉集中より、神皇賦、臣連の勇猛、君臣父子の至情等、所由の古事あるを採出て、百首となしたるものにして、文政三年春の刻成なり。

一、古今選、寫本二冊、

古今集中に於て、ことにすぐれたりと思はるゝ歌どもを、選錄したるものなり。文化五年にし

るせる、村田並樹の序文あり。

一、後選集詞のつかね緒、刊本一冊、

この書は、後選集の詞書、または和歌のうちにて、正しからぬを削り、あるひは加へ、あらためなるとしたるものにて、それはそれ、符標を附して、原文と對照せり。即ち享和二年五月晦の刊行なり。

一、美濃の家づと、刊本八冊、

一の卷の端書に云はく、大矢重門が、物まなびに、美濃國より來居て、何くれととひける事どもの中に、此集(新古今集)の歌どもの、心ばへをなむ、とにこまやかにとひたづれたるに、さとしてあげつらひたる趣を、おなじくは、國にかへらむ家づとに、書しるしてえさせよとこへるまゝに、書てあたふ云々。五の卷に至るまでは、新古今集の註釋にして、續篇三卷、美濃家づと折添、上の卷は、風俗集の註釋にして、寛政三年の著作なり。

一、草庵集玉箒、刊本五冊、

草庵集とは、僧頼阿の著せる歌集なり。この集、況く世に行れたれば、宣阿といへるもの、草庵集註解を著して、これを解釋したるが、後に櫻井元茂の雜注といへるもの出て、誤解の說の誤を指摘せり。而して二書共に、誤謬あるを免れず。是に於て、新二書の非なるものを訂して、真正なる解を施さる。明和四年の著なり。

一、續草庵集玉箒、刊本一冊、

前書の續篇にして、四季及戀雜等を收めたり。天明六年の刊行なり。

一、草庵集正誤、寫本一冊、



この書、草庵集の誤を正せり。新、中世以後の和歌に於ては、大に法師の解説せられたりともはる。所蔵の本には、次の奥書あり。右者、有栖川宮頼仁親王、鳥丸内大臣光榮公、相共に御講判の上、米點をくはへさせたまふになん。則有栖川家の御本をもて、是をうつし侍りぬ。謄寫すべきものなるべし。本居宣長藏。」

一、石上私淑言、刊本二冊、

この書は、和歌に就て論ぜられたるものにして、その歌といふこと、よむといふこと、等を始めとして、その他、あらゆる歌の上に、肝要なる事を問答体になし、數十ヶ條をあげて、論議せられたるものなり。後に齋藤彦麿、その漏れたるを書き添へ、刊本となせるものにして、文化十三年丙子初秋の刻なり。

一、萬葉集會評録、寫本一冊、

こは本居翁門下の者、相合して、萬葉集研究の會を開き、折にふれて思當れる説どもを記したるなり。安永六年正月廿四日夜に始り、天明八年五月以來中絶、寛政元年又再興せり。集の中の一語を取り出で、賀茂翁契冲等、諸説の中、何れをよしと定むるよし記し、又各自の考を簡略に記したり。

一、歷朝詔詞解、版本六冊、

この書は、續紀に出たる宣命を、註解せるものなり。先づとりすべといふ事どもとして、宣命といふ事、宣命の儀式、その他、宣命に關して心得べき事、數ヶ條を擧げ、次に順序を追ひて、第一詔、第二詔と、次第に宣命を擧げ、その字義、文字の異同、その他、續紀の詞の誤れるを正しなどとして、詳細に注釋せられたり。享和三年亥九月成る。

一、玉の小櫛、刊本九冊、

こは、源氏物語につきての考をかきしるしものなり。源氏物語の解釋は、この以前、源月抄等

の著あれども、源氏を評論して、細にその書の性質を記したるもの、この書を以て、第一となすべし。第一巻には、一般の物語文の評論、作者のこと、この書がなれる由來、この書と時世との關係、此物語の名の事、準據、註釋等をしるし、第二巻にて、尙その大體を論じて、各巻に涉り、一々、その解し難きものを捉りて、これに解を施し、考證、評釋、頗詳なり。第三巻には、源氏廿八條に至るまでの事、歴表を掲げて、各巻に配當すべき年月を記し、第四巻には、各巻に於ける、語の異同につき、諸種の異本によりて、校合せり。五巻以下は、源氏中の卷々につきて、順次解し難き語、知り易からざる事實を取り出でて、これに解を施したり。著作年代は、何年より何年に亘れりしか詳ならず。

一、土佐日記抄、寫本二冊、北村季吟著、本居翁書入、

土佐日記を解釋せるものなり。藏書本は、本居翁の書入あり。奥書に寛政四年癸正月其之白紙、とおく書ある本と寫せる本と、校合、采してかける者なり。云々。

一、手枕、刊本壹冊、

奥書に、此ふみは、源氏の物語に、六條御息所の御事の見えざるを、わが給屋大人の、かの物語のふりをまねびて、早くものし給へりしを、おのれ、こたび讀ひもとめ、心の友だちの爲に、板にえりつる云々。寛政の四とせといふ年の春、尾張國海部郡大館高門とあり。これにて、本書の體裁を知るべし。

言語音韻に關する書、

一、てにをは紐鏡、刊本一折、

種々のてにかはの差別を、系圖を以て、初心に知らしむ。言葉の玉緒を讀まんには、先づ此圖を記誦すべし。又首に「てらしみよ、本末むすぶ、ひも鏡、三くさにつる、ちひの言葉」といふ歌を掲げられたり。予先年、松坂なる本居信那(健亭)翁の許にて、古語の稿本を見たる時、此書の稿本は、ゆふべのおひ風と題して、謄寫も、はるゝ夕の、おひ風に、とまりたどらぬ、和歌の浦邊」と云ふ歌を掲げられぬ。



一言葉の玉緒、刊本七冊

一の巻は、語論三釋、歌(し、き、け、れ、し、き、し、け、れ、き、し、し、か、ず、ぬ、ね、等)二の巻とまりより、上へかへるてには、重なるてには、變格、本歌にゆづる格、てには、不調歌、一本にてには、を寫し誤れる歌、三の巻より以下は、辭にて、一々萬葉以下の集より、その例證となるべき歌を擧げた。蓋、我が國の語學者にして、その説の組織的なるもの、本書を以て嚆矢となすべし。

一、御國詞活用抄、寫本一冊

こは、舊の稿本にして、詞入、新は、この説に據りて、大成したるものなり。卷首に、活語新撰、假字しりがたき詞、心にも思ひ定がたきも、やむことをえず、いさゝか心のよる方(○)の印をつくる(を)し、げらく川ふ。そののりとはすべからず、合す云々、合する云々、とやうに、二やうにいはいはれて、いづれとも定がたきあり、凡て合の意の詞に、此格多し。雅言か、俗言か、さだかにわかりがたき多し。そは、大抵にわかちおこく。又、俗言は、所限りなく多かるべけれど、もれたる詞多かるべし。國の方言なれば、殊に限りなかるべし。さて、俗言も、はたらきは、雅言の格をもてするす。たとへば、帯などをくけるといふ、けるは、俗言の格なり。是をくると記したるを「ける」といふ、けるも、俗言の格なり。是をくるとするす類なり。第五の音は、すべてよるづの詞に活用なし。第五の音に、はたらかし、いふものは、悉く轉讀の俗言なり。此事、獨別にいふべし。ぐる、る、い、などをける、といふ、みなこの例をもてするべし。本書の一例を擧ぐれば、明能カキタケ、アタ、アタ、アヘケ、アガク、アバク、アユク、アルク、アカツク、アザムク、アヒクの如し。

一、玉あられ、刊本壹冊

「玉あられ、まなびのまどに、音たて、おどろかまばや、さめぬ枕を、これこの音の成れる意を、察されたる歌なり。本書は、主として、歌文に用うる語の、雅馴ならざるもの、古意に違へるもの、早俗なるものを、訂して、正しきに歸せしめ、又てには、等の用法を誤りたるは、例を擧げて、これを説き示され、歌の部と、文の部とに別てり。その一二の例を擧げむ。

歌の部がしにや、何の類の下に、やもじをおく事、とい受くる上の格、文の部、それいふことしかり、ものならし、おのれ某、友がき、

一、呵刈菟、寫本壹冊

上田秋成が、語學上につき、論辯したるものを、本居翁の反駁せられたるものなり。古人の言辭に、人の音なしといへるにつき、秋成が辯じたるを、更に論辯したるが如きは、論論太だ辯論、書中の大部分を占めたり。本居翁の音韻に關する論論、これによりて、疑ふべきもの多し。秋成は、難波の人、故にこの書、かく題せり。天明七年の著なり。

一、漢字三音考、刊本壹冊

翁初め、萬葉を研究して、中ころ、賈茂翁の警告に従ひ、學生の力を古事記に委ね、その訓讀の點に至りては、最も翁の苦心せられたる所なるべし。本書は、即ち、その研究の餘とも見らるべく、漢吳唐、三音の由來、及異同を論ぜり、その大綱左の如し。

皇國正音皇國言語の事、外國音不正の事、天竺國の音、鳥獸萬物の聲、漢國字多きに過ぎて音不足事、皇國にて漢字音の始、漢字音撰者、吳音先づ定れる事、漢音先づ定れる事、皇國漢吳音の論、博士を置て字音を正されし事、此方の字音誤無き事、皇國字音の格、漢國にて漢音吳音の事、今唐音の事、唐國音韻の事、四聲の事、音韻呼法の事、

一、字音假字用格、刊本壹冊

こは、漢字音の假字を正さむ爲に、著されたるものにして、從來、字音の錯亂して、定らざるを正し、後世の準備則とせり。本書載する所の日は、喉音三行辨、三行分生國、輕重等第圖、おの所屬辨、字音假字總論、字音開合指掌圖、字音假字三會圖、字音等なり。因にいふ、從來の字音假字道の誤、誤は、契沖出て、一たびこれを正したれど、なほ一定するに盡らず。然るをこの書出づるに及び、粗一定すること、なれり。この書、安永五年印刷せり。

一、地名字音轉用例、刊本壹冊

我が國上古は、國郡縣等、そが地名をあらはすべき文字は、定らずありしを、和蘭六年五月に國



郡那名は、好ま文字をつけ、二字にすべしとの語ありければ、後には、悉く見にくからぬ文字を選ばず、字數も大かた、二字に約めれば、後世種々の誤謬を生じ、稱呼の亂れたるものも鮮からず。新これに心を注ぎ、凡そ和名抄に出でたる、國郡那の調註ある限は、これを出し、或はハの音、カの音に轉用し、或は、ン、の音を、マの音に轉じ、又は、アカサタナハマヤラ、各行の音、同行通行せる例、その他種々の例を別ちて、細に註を施されたり。本書の刊行せられたるは、寛政十二年なり。

日記紀行等に關する書

一、菅笠日記、刊本壹冊

明和九年、翁、吉野の花を採らむとて、大和路に入り、日頃の讀書の體を散ぜらる。行文流暢、叙事精細、見聞せられたる所のもの、率れ、筆に上らざるはなし。翁が紳々たる胸中と、富麗なる詞藻と、その一端を窺ふに足るべし。

一、名古屋日記、寫本壹冊

翁一年、門弟等の招に應じて、名古屋に赴かる。本書は、その折の紀行なり。隨行せるは、春庭、大平の二翁、その他の人々にて、その見聞せられたる所、或は和歌となり、或は文章となりて現る。本書名、丹鶴城所藏の本には、和屋紀行とあり。

一、鈴屋大人都日記、刊本貳冊

翁ひととせ、都に上り、閑に平生講學の體を散じ、京洛の間に優遊し給ふ。精神より、庶民に至るまで、斯學に篤きもの、來りて翁の講説を聴かむことを請ふ。翁これが爲に、萬葉、源氏等の讀書を講じ、この間、互に唱和せらる。門人石塚龍府、この行に隨從し、見聞せるもの、及その唱和の和歌等を記し、題して都日記といふ。この書は、翁が傳記に關したるもの、紛からず。故に通常の日記を以て見るべきにあらず。文政十二年の刻なり。

隨筆雜考等に關する書

一、うひ山路、刊本壹冊

こは、皇國の學せむとする者の爲に、愚に、修學の方針を指定せられたるものにして、初には、皇國學全體に亘れる大要を述べ、然る後、①世に物まなびのすぢ、品々ありて、云々など、②諸書を股け、③に至るまで、かゝる題目の下に、種々、詳ぜられ、丁寧を極めたるものなり。巻尾に、寛政十年十月廿一日のゆふべにかきをへぬとあり。

一、玉勝間、附目錄、一巻、刊本十五卷

こは、翁の隨筆中、最貴重なるものなり。翁は、翁年頃、古事記傳以下の書を著さむとて、諸書を抄録せらるゝ折、抄録せられたるものにして、統する所、文學、歴史、法制等に亘りて、一々、翁の考を記し、その學の道に努められたる狀、歴々觀るべし。

聞く。翁の諸書を著述せらるゝ、その抄出せしもの、又、みづからの考を記せるものは、隻紙斷片といへども、皆これを別に部門を分ちて、作り置かれたる袋の中に收め、著述に當りては、直に取りて考證纂述の用に供せられきといふ。本書も亦、かゝる注意により、成出たるにもやあらむか。翁の孫、本居萬慶、目錄の末に附記して曰はく、

初若菜より、おもひ草の巻迄、翁の影下なり。つら／＼、卷の十五丁以上も同じ。以下は翁後、他筆にて清書す。初篇は寛政六年刊行。のち三卷づゝ彫刻し、目錄一冊をそへて、十五卷五度にて大成す云々。

目錄には、十四卷中の件々、及丁附を詳記して、讀者の便に供せり。翁の意の、すゞるに絶ゆる、玉勝間、つみてこゝるを、野邊のすまびに。と巻首に記されたり。これやがて、書名となりたるなり。一、初若菜六十箇條。二、櫻の落葉四十八箇條。三、たればな四十六箇條。四、忘れ草八十箇條。五、枯野のすゝき四十七箇條。六、かなあむ六十七箇條。七、藤波六十五箇條。八、萩の下葉百十八箇條。九、花の塵六十二箇條。十、山笠五十九箇條。十一、されかづら七十一箇條。十二、山吹八十五箇條。十三、おもひ草百一箇條。十四、つら／＼、梅九十二箇條。

一、玉くしげ、刊本壹冊



此書は、古典の概略を擧げて、大道の山りて來れる本源を明にし、儒佛は、我が國の道にあらざる所以を、極めて、簡明平易に述べられ、寛政元年の刻なり。書名は、本書に添へられたる歌に因みて、命けたるなり。

身におはぬ、しづがしわざも、玉手函、あけてだに見よ、中のこゝろを。

一、秘本玉匣、刊本貳冊

この書は、さる國君の命によりて、施政の方法、時弊を救ふべきことなど、二十箇條に餘る所見を説述せられたるものなり。されば此書は、翁の政治論ともいふべきものにして、當時の政體、民情等を指すが如くにして、嘉永四年の活字本と、明治三年の板本とあり。

一、臣道、刊本壹冊

僅々七八葉の小冊子なり。卷首に、平千麿主の、今の世に古の道もて、君に仕へ、國を治めむ心ばへは、いかにあるべきと、問ひ給ふに、答へさすと、詞とありて、臣たるべき者の道を論ぜり。

一、答問錄、刊本

さる人々の問に、答へられし種々のことを記したるものなり。書中、神祇に關すること最多く、次に言語衣服等、種々のこといもあり、天保六年刻成。

一、標註水草の上の物語、刊本壹冊

此は、錯狂人の末に附られたる書にして、記述の大要は、古の物語の體に倣ひ、寫りて、我が古學の來歴を述べたり。天地の池の邊に人々寄集ひて、池のこしかたを語り、その中に生ひたる水草の一たび我へたるが、又繁りあふさまを言へるなど、實に古學の一盛一衰をあらはしたり。文體簡古なれば、内道翁、これに註釋を施し、門人花園幸國、これを校訂し、天保十五年刊行せり。

一、おもひ草、刊本壹冊

本書は、一名、尾花が本といひ、翁時に興に乗じて、書寫られたる隨筆なり。又體古雅にして、枕草紙に倣ひたるものなり。

一、國號考、刊本壹冊

古典に見えたる、我が國號にて、大八洲國、東原中國、夜麻登、秋津島、師木島、日本、細支千足國等、さまざまあるを、一々、その語の出處を明にし、又その漢字、字音を用ゐたる例など、詳に考證したるものにて、天明七年の刊行なり。

一、眞曆考、刊本壹冊

漢土曆方の非なるるよしを辯じ、皇國固有の曆法ありとて、年月日、閏月のことなど、論證せられたり。

一、眞曆不審考辨、刊本壹冊

翁の眞曆考に對し、尾張名古屋の人、川邊某、眞曆不審考を著して、これを駁せしかば、翁、又この書を著して、これを辯ぜり。書中〇符の下には、不審考に引ける、眞曆考の文を擧げ、〇符の下に、不審考の全文を載せ、〇符の下に、翁の辯駁文を載せて、類別せり。文政三年十二月の刊行なり。

一、源氏物語年紀考、寫本壹冊

こは、源氏物語に見えたる、源氏の君を始め、その他の人々の年齢を考案せるものにして、翁の註釋書に見えたる、誤譯を辯じ、考案を加へ、卷別に、その見えたる人々の年齢を擧げ、末に源氏物語年紀圖説を擧げたり。

一、疑齋辯、寫本壹冊

こは、日下部勝卓の疑齋とて、古語拾遺に見えたる事實の、記紀二典に述へる箇所を擧げて、論じたるものを、翁、その主要なるものを辯ぜられたり。

歌詞系譜等に關する書

一、玉銚百首、刊本壹冊

この書、上は神代より、下は豊臣秀吉に至るまで、歴史上、事實の著名なる事柄を採りて、これを謳歌したるものにて、皆我が古道を發揮し、國風を宣揚するものにあらずばなく、即ち、歌史



の和歌にて、忠君愛國の志氣を涵養せむとせられしなるべし。故に、明會歌集に採歌せられたるもあるなり。

一、本末歌、刊本壹冊、

本末内外の辨を知らしむとて、御國の第一に尋むべきゆゑよしを、歌せられたるものにて、岩政信比古の註も、板本あり。

一、枕の山、寫本壹冊、

翁は、數島の詠にても知らるゝ如く、甚く櫻を愛せられ、起臥常に櫻を詠せられ、それやがて三百首の多きに達し、これを集めてかくは題せられたるなり。題詠のことについては、本書に、翁の奥書ありて、寛政十二年十月十八日と見えたり。

一、渚の玉、寫本壹冊、

こは、鈴屋集に見えたる歌の中に、一きは調高く、委優れたるものを、内達翁、選ばれたるを、門人、橋百枝が、輯録せるものなり。四季戀雜等に別ち、歌の數二百餘首あり。

一、四條宿題會乃歌、寫本壹冊、

享和元年、翁京に上り給ひて、精神と往來せられけると、こゝかしこに歌會などあり。こはおほかた、四條の宿にての會なるべし。日野前大納言實枝、兼大寺大納言公遠、國體權大納言基理卿以下、翁の歌どもを輯め、會日は五月廿五日と記し、終に松友賢相守會の歌、妙法院宮御庭十二景歌をも收めたり。

一、玉の奈都伎、寫本壹冊、

翁の、京都に留り給へる間に、折々催されたる歌會の歌、又翁が伊勢に歸らるゝを送れる歌どもを、門人の輯録せるものなり。

一、手向草、刊本壹冊、

天明元年冬、翁、その門下、及故舊と共に、先師賀茂流酒翁の靈を祭り、併せて、ありし書を、隠ふ歌

どもを蒐めたり。このときは、賀茂翁の没後十三年なりきといふ。

一、落葉集、刊本壹冊、

須賀直見を追悼せる歌集なり。中に見えたる歌は、翁を始め、大平、春庭の諸大人、その他の人々のなり。終に大平翁の歌集あり。

一、鈴屋集、刊本九冊、

こは、翁が少壯の頃より、詠述せられたる歌文の集なり。初は、七巻なりしを、後更に、遺れるを拾ひて、二巻を加へ、今の巻數とせり。卷中を近調歌、古風歌、長歌、文調等に別ちたり。初の七巻は、春庭翁集録して、寛政七年二月刻成り、後の二巻は、大平翁、蒐集して、享和三年八月刊行せり。

一、鈴屋翁詩文、寫本壹冊、

翁が少壯のとき、ものせられたる詩文を、門人の採録したるものなり。

一、本居系圖、附家の昔物語、寫本合卷壹冊、

本居家は、桓武天皇三十二代、尾張守平賴盛、六代の孫、藤原に出づ。本書は、その系統を詳記して、その系圖の下に傳をも掲げ、併せてこれに私家を加へて増補せり。末に、當家傳來書物として、當家傳來の物語を擧げ、その下に、接文を加へて、疑はしきものは詳せり。卷下に、

右系圖一卷、并書物二通者。一志郡大阿坂村郷士、本居林之右衛門父名新左衛門、家所傳來所持也。予今度、始對面彼林之右衛門、相語先祖之由來。乞借右系圖及書物、親書寫之。且當家傳來書物、亦書添之於其後。又考諸書、而皆註附其事。實學。予時明和八年辛卯三月十五日、末孫本居舜庵平宣長謹誌。

とあり。家昔物語は、系圖に掲げたる人々の傳記を書讀られしものにて、尙本居といふ氏の考、略系圖をも添へ、翁幼時の一家の事情、おのが境遇往歴等を詳述せられたり。寛政十年七月廿日記しなへぬと見ゆ。

(以上、井上禮園氏)



### 小西春村

總叙 〔鑑定三〕 伊勢松阪ノ人、鈴屋翁ノ二子タリ。小西某ノ家ヲ嗣グ故ニ通稱ヲ小西太郎兵衛トイヘリ。實父翁ニ學ンデ、詠歌ヲ善セリ。

### 小篠敏

〔鑑定三〕 初道沖、後大記國體龍御野。

(鑑定三)

姓名

學統

〔玉勝間三〕 五十連音を知らんだびとに唱へさせたる事。小篠大記御野といふ人は石見國濱田の殿のじゆしやにて、おのが弟子なり。天明八年秋のころ、肥前國の長崎に物して、於期陀人のまうて來てあるに逢て、音韻の事どもを論じ、龜圖の五十音の事をかたりて、そを其人にとなへさせて聞しに、和のくだりの音をば、みな上にうを寄て、おはういの如く、おはうえのごとく、おはうおのごとくに呼て、いとおとはひとしからず、よく分れたり。こは何をもて然るぞと問しかば、おはじめの和にならへば也とぞいへりける。かの圖のつれの音も、このけぢめありとぞ。此事、おのが字音かなづかひにいへると、全くあへりて、いみじくもるこびおこせたりき。なほそののりの物がたりども、何くれといひおこせたりし中に、なかしき事どもあれど、こゝにはもらしつ。

著書

〔慶著三〕周易蠡測

一三

詩書傍註

五

易翼詳解

四

綴日本紀考證	二〇	三禮傍註	一〇	公事根元私考	三
日本書紀考證	一五	周易證象	二	介義解私考	五
周禮諺解	六				

### 三井高蔭 附高匡

總叙 〔鑑定三〕 伊勢松阪ノ人ナリ。通稱宗十郎、鈴屋翁ノ門ニ入テ古學ヲ研究シ、翁ノ學ヲ精翼ス。姪高匡、又翁ニ從ヒテ後、大平ニ隨ヒ、大ニ勉メ善ス。

〔備考〕 今の三井八郎右衛門の祖なり。

〔慶著三〕辨玉安良禮論一

### 加藤磯足

總叙 〔鑑定三〕 尾張起驛ノ人ナリ。通稱右門七、鈴屋門ニシテ名譽ノ人ナリ。尤歌書ヲ研究シテ、頻リニ進ム。

### 上田百樹

小西春村 小篠敏 三井高蔭 加藤磯足 上田百樹 六五五



總叙  
著書

〔鑑定〕 京師ノ人ナリ、俗稱鑿屋藤助、鈴屋門ノ巨擘、古學ヲ勉強シテ、其學甚精細ナリ、  
〔編者補〕大猷詞後釋餘考 一

### 千家清主 俊信

總叙

〔鑑定〕 出雲國造俊秀ノ男ナリ、名俊信、京師ニ出デ、浪花ニ寓ス、伊勢ニ往テ鈴屋門ノ  
門ニ入り、頻リニ古學ヲ修ス、山陰道ニ古學ヲ興セシハ、實ニ此宿禰ノ功ト云ツベシ。

### 村田橋彦

總叙

〔鈴屋門人錄〕 伊勢國奄藝郡白子の人、通稱、七右衛門、鈴屋門人。

〔編者補〕 春門の父、和歌を善くす。

雜載

〔鈴屋集〕 村田橋彦が老たる母をぬて、かくれがにうつり住けるよるこびの歌をきいて、よ  
みておくりける。

あしたづのむら田の君は、たぐすま、白子のうらのまごもかる、紅しまのまごに、くれ竹のよ  
をかされて、松が根の、とほく久しき、家の子と、えられ給ひて、その里を、うしはきぬます、その雲に、  
つかへまつらし、其里の、事とり持て、あらたまの、年もへぬれば、今しは、いさもやすめて、たらら  
れの、母の命に、おこたらず、さやることなく、朝よひに、つかへまつらむ、こまつるき、わが老の世も、

著書

〔編者補〕安濃の日記 一

### 殿村安守

總叙

〔鑑定〕 伊勢松坂、國助吉、後佐五平、學本居宜長門下、歌人、

### 殿村常久

住所

伊勢松坂、(安守の子にして宜長門)

〔編者補〕大神氏、萬藏

〔夜舟物語〕

伊勢松坂、殿村常久が書ける夜舟物語を見て

淨土法華、兩真宗の、乘合に、誠を引いて、ときし大綱。

大と小の、乗りをあらそふ、宗論も、はつる處は、うその川舟。

船中に、一夜伏見の、夢がたり、佛まどひを、さますあけがた。

〔慶著〕宇津保物語年立 二

千草の根さし

かたばみ草 二

但馬日記

夜舟物語 一

(以上慶著、和)

(鑑定、三)

著書

〔編者補〕皇語うひまなび 一

千家清主 村田橋彦 殿村安守 殿村常久



住所  
姓名  
著書

甲斐國山梨郡田中村、(宜長門)  
〔通稱〕初徳兵衛、後平吉、  
〔近著〕甲斐國名勝志五  
〔慶著〕石森孝女傳 一

道のしをり

三

(慶著和、鈴屋門人傳)

### 和泉眞國

住所  
姓名  
學統

江戸箱崎町二丁目、  
〔通稱〕東吉郎、文三郎、鹽渡邊屋、  
本居宜長門下、  
〔鑑定〕曾テ村田春海ノ令義解ノ大論アリ、以テ博覽多通ヲ示ス。  
(參照) 寛政異洲の條下、「春海との争」—三八四頁。

以上、鑑定、三(鈴屋門人傳)

### 長谷川菅緒

總叙

〔鑑定〕 通稱三折、和泉ノ人ナリ、歌學古學ヲ修シテ徒ニ教示ス。

### 大塚嘉樹 蒼梧

生歿  
住所  
姓名  
學統

生 二二九一、中御門、享保一六年、  
歿 二四六三、光格、享和三年六、二九、  
江戸、國江戸淺草本覺寺、  
〔通稱〕市郎右衛門、  
〔通稱〕子敏又敏卿、  
〔通稱〕蒼梧、

(以上、古學、下)

〔續人物〕 幼ヨリ學ヲ好ミ、詩文ヲヨクス、中年ヨリ我邦ノ記傳ヲ講習シ、遂ニ律令等ヲ奉崇シ、有職故實ヲ以テ、子弟ニ教授ス、兼テ性理ノ學ヲモナシテ、服栗齋、黒澤雄岡ナド、皆友トシヨシ、是ヨリ先ノ有職故實ヲ以テ、稱セラル、人多クハ皆學識トボシ、故ニ其著述モ傳フルニ足ラズ、蒼梧コ、ニ見ルヲ有テ、經史ニ博通シ、和漢ヲ貫申シテ、鉛槧ニ從事ス、其考證ノ精核ナルヲ、安齋ナドノ上ニアリ、晩年ニ至テ、ソノ名一時ニ顯ル、著述ハ皆後生ノ裨益トスル所ナリ、

〔近著〕裝束拾要鈔校正 二

深窓秘抄傍註

良家子説

正從濁音考 一

文飾私考

白馬節會拜見記

歷代將軍略譜 一

紫古今同異考

古稱數目

萩原元克 和泉眞國 長谷川菅緒 大塚嘉樹

六五九



閏月稱後月考	菅公眞影畫飾考	寬政改元雜事
六位藏人臆斷	度地一步考	引兩字義
流內流外國解	關東坂東考	神前帶劍考
位署式補義	位署式補義或問	古今左右尊卑辨
檢非使篇別註	大刀契考	服飾正誤
服飾類聚	中書侍從帶劍考	趨塵黃襪染考
國郡大小名義差別	歲時故實大聚	代與世差別
狩衣種類	直垂私考	劍傳稱謂
乘輿品目	足衣制作	几帳制度
末額物品	慶賀笏記	事物異稱
勘解由字義	刀劍畧說	十二所與當位同等案
傳奏次第	角大師眞影漫談	僧侶官位志并附錄
百寮官位相當畧	立蔭解	女帝子爲親王解
京師條路圖解	魚綾考	釵子考
尺度考	綾文考	凶事衣冠考
喪服互異考	六等九級三十階考	伊雜伊蘇兩宮考
儀同三司考	鬘斗目名義考	笏考

端午幘冑考	俗稱年忌厄年考	國司國造考
年賀贈物名目考	鈎點引墨考	馬事禮儀
〔慶著〕內侍司准位等差	十二位官位相當略	百寮調要抄別註
八坂瓊之曲玉解	無品親王無任官例不審	同准大臣條中本稱調點
同學館院別當條王氏之疑辨	裝束圖式補正	禁秘抄小上臈句解
子孫襲職例		服色名目類聚
職原抄准三宮大臣之條細解		
職原抄參議篇年給二合解		
服色部類	服色部類附錄	冠服沿革記
卷纓故實	水汗傳書	蒼梧叢書
雜衣四條	木蘭地并香色解	五節名義
四位人着紫指貫否	續平緒傳書并唐組	當色考
一斤染考	扇之由來	烏帽子物品
水汗著用并名目考	淺杏裏無等臆斷	古實考
古稱數月義	左右尊卑辨	鞞車軌行圖說
帶所用品	懷刀舊制	綿甲
年賀贈物名目抄	藥玉考	魚冠雀馬獸解



宮殿之稱	一	新道中殿後書新歌	一
荒海障子由來	一	帳臺之間	一
坊保町圖解	一	公方之稱謂	一
源平武將分派略圖	一	本朝四姓甲乙差別	一
喜天美見具佐	一	秋雨の燈友	一
まゝならぬ	一	昌平漫筆	一
貞丈翁赫虎	一	花押之稱謂并名目釋義	一
僧政官位相當略	一	僧徒官位呼名并准位案合	一
得長寺院連華玉院兩刹之子細	一	洛東大佛殿曲線記事	一
入講會之義	一	黄金名義	一
驛鈴之圖并事義	一	采女與舞妓格別考	一
初學入門之日時	一	死地觸穢有否辨	一
駿臺遺老話	一	駿岳隨筆抄	一
橘翁文章	一	奏算名目抄	一
〔編者補〕古今武家裝束	一	若梧漫筆	一
			八

### 根岸典則

〔編者補〕家集に溪雲軒和歌集冊一ありて、其跋に享和二年初秋時雨庵淨月ととあれば、典則は溪雲軒と號し、享和年間の人なるべし、又其集中に

逆月逆月禪門に批判のことかをひける詠草に添へて、  
 かきおくも、もくつばかりの和歌の浦に、よする心は、人なみにして。

とあり、而して澄月は垂雲軒と號す、彼是思ひくらぶれば、典則は澄月の門人なりしなるべし。

### 森山孝盛

〔賤の緒環〕通稱は源五郎、闇窓と號し、江戸の旗下にて、祿四百俵を食み、麴町清水谷に住す、寛政中、小普請組より御徒士頭となり、後、御目付、御先手組頭、盜賊改加役に歴仕す、循吏の聞えあり、國學に通じ、和歌を善くす、文化の初め没す。  
 (遺知書會第六編)

〔同上〕 賤の焼藻 賤のをだ卷 闇窓新話

### 齋藤幸孝

生 發 四 二四一八、桃 園、寶曆八年、  
 四 二四六四、光 格、文化元年三、一九、四四七。



住所

江戸國淺草報恩寺中法善寺、

系圖

○幸雄——幸孝市左衛門

著書

〔續近著〕江戸名所圖會 二〇

江戸名所圖會拾遺 五

東都歳事記 五

(以上、足利下)

裏松固禪 光世

生歿

生 二二九六、櫻町、元文元年一一、一一、

姓名

名 二四六四、光格、文化元年七、二九、國六九、

系圖

前權中納言益光

正二位兼敬一女——光世國

年譜

〔大内裏圖考證〕 附從四位裏松光世朝臣略年譜

(以上大内裏圖考證)

寶曆 元辛	一六、	六月廿二日叙從五位上。
元文 元丙	一、	十一月十一日誕生。
延享 四卯	一一、	七月廿三日相續。十二月廿六日叙從五位下。
寬延 二己	一四、	十月廿六日元服、遷昇殿、任左兵衛佐。
寶曆 元辛	一六、	六月廿二日叙從五位上。

官歴 經歴

〔大内裏圖考證〕 裏松光世は權中納言益光禪の男にして、後に國朝と號せり。元文元年十一月京郡に生れ、幼より學を好み、有職故實に精通せるを以て、一世に稱せられし。延享四年、從五位下に叙せられ、後正五位下に進み、寶曆八年、右少辨より左少辨に轉せり。當時竹内式部、京都にありて、盛に垂加流の神道を唱へ、皇室の尊嚴を觀せしかば、就きて學ぶ公卿も頗る多かりし。禪も

裏松固禪



内裏炎上

没  
雜載

朝儀復舊の沿革  
寛永有職

亦これと相往來せしが、終に幕府に忌まれ、永く齋居の身となりぬ。大内裏圖考證は、即ち齋居の著なり。然るに天明八年、内裏炎上して、老中松平定信、遺書の手を掌りしが、齋居の有職家たることを聞き、就きて問ふ所ありしに、其の著考證を以てこれに示せしかば、定信大に歎賞し、與して其の齋居を解きぬ。是より齋内の恩命を蒙り、内裏遺書の手を掌りしに、種々御下問に事著せりといふ。寛政二年秋、内裏竣工して、往古の制に復せるは、實に齋居の功多きに居るといふべし。また其の著考證を献上しければ、朝廷時にこれを賞して、終身金帯を賜ひき。文化元年没せり。年六十九。のち明治二十四年、朝廷更に從四位を贈りて、其の功を追賞し給ひぬ。

〔山田落穂〕 文明應仁の亂後、朝廷御衰微にして、諸事の儀式廢絶したるに、慶長以後、昇平の徳化によりて、寛永年間より有職人諸家の舊記を考へられ、舊記を復舊せらる。しかれども此頃いまだ、紀錄世に乏しく失考多し。是を寛永有職といふ。其後貞享の比、大嘗會御再興に付、御厨子所預紀宗恒、命を蒙り、勅物并諸圖等を奉る。此頃一條攝政、東極兵部卿宮親王、宗恒と共に商議ありて、類聚雜要抄彩色圖をつくらせ給ふによりて、古の調度の製大に明らかなり。其後、滋野井公澄卿、野宮定基卿、有職の譽あり。元禄七年、賀茂祭御再興ありしより、ます／＼舊儀に復せらる。事多し。元文の頃、新嘗祭御再興につき、貞享の失考をあらためられしことあり。荷田在滿の大嘗會具釋便書等も、此頃の著述なり。天明大嘗會の時、中山愛親卿、有職の人にて、大に舊儀に復せらる。事あり。天明八年、裏松固禪入道、三十年來の間、齋居の艱難を凌ぎ、大内裏圖考證五十餘卷を著述せられし功、一時にあらはれて、新内裏、清紫兩殿、承明門、宣陽殿、佐仗坐等を舊制に復せらる。此時、藤叔藏幹も力を盡して、入道殿の學業を助けたり。是によりて、朝儀古典、大

學問の事

著書

生歿

姓名

五十機圖の詞

に一變す。新内裏還幸并新宮句讀等、文物大に盛なり。其後文化文政の間、御讓位、御即位、大嘗會、加茂八幡臨時祭、仙洞御幸の御行粧等の事、ます／＼舊儀に復せらる。事多し。〔同上〕 裏松光世朝臣、入道の後、甚しく困窮し給ひしかども、盛雪の功怠り給はず。一番の文書もたくはへ給はざりしかば、諸家の藏書を借り求め、手づから抄録し給ひ、當年來志を變ぜずして、大内裏圖考證五十冊餘、皇居年表十冊をあらはし給ふ。誠凡人の所爲にあらず。しかるに寛政新造内裏の時、齋居を赦免せられ、朝參の御命あり。數年齋懷一時に散じ、比類なき面目を施し給へり。今の裏松殿、又伊勢の春木氏の子弟だち、入道殿、數年來の苦學をおもひやられて、遺書を校訂せられ、遺志を繼れたき事なり。以て此事を希望するは、入道殿御門下にて、舊恩をおもふ故なり。

〔編者補〕 大内裏圖考證 五〇 皇居年表 一〇

### 荒木田久老

生 二四〇六、櫻町、延享三年、

歿 二四六四、光格、文化元年八、一四、 五九、

通稱 彌三郎、後主税、正恭、正薰、五十機圖、

〔鈴屋集六〕 荒木田久老神主の五十機圖の詞

あらかたの久おゆの神主は、世の人の、五十機圖の言と聞ゆなるは、その家ゆちに、物まなびせし所

(以上、三十六歳、上)

本居宣長



の名をし、いつきの園といへばなりと、風の音のとほとに聞て、思へらくは、遠つ神世に、遠達すまのをの大神の御子神だちをひきぬまして、もいたらす八十の木種を、大入洲くぬらしみみに、まきほどこらし給ひしより、青山なせる木はしも、さばにみちてあれども、櫻の木はもと、あるが中に、ことなる故かも有けらし。ほつせの朝倉宮に、天の下知しめしま、大御世に、三重のうねべがまに、さげたりし、大御玉うきに、ふりにし百葉を始めとして、いにしへの御世々々には、此木のこの木にして、とよのあかり見せしことも、大御靈たびけるあとも、いそのかみふるきふみらに、かたをより、にぞ見えける。然りけるのみならず、なにはのよまききの宮の、大御世のはじめには、臣、連、八十伴緒をめしつとへて、おもきゆいしき御うけひ言を、きこしめし、も、此櫻の木の本、又、淡海の大津宮に、大ましく、て、天の下しるしめしける天皇命の、大御靈命の御代より、春へさくふぢはらの大臣と、大御心をあはせまして、いなしこめ、またなきやつこをほろほし給ひ、まさきづらいやとこしく、かばらずたえぬ、天つ日嗣のゆや事をしたて給ひ定め給ひし、宮臣のふかきかしこき御むつびも、此櫻の木の本よりこそは始まりしか。かゝるよしある木なれば、まよと、つらつらに思ひたどれば、うべなく、あなふきはしの屋戸の名や、あなおむかしやどの名や、あろじのまなびも、たゆみなく、いやすゝみにすゝみゆきつゝ、この屋戸の此名にしおひなば、ふることまなびの道はしも、そのこち、のえのしげきがごとく、いやとしのほにしおひなつゝ、本よりのたのます神風に、天つ空までいぶきのほして、ほづみのえのうら葉は、ひさかたのみやこにちりしき、中つ枝のえのうらば、鳥がなく、東にちりしき、しづえのえのうら葉は、あまざかるひなの園へに散しきて、園の八十園、島の八十しま、おつるくまなく、ちりしきみちて、いにしへしぬばむともがらば、其落葉をしいひろひ持て、木立のものとをしぬべらば、四圍の園より、みなと入に船こぎきそふ事のことく、あらそひきつゝ、立よりて、これの五十櫻の木陰をし、あふがざらめや、頼まさらめやと、おのれはた此あるじとは、同じ心に、あがたぬの大人の教をうけて、まなびの道には、はらからなすゆみよし、あれば、これもまた、おやじこゝろにうれしみなむ。

系圖

伊勢外宮編官  
 〔編者補〕 度會正身 子 四久老 久守



學統

縣門の巨擘

〔三十六家上〕 常に故郷を出でて、所々を漫遊し、古典を釋きて教示す、從ひ學ぶの徒、頗る多し。凡て其説くところ、古人の跡をふまず、依然として一家の學を唱ふ。時輩、鈴屋の説を背けざる者は、多く翁に從ひて業を受く。實に縣居門の巨擘、當時の一家家なり。詠歌は其專とする所にあらずれど、又一體の妙を得たり。

〔三十六家上〕 幼より皇國の古典を研究す。ことに神典に於て、己が職とする所なれば、深くこれに精しからんことを欲し、専ら神代卷を究む。後、賀茂真淵翁の門に入りて、益精力を盡し、大成す。殊に萬葉集に於いて、大に研究し、縣居翁の萬葉考に次いで、櫻の落葉を著す。

萬葉を見よとの真淵の教

〔櫻の落葉〕 師のおのれが許にいひこされし言に、かにかくに萬葉をよく見よ。萬葉をうたのみとおもふは、まだしきなり。いにしへの人の心言業を得んには、歌の外やばある。萬葉をよく見ば、おのづから、いにしへ人になれ行て、その身、その世、その時にあるがごとく、儒佛の道にまよはされぬ、いにしへ心に立かへりぬべし。さてこそ神代のことをも、うかひしるべきなれ。平瀨の人の上にたゝんば、この學なりといはれしは、まことにさる事にて、かたじけなき教言なりけり。

〔同上〕 今の世、この古學は、みさかりにおこれるものながら、萬葉かしも、盡しくする人のなきはいかにぞや。吾郷にても、たゞ、萬葉を見る人あれど、いにしへ心をしらんものとしも、おも



年譜

〔編者補〕

はす。彼の世の心もて、その歌のよしあしなど、論ひをることなれ。いかて其の意に、上つ代の歌のよしあしは、わきまへしらん。こは詩文の徒の文にふけりて、實をうしなへる心のうづからなる神の道をもとめよ。

延享 三、一	生れ。
寶曆 三、八	外祖父秀世ノ嗣子トナリ、權通宣親ヲ承キ主殿ト稱ス。後、故アリテ隱居シ、中書ト改ム。
同 一三、一八	從五位上ニ叙ス。
明和 四、二二	正五位下ニ叙ス。
同 八、二六	從四位下ニ叙ス、齊ト改ム。
安永 二、二八	位配ヲ返上シ、職ヲ辭シテ、荒木田求馬久世ノ嗣トナリ、久老ト改ム。内宮權通宣ニ稱ス。
同 三、二九	五十槻ト改稱ス。
同 八、三四	從五位上ニ叙ス。
同 九、三五	正五位下ニ叙ス。
寛政 元、四四	從四位下ニ叙ス。

文化 元、五九、八月十四日歿ス。

(以上、續古學上、三十六家下)

性行

權上に奇説を吐く

〔三十六家上〕 翁、爲人、豪放不羈にして、常に青樓に登りて、遊宴日を経、湖池内林を以て樂園とす。しかして其醉中、忽然として、筆を拍て曰く、古今未發の考をなせりと。かくて人に謂て曰く、江湖の學生を見るに、古語の難義、古典の解しがたきに至つて、これを釋き得んと苦學し、机上若干の書を閉きて、沉接したりとて、いかてか眞面目を得んや。吾學はまた異なり。權上遊宴なし、妓樂を陪座せしめ、盃盤環藉、しかして未曾有の奇説を發す。是れ眞の活考たり、世人の學者は、多く死物たりと。

〔近著〕万葉考槻乃落葉二冊附八

日本紀歌解 三

續日本紀歌解 一

竹取翁歌解 一

肥前風土記 一

豐後風土記 一

校正出雲風土記 一

古本和名類聚抄 二

祝詞考校訂 三

祝詞考追考 一

古言清濁辨論 一

難波書地考 一

酒之古名區志之考 一

通飛麻那徵校訂 一

歌意考同 一

文意考校訂 一

古器考同 一

古事記歌解 二

播磨下向日記 一

〔慶著〕五十槻園集

播磨漫錄 一



### 吉本虫雄

生歿

生 二二七五、中御門、正徳五年、

總叙

歿 二四六五、光格、文化二年四、目九一、

谷垣守に學ぶ

〔日本教育史資料〕吉本虫雄、或ハ虫夫ニ作ル、東原ト號ス、通稱ハ外市、父某八郎左衛門ト稱ス、小吏ト爲リ、後城南吉原村ニ移居シ、郷士ト爲ル、虫雄、人ト爲リ、方正勇敢、上ニ諂ハズ、下ヲ慢ラズ、言行必規模アリ、谷垣守ニ學ビテ、篤ク其説ヲ信ジ、歌詩ヲ嗜ミ、書ヲ善クス、年三十ヲ過テ、始メテ鑿劍ノ術ニ志シ、今喜多高則ノ門人ト爲リ、蓋ク其流ノ許可ヲ得タリ、五十ニシテ郷士職ヲ子里兄ニ讓リ、吉原村東ノ原ニ閑居ス、里兄、性質放蕩ニシテ、産ヲ破リ、終ニ其職ヲ他ニ讓リ、虫雄ノ所ニ同居ス、此時虫雄年六十餘、益々志ヲ勵マシ、文武ノ技ヲ門人ニ教ヘ、旁ヲ醫ヲ以テ糊口ノ資ト爲ス、天明七年、藩主大ニ國政ヲ釐革シ、虫雄ヲ以テ本村ノ長ト爲ス、時ニ年七十三、翌年長岡郡本山郷ノ長、異有リ刑セラシ、虫雄選舉セラレテ、其後任ト爲リ、能ク其職ヲ修メ、郷民信服ス、居ルコト數年、年老タルヲ以テ、辭シテ吉原村ニ歸リ、門人ヲ導クコト番ノ如シ、文化二年四月、九十一歳ニシテ歿ス。

著書

〔同上〕老木筆

芳春日抄

文武を門人に教授す

### 僧 慈 延 大恩

生歿

生 二四六五、光格、文化二年七八、

姓 名

大恩、吐屑庵、

學 統

冷泉爲村門  
和歌の四天王

〔三十六家下〕慈延、叟は、洛東岡崎村に卜居して、大恩と號し、また吐屑庵といふ、もと天台の僧にして、佛理を研究して、最、智識たりしかれども、世の俗僧と偕にせんことを厭ひて、終に隱遁し、冷泉爲村卿の門に入りて、詠歌を學び、頻に進みて、竟に感能にいたる。當時平安にして、所謂小澤芦庵、伴蒿、巖、澄、月、慈延、叟、これを和歌四天王と稱す、叟また漢學にも精しくして、最、博文多識、故に其歌に於ても、そのづから、其風致ありて、また超凡なり、既に橘春暉評して曰く、師の詠歌におけるや、清新况味を詠みて、漢學を兼ね備へたる、實に此道の宗匠なり、といかにもしかるべし。

### 小野泉藏

住 所

〔生地〕備中淺口郡長尾村、

〔備考〕慈延の門にて、木下幸文と同郷、

系 圖

小野櫟翁の弟、務の叔父、今の節氏の祖父、

(以上、備三〇)

吉本忠雄 僧慈延 小野泉藏



(參照) 木下幸文贈小野泉藏書——木下幸文の終下、

### 荒木田經雅

生 歿 二四〇三、櫻 町、寛保三年、  
 二四六五、光 格、文化二年、**目六三**、  
 神宮禰宜伊勢の人  
 〔慶著〕太神宮儀式解 三〇  
 〔編者補〕頭注延曆儀式帳

(以上、慶著、補)

### 荒木田麗子

生 歿 二三九二、中御門、享保一七年二、  
 二四六六、光 格、文化三年正、**目七五**、  
 生地 伊勢山田、**伊勢山田浦口町、虚空藏谷**、  
 (辭 世) 松や昔語らば夜半の夢の友。  
 身や胡蝶花になれしも一昔。  
 〔和庵雜編〕 慶應麗女遺稿  
 初の名は麗、後故ありて麗と改む。紫山は其の號なり。北海子付らる。又諸語と號す。三角付らる。字

(以上、女流文學史)

幼時の性行  
勉學のさま

養女となりて  
やうやく讀書  
の道ひらく

和歌に志す

四山昌林の門  
に入る

里村昌雄の門  
に入る

は子奇、(龍川) 幼きより和漢の書をよむことを好めり。兄弟男子なるにより、常に其のふるまひを見ならひて、女子のわざをさしに學ばす。七歳にて入學せんことを願へども、女子の無用の事とて、父母さらしにゆるされず。むかたなきまゝに、兄武世の讀まるゝをきいて、大學をかつかつ覺えて、そらによみけるに、兄正富、強く好みけるを賞して、古今集の序、伊勢物語等をよませらるゝにより、いまだ手ならひせざれども、假名文字よみおぼえて、綴松などをよみたり。八歳より九歳までに、いはばの手習をもして、又論語孟子をも習へり。物よくおぼゆるよしきいて、白田陽山、弟子になすべしといはるれども、無益なることとて、父母きゝ入らざることなく、さしおかるれば、いたづらに童遊などにて過すを、我はいと本意なきことにおしひて、兄武世の講席にのぞむとて、書を懐にして朝毎に出てゆかると、毎に英みて、ほかなき假名草紙にても、且讀みておぼえんことを好めり。兄息雅は、唐大和の軍書を好みて、其の物語などをよみたり。しきことにて、朝夕此の人の宮仕怠らず。十二より親離のわざ、女子の習ふべきことならはすべしとて、正富、書に心よすることを制して、琴を教へらるゝに、よく覺ゆるやうなれど、さらし心には入らず。十三にて伯父武遇に養はれて子となり、そなたにゆきたり。武遇も書など好まれば、たよりある心地すれど、しひてまなぶことほなくて、只軍書など見るのみなり。武遇も養をうしなばれしかば、母とする人なきゆえに、おとなしき婢女を置きて、裁縫等を習はして、養育の道おろかならず、愛憐の餘り、ものよく覺ゆるをよるこばれて、十四より、詩文の類、文選等を教へらる。又歌を父のこのまれば、十五にて、始めて歌の道をたづねて、心安き詞につきて習ふ。連歌は元來好むこともなかりけるに、親兄の勤めにしたがひ、十六にて、なほはじむたり。兄正紀、先達にてみちびかるゝやうなりし。十七にて、浪華の四山昌林の門に入りたりしほどなく、面白きことと思ひて、學問に怠りて、專歌書に心を入れたり。十九まで、他事なく、夜心にかけるに、ぞ、かつ、稽古も成就しけるよし、師もゆるされき。其の後、昌林もうせ玉ひしに、二十一にて、洛の花下、里村昌雄の門に入りたり。是は女子の連歌は、轉なりとて、殊に賞して、入門興行の一會も、こなたよりすることなるを、あなたよりせられたり。是は兄正紀、もとよりの門人なりし、同道にして都にのぼりたる折なり。されど其の頃より、病多くなり、又父武遇も過ぎ行かれ、何となく、浮世

荒木田經雅 荒木田麗子

六七五



年三十歳上京す

難波にゆく

名を麗と改む

故郷に火あり

須磨の療養

字和島侯の弟其居を訪ふ

をふるいと名など暇なく、愛なる連歌の人々も、多くは失せゆきなどして、心にはかけなが  
ら、おのづから念りがらなるに、兄正紀も身まかりたまひしかば、我のみ残りて、時々雨吟歌の  
巻など、都につかはすのみなりけるに、昌徳師さへなくなり玉ひぬれば、いよ此の道すたれゆ  
きたり。今は一向に忘れたるやうなれど、世の人は知り聞きて、時々おどろかすもあれど、更にう  
けひかず、申々むづかしうさへ思ひたり。かくて年月うつりて、三十にもあまりて、明和のはじめ  
の年、故ありて都にのほりたり。昌徳の後、昌桂の門にも入りてあるに、又一昨年より里村頼甫の  
許にもおとづれしかば、此の折も往來して、連歌の道學ぶやうにて、昌桂同族なる玄忠、其外昌徳  
門人の人々にも心やすくなりて、度々席にも連なり、鐘天神の會などにも招かれき。おなじ年の  
秋九月、都を出て難波に行きて、しばし愛にも住むべきよし、其の所にも連歌の友ありて、天満天  
神の會にも出づべきよし、ねんごろに聞ゆる人々あり。されど愛にては、さやうの交は思ひ絶え  
て、ふかく人にも思ひて住むべきなりければ、我と知られんことをいとひたるに、名をも麗と改  
めたり。かくても難波の住居のものさわがしく、問來る人も絶えやらねば、いかで知る人なき所  
に住むとて、住吉にゆきたりしは、ことにしづかにて、問ふ人もなく、こゝろにかなへり。又歌をも  
おもひ出て、夜々／＼のたのしみとせり、其の年十二月、故郷に火ありて、家もゆけにしかば、旅住す  
べくもなく、いそぎ家作るべきたばかりをのみして、おなじ二年四月、又難波にうつり住みて、霜  
月みやこにのほり、夫より故郷にかへりたり。此あひだのことば、須磨の療養と云へる紀文あり。  
程なく家もつくりはて、同じ三年五月、其人難波に遊行せられけるころ、遠き國よりとて、いかに  
ぞ家はつくりしぞや、ことなくてありや、と、訪きたれる人あり。誰にやとみれば、伊豫國宇和島侯  
の御舍弟にて、一昨年京にて、宇山有可軒ときこえて、花下なる連歌の席にて、こゝろやすしけ  
る御方なり。おされまどひて、見ぐるしきところにもしばしなどいへば、思ひて神話しけるも、お  
ほくば友をたづねんためなり。御師へゆめ／＼知らせせと、くちかためたまひ、是より京にのほ  
るなり。昌桂昌甫などに百傳やある。おなじくはるるに、歩にて、供は十人ばかりにて、いたく思ひた  
るにのたまひて、立ながら歸らせたまふ。雨のふるに、歩にて、供は十人ばかりにて、いたく思ひた  
まふとて、急たまへる。程経て後は、津國朝田の青木侯とぞきこえし。その後愛には連歌志りが

閑居讀書を事とす

空種物語を校訂す

江村北海に詩を學ぶ

國史を研究す

池の藤府月の行方

山の井笠舎

三角先生と交る

にて、たよりも覺束なし。その頃より、いとまあるをり、書をみることをのみして、家に書の上  
しきまゝに、宮崎文庫より借りて、通監朝日又詩の書、和歌の書等を、年かされて讀むるたのしみ  
とせり。其人、又書をこのみて書寫などせらるゝも、いとまよりあり。又波羅のいとまに、阿蘭布を  
幕しけるを、人々興じて望まれき。十種香などならひて、これ心に入るるやうなれど、女侍のな  
きによりて、稽古もはか／＼しからず、香包をみ手づから縫ひならへり。又空種物語甘巻なるを、  
其人東行の折から、求められける。時々見るに、さらによみ得がたくて、一度二度さし讀みし。され  
ど其のまゝにすておかんも本意なくて、明和五年の春、其人、攝津國に遊行の跡、ことに據然なれ  
ば、空種物語とり出て、再讀したるに、やうやう心得るやうなり。誤字とみゆる所おほく、一二の  
順違へるさまなれば、見るにしたがひて、押して一二の順をあらためみるに、いとよくわかりゆ  
く様なり。其人、家にかへられて後、かくと云へば、おなじびて、やがて來してあらためらる。夜なよ  
な校合をもして、誤字をも改め、目錄系圖をかきたり。同じ年より、詩をもつくるべく、其人すゝ  
めらるれど、是は才力なくて、いとかたきことにしけるを、しひて罷さるゝも、説方なし。をりしも  
姪與正が、京に遊學しけるを、たより江村北海先生の門に入りしも、はか／＼しくもえせぬこ  
とゆゑ、耻しく思ひたり。又その頃より、歌の方に心を入れて、和文をもかづ／＼書き習ふ。これも  
其人のこのみにて、時につくの辭、豊臣大江等の辨なり。それより、日本紀をばじめ、我が朝の國史  
類、諸家の記等、又公事の書有職の書の類をみるに、殊におもしろく、心とむるやうなりしかば、又、  
其人、さらに假名國史に似たらんことを書出でよと望まると、いよ、池の藤府を書きたり。是  
は北海先生の序あり。跋は岩垣亮卿なり。後三角先生も序を添へらる。次に、月の行へば、野公台の  
序あり。また作物語をも書きてよとあれば、桐の葉、小手巻などかきてより、つゞきてあまたかき  
あつめて、書林などにつかはしけれど、さのみめづらしくもあらぬものゆゑ、後にはなれば、反古  
になしき。又、山の井廿九巻は、作物語に公事をかつ／＼こめたり。笠舎五十四巻は、これも國史に  
ならへり。其人、世の交を嫌ひて、閑なるをこのみ、つねに書をうつつすことをのみせらるれば、我も  
亦筆とることなたのしみとせり。詩は殊につたなく、みぐるしければ、人に見すべくもくて、ふか  
くかくすやうなるを、程へておのづから人もしりて、洞津の文藝三角先生、古體の詩をのぞま







藤の岩原  
宜長翁との論

京より播州に  
遊歴す

後午の記

信もなかりけるに、三月九日朝より暮るまで、京、難波、津、豐原、何れも集れり、詩歌とり、  
なり、武子は歌、大儀は詩を給へり、其折、末の松山の松が枝にて置れる筆を、武子へ書らせければ、  
即歌あり、又武子の六十の賀に、三千年といへる菓子を送りて、きかば、あなにより、賀の理  
物とて、たまたもの二種あり、其の頃、作物語は遊仙窟を撰して書きたるを、桃源と號したるに、藤原  
御隠居御覽ありて、和文にはこは、しき名なりとて、藤の岩やとあらためたまへり、其の如き  
じおもむきなる野中の清水は、本居宜長、何國より傳はりけるにや、見て、藤にしが、安永六年、遊歌社中、  
陳じつかはす、後は三角先生取り次に、藤原再三に及びて、藤にしが、安永六年、遊歌社中、  
久保倉弘典誘引せられて、駿河國青島村の、青島何某の母、女の使女、神拜してたづねらる、歌の道  
に、こゝろざしふかくて、見るべき書などのこと、同ひて、弘典の家にと、まられし中には、しばし  
ば文通はし、歌の添削をも乞はれける、こゝより都にのぼるとて、出立の程は、餘波をしまして、藤  
の歌をつかはす、返歌もあり、又初午の紀文をつかはしければ、よろこびて、道しるべとなして、播  
磨大和などめぐられし、國に歸りてのちも、絶えず文通しなどせられき、天明二年の春、又遊行し  
て、京より播磨にいたるとて、都にては草庵の家を舎とせり、かへる道、兵庫にて歌よむ人ありて、  
しひてと、むるにより、四日ばかり居て、其の所の所、西歸たづねなどして、後、難波より大和路を經  
て、初瀬の花盛なるを、たづねりて見る程、陸奥の白河侯の家士なる人に行きあひけるに、土庫に  
行くべしと、望まるゝも、いなみおたたく、短冊に歌かきてつかはす、此の折もまた、後午の記あり、乳  
熊の怪心、禪師も、音信ありて、詩を送られ、又歌をもよせられける、是より、大儀などに歌をもつ  
かはす、家に一夜宿などせられて、後、觀世音信心せよとて、遊儀をめぐられし、五十の時、賀歌をお  
くらる、今は五十にもあまりければ、子など養ひて、其の旨みに、何事をも、捨かぬるやうなれど、遊  
歌は、其人もこのまれ、社中もあれば、すてがたき老のたのしみとなせり、此れは年頃のことにて、  
世の人多く知りきこえて、あれば、遊き、國よりたづねくる人々の、絶えぬ、さすがに心しづかなら  
ずおもひき、又其所の事、疑らるゝ、奉行なる野一色、後より、東武の女子の、筆なる、孔明の書、の歌す  
べき、仰言も、いなみおたたく、發句をばかきて、まゐらす、次手に、發句、歌などもめされき、又一歌の  
御方より、來年の月毎の、大小、笛きたるを得たまひ、其の、思事、和文、代作にかくべきよし、傳にて、こ

能跡を踏ふも  
の多し

田舎宗匠

匠人に跌る  
古稀の賀

れなまもわらす、此のことは、天明六年の冬なり、手のいとあしければ、物書くことの見苦しう、  
のうくすれど、世の人はゆるさず、扇、短冊も、もて來る人になべてのとなり、常にたへぬもせんか  
たなきまゝに、日を定めて、月毎の廿五日に書くべしと、ひとにいへば、廿二日のころより、いと  
かつく、に、文机につむやうなり、すべて一日には書きあへず、又の日に、およべり、これら、春夏の  
うち、はさのみおほからず、葉月より霜月までは、あまたなり、故立つ人の、其の、爾々へとてなりけ  
り、さては、遊歌社中は、新曆と名づけたりし、の添ふまゝに、手のいとあし、ふるへて、まことに  
物かくこと、たへがたきよし、人々にもつけ、るに、ぞ、寛政のはじめより、すこし少くなりたり、  
今は、洛の花の下も、昌桂子なる、昌逸なり、そなたより、遊歌の、田舎宗匠もゆるすべし、かならずの  
ぼりてよと、懇にいひ、こされしを、ふかくよるこびながら、今は、いたく、老いて、遊行も、堪へがたく、  
遊歌もの、ふりて、當時の、風味にもあらず、元來、我が身の、たのしみと思ひて、あれば、細き名の、世  
に、ひろくならんこと、は、はがはしからず、例の、くさ、しき、こゝろにも、かたじけなき、し、いひ  
て、かたくなみつかはしたり、おなじとき、豊後國、賀久、惟次、田舎宗匠の、遊ゆるされて、和句を、送  
られし、是より、もよるこびの、發句つかはし、ぬ、寛政三年七月、東武、柳營の、御遊歌、細川、昌徳、國に  
遊行して、たづねられしかば、文庫の、會へも、招じたり、御師の家、に、しばらく、會りて、内宮へも、ゆき  
など、せられて、月の末に、わが家に、一宿して、すなはち、出で立たる、遊歌のこと、談合、に、歸ること  
をも、惜まず、傳受せられき、其の後、匠人、病して、いくほど、なく、失せたまへば、今は、この、道、おほひた  
えぬべきを、遺言も、だしが、た、立、遊、文、庫の、會、家なる、月次の、會も、つとめて、子なる、俵、包にも  
學ばせたり、享保はじめの、年、七十に、みち、ぬる、をかぞへて、俵、包は、俵の、いと、なみ、をしつれど、我は  
人々を、わづらはさん、こと、な、は、かりて、詩歌、等、外に、乞ふ、こと、は、せ、ず、こと、お、き、も、い、き、か、に、て、  
親族の中、遊歌社中、歌よみ、ならふもの、い、み、なり、かく、よ、は、ひ、の、つ、も、り、ぬ、れば、筆、と、る、こと、の、堪、へ  
が、た、げ、れば、お、なじ、二、年、より、物、も、か、い、じ、と、野、ひ、を、も、た、て、つ、べ、け、れ、ど、ま、て、の、が、れ、が、た、き、こと、も  
あ、れ、ば、さ、の、み、に、は、え、せ、れ、ど、大、方、は、の、が、れ、が、ち、なり、短、冊、など、し、ひ、て、望、む、人、に、は、も、と、か、さ、た、る  
な、つ、か、は、す、に、それ、も、あ、また、た、び、に、なり、ゆ、げ、ば、貯、へ、し、も、多、から、ず、いと、す、べ、な、し、

右遺稿は、極倉石根氏の本をかりて、橋村正環氏の寫されたるを、又うつしとりしものにな



著書

心。後部百三。(萩野由之氏藏)

〔遊京漫録下〕 伊勢山田御師慶徳三郎太夫、妻、女といへるは、能木田武通がむすめなり。梅野ぶきをこのみよみて、其すぢのふみどもおほく、みづからもつくり出でたり。

月のゆくへ(三鏡の文體になぞらへて、高倉帝安徳帝、二代の事を記す。そのべし) 三卷

池の藻くづ(増鏡のつぎを、腰長) 七卷

ふじのいはや(遊仙窟をけり) 二卷

桂中將 三卷 安達原 三卷 野中清水 二卷

五葉 五卷 奈良志波 五卷 常陸帯 三卷

しの竹 八卷 桐の葉 六卷 落葉 七卷

奈良の葉 十六卷

此ほかにも猶有りしとぞ。これは山田人、杉浦光基がしたしき友のもとに、もちつたへしかざりなり。月のゆくへ、池のもくづ、ふじのいはや、の三部は、おのれもうつしとりぬ。此おうな、いと思ひあがれる本性にて、人のいさめにしたがつふことななき。本居氏、宇治氏などによろづとひ聞くことななき、さりしかば、なしむべし、かける物、てにをばと、のはぬ事おほかりけり、其友とするは、多くはからまなびのはかせだちのみにて、龍公、美野公、蓬江、北海など、したしくまじはられしとなり。

橘宮南谿 春暉

生没

生 二四一四、桃 園、寶曆三年四、二一、

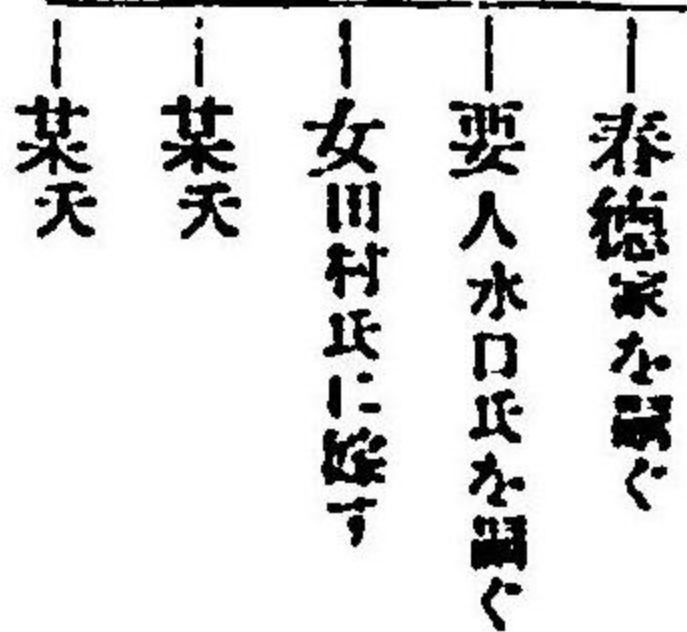
住所 姓名 系圖

國 二四六六、光 格、文化三年四、一〇、 三五三

〔生地〕 伊勢國久居町大字西鷹跡町六十番地、〔居住〕 京都、伏見、洛東、黒谷、金戒光明寺院

〔本姓〕 宮川氏、〔春暉〕 惠風、〔南谿〕 梅華、仙史、〔南谿院〕 陽岳、義明、

〔編者補〕 宮川氏五世子春暉、女東儀氏に嫁す



(儒學) 佐野西山——南谿

(以上、標註東西遊記、上)

學統 總叙

〔標註東西遊記上〕 橘南谿、諱は春暉、字は惠風、南谿は其號にして、父梅華、仙史、其して梅仙ともいふの號あり。本氏宮川氏にして、後其妻、俳諧師某の女とかの氏を冒し、と聞く。宮川氏の先某、近江國宮川村に住み、地を以て氏となし、淺井氏に住へしに、大永元年、南島にて戦ひ死す。其遺子三人、流落して伊賀の四條村に居りぬ。仲子某、伊勢の藤堂氏に住ふ。これぞ宮川氏の祖なる。其子の代にや、寛文中、支藩久居の藤堂氏に住へて、これに移りぬ。南谿は五世、保長の子なり。寶曆三年、今の久居町大字西鷹跡町六十番地の邸に生まれぬ。南谿、幼きころより物の哀れを知るといふ情いと深かりき。七八歳の頃なりける。ある夜、其父の傍に侍りけるに、父は孤燈を挑げて、孟子を讀めり。彼れ其の見給ふ書に、何事かか、げあると問ひけり。父は、されば汝にも讀みさかすべしとて、羊を以て牛に代ふる草を、讀じさかせてけり。讀



儒を佐野四山に學ぶ

十歳已に洞樓の志あり兼好法師に私淑す

父を喪ふ

醫術を學ぶ京に上り醫を開業す

母の訓誡

れは幼心にも堪へがたく、哀れさ胸に發えて泣き出しぬ。かくて後、其哀れを察するゝと、彼はまた其哀れをしるせる書、忘るゝと、能はざりき。されば折節、父に請ひて、孟子を讀くに、孟子も亦自ら讀みしする間に、孟子七巻は、心易く讀するほどになりぬ。かくて孟子より論語に進み、さては學問に志し、其種の儒者佐野四山に就き、心のまゝに學びき。平かなる地、方登町ばかりもある所に、紅葉のひまなく植まつて、其中に庵結びて住みたるは、いかばかり嬉しかりん」との優しき望は、彼が十歳の時の望なりき。而してその望は、終生其念頭を去ることなかりき。多くの書を読るにつきて、彼れの意中に道草せしは、我に四行、兼好、漢土には老子等、悉じて厭生的の人ならざるはなし。就中兼好は、彼れの最も意中の人なりき。故にそのいへる詞に、「月は隈なく、花は盛りあるをこのみ見るものか」と兼好は、誠風流の意いと深かるべく、つれづれ、草の一書、其才氣の絶倫なるを見、るべし。この法師とうち向ひて物語せば、人をして心醉せしむべし」とはいへり。

香川太冲の學流を汲む理想の醫人

五井齋雨を得て東西漫遊に志す

無上の快樂

母を亡ふ

漫遊の主旨は醫術修行にあ

は心あらば、能々とおもひ見るべしなど、誡めぬ。折々の庭訓身にしみて、情みこめて、醫術の蘊奥を究め、殊に香川太冲の學流を汲みぬ。彼れ太冲を稱して曰く、漢土の醫は、文、質に誇り、泉流の醫は、質、文に誇り。文、質、兩ながら備りて、漢土に愧ぢざるは、獨り香川太冲のみといへり。彼れ醫術を修めける餘暇には、また博く和漢の書に涉り、物に觸れ、情動きては詩を吟じ、歌を誦じ、俳諧をも作りぬ。いつしか同好の友を得て、彼が東西漫遊の志を促さしめたり。其の友といふは、奥羽の端より筑紫の端まで、あらゆる奇勝を探りて、筑紫隨筆を著せる俳人五井齋雨といなり。齋雨が庵の門は常に鎖されて、膝笠雨に暫しの隙をかるも、頗は証雙の縁にからまるほどなるを、彼れは親しみて、これと往來せり。齋雨が探り來れる東西の奇勝には、彼れ殆ど心醉せるが如し。彼れが漫遊の志、こゝに於て物々たり。この時、其家計漸く豊ならんとす。彼れ素より富貴を好み、これらも富貴に勝る無上の樂あり。彼れ日へらく、「富貴は人の欲する所に、余もこれを附めるにはあらぬ。もし唯世の中の樂みを附せば、身のよせも重からず。實もいたずら、衣食の事は、いづれの境に居れるにも人の患むばかりのさへありて、世人のさきそひあらず。富貴のみならず、少しそむけつゝ、須磨の秋、吉野の春、心にかかして時におくれず。又思ふ人あれば千里の遠きをも、必ず尋ね訪はん事こそいと興あらんとは、我のみ思ふかしら。ず」といへり。故に漫遊は、彼が無上の快樂たりしなり。



そもこの天明の初年といふは、光格天皇の初世にして、幕府には徳川家治將軍として、老中田沼意知、隠龍を專にして、威權を恣にし、賄賂公行し、刑賞もとよりあたらず。幕府の治漸く弛みて、上下驕奢に耽り、諸藩の財政窘迫し、庶民の賦課重く、物價騰貴し、商況振はず、貧乏の困窮、日一日に深きに陥れるなり。世既に斯くの如くなるに、剩つさへ天變地災、年毎に夥しく、伊豆の大島、大隅の櫻島等の噴火を始め、地震、火災、洪水等、各地に災し、氣候甚だ不順にして、三伏にも暑さを覚えざる程なりき。されば、凶作うち續きて、殊に四國は飢饉の慘狀を見んとす。従つて人心も甚だ憂ならずして、野盜、強盜夥しくなりて、劫掠の噂まじりなり。若し漫遊の時を遣ばし、その頃ほど便りあしきはなかるべし。然るに彼れは、其二年の秋、思ひ立つまゝに、門生文藏なる者を従へて、鹿島へ旅立ちしぬ。

留別平安諾子

塞誓非不省。憂心在衛生。一朝試方技。千里爲此行。膏藥備隨身。艱險幾路程。煙霞吾所怡。山水賦豪情。離別但可惜。親朋在帝京。

留別の詩

漫遊に出立つ

是れ、彼が當時の作ならざりしか。彼まづ京畿を出て、道を山陽にとれり。播磨には曾根の松を觀、備後には備後を遊して、弘法大師の御來降と崇められ、やがて三原より安藝、周防を経て、長門に到り、赤岡ヶ岡より豐前的小倉に渡り、それより豐後を歴遊し、南境に變えたる祖母ヶ嶽に登り、日向に下り、鶴島山に天の遺蹟を探り、薩摩に返り、其年は暮れぬ。明くる春の初、鹿兒島を立ちて大隅に遊び、肥後に入り、玖摩の城下に五十日許の間留まり、やがて肥前の長崎に至りしは、雲隱れの月に、不知歸の聲を聞く頃なりき。顯微鏡、燐目鏡、エレンケタール等、聞くにつきて、見るにつきて、心を驚かす者のみ。七月長崎を出立ちて、雲仙ヶ嶽に登り、それより島原に出て、船に搭じ天草島に渡りて、不知火の奇觀を看、九州全圖廻り盡して、四國に渡り、伊豫に扶桑木を獲め得て、やがて京師に還りしは、其年の秋なりき。かく西遊ををばりけるに、また東遊を思ひ立ちて、天明四年の秋、門生要野といふ人を従へて出立ちぬ。京城を離れてより、道を東道にとれり。まづ其心を慰ましは、鎌倉なり、古への人が大津浦に比べしといふ繁盛も、今はあれに於て、神社佛廟に留めたる昔の蹟に、遺古

漫遊を終りて又東遊す

漫遊四回に及ぶ

好んで傷寒論を講ずる者

信念頗る厚し

醫の説

の情忍びあへず。江戸より水戸に遊び、筑波山に登りなどして、其年を暮らし、やがて仙臺に到りしは、其翌五年三月なりき。末の松山、鹽瀨浦、野田の玉川など、名勝熱眼を探り、九月より翌六年三月に至るまで、奥羽の北端、さては北越の地を探りぬ。かゝる北遊に遊ぶ人、大凡そは昔、春の季より秋の半まで、雲既に消え霜いまだ降りざる間を選ぶなるを、彼れは醫術修行の爲めなればとて、殊更に朔風肌を穿き、深雪征途を埋む時を選びしことなれば、道々の艱難はいひつくすべからず。飛鳥川の波瀾、尾國の雪、羽州の鬼、津輕の饑饉、其他千辛萬苦身を危うすること數々なり。三月の中旬、越後より佐渡に渡らんとして、颶風に遇ひて止み、信濃の諏訪、松本の邊に遊び、川中島、古戰場を甲ひて、更に越後より越中に入り、加賀を経て越前に來り、近江に遊り、小川村に中江藤樹の講堂をたづねて、京に歸りぬ。

かく西遊東遊合せて五年、其他、南紀の歴遊等を併せて、漫遊すること前後四度に及べり。その東遊を畢へて歸京せし後は、門を張りて醫を業とせり。又朝に往へて尚藥に任ぜられ、石見介に補せられ、從六位下に叙せられぬ。名聲京城に高くして、醫を執りて其門に入るもの少からざりき。彼れは好んで傷寒論を講じき。従つて其著書にも、傷寒論に關するもの尤も多かり。傷寒論分註、傷寒論通言、傷寒論外傳あり。其他、痘疹水鏡録、痘疹玉環方、藥方小議、國醫律呂考等、痘疹の初めより前後相續いて著述せられたりき。彼れ曰へらく「吾醫を學ぶと廿餘年、醫學に於ては和漢古今に讀らずと、竊に獨り思ふ。其他の技藝、年若きより多端に渡りて、何事も人並にも至れることなし。これは修業の功足らざるなるべし。未熟の醫にて時にふれ、よく出來たる時、人の稱美を得れば、虚なるとは知りながら、何とやら嬉しき心地し、人の要を聞いては、悦ばざる心地す。但醫の事を、他人評するに、よしと稱せられても嬉しくもあらず、怒敷そしられても腹立つ心持も起らず。これは自ら安心立命し居る故なり」といへり。彼れの如き謙遜なる心を以て、病は斯くあるは、自ら信ずる所厚かりしを知るべし。彼れは我國の古典を研ぎ、歌を誦じて、少くとも、所謂、醫學者流の偏僻あるべきに、能く和蘭の醫說には一採を施せり。彼れ和蘭を評して「和蘭の醫、其阿蘭人之辨、腦腑骨、堅々可據。其論皆盡精妙。無復餘蘊。觀解體新書、而可見也。……其實淵之精、多難



理を研究せざれば休まず

天文を研究す

漢古今未嘗有之説」といへり。これ彼が遠く時國に遊びて、「エレキター」を製造せし結果ならざるべからず。しかも彼れ、かの「エレキター」に換して、自ら發電器を造り試みぬ。この點に至れば、西行、兼好輩の厭世者流を慕ふにも似ず、怪は何處までも其理を究めんとす。日常投ずる藥物にして、假りに奇驗あり、靈効ありといはゞ、これが所以の理を究めざれば休まず。儲に奇といひ、靈といふは、自ら惚づる所となせり。故にいへらく「國家先生の國に、奇妙といふことあり。苟も醫學する者は、いふべからざるべし。……この奇妙奇妙といふ詞によりて、醫學の精、終にかくるゝことに至る」といへり。また「北極星地を下るの高下によりて、地球の南北を知るべし。地上にては、真直に二十五里程を隔つる時は、天にて一度を違ふ故に、北極星の度數を知れば、居ながら國の南北を知り、又國の寒暖を知る。醫者も國々の氣候を知らざれば、其國の陰陽變化を盡さず。故に疾病をも察すること能はず」とて、四道東遊の途すがら、北極星の度數を測らんとて、行旅に携帶し得べき便利なる測量器を製りて携へありき。行くまゝ、測りぬ。其成段の三四を掲ぐれば、

音律に通ず

大隅國佐多郡佐多岬……三一度弱  
 武蔵國江戸……三六度強  
 出羽國秋田郡秋田……四〇度五分  
 陸奥國津輕郡碓氷……四一度  
 陸奥國津輕郡三馬屋……四二度  
 山城國京都……三五度強  
 越中國新川郡富山……三六度五分強  
 出羽國勢手郡津波……四〇度七分  
 陸奥國津輕郡守森……四一度七分

また寛政の初、和泉國貝塚の人、若橋善兵衛の望遠鏡を創製するや、彼れはこれを以て、天體を測り究めぬ。其記事載せて、閉田大筆にあり。彼れまた、音律に精通し、梵寺の鐘聲を聞き、其音調を覺れり。天王寺の鐘を聽きて、古鐘にあらざることを知り、南長柄の鐘を見て、唐土北燕の物にして、其律、眞の黃鐘なるに感じ、又自ら黃鐘調の鐘を鑄さしめて、其發音を究めたり。こゝに至れば、彼れは宛然理學者の如し。

彼れは當時の醫學者の中に於ても、有數の者にして、其著書も頗る極要のもの多し。殊に我國の醫學史の上に於ても、其名を記せざるべからざるは、彼れが解剖學と、脚氣に關する所説なり。

解剖を試む

抑も我國醫學的解剖は、寶曆四年、山縣東洋に創まりて、爾來これを學ぶもの、固々これありしが、次いで有名なるは、南谿が解剖とす。事は天明三年にありて、彼れが西遊を竟へて歸京せし後、數句にありしが如し。南谿は、罪人平二郎といふ者の刑屍を獲て、これを剖見しき。其國記一卷、世に傳ふ。今にして見れば、兎戯に類するものなるべけれど、當時にありて、醫學界を益せしこと、甚だ大いなるべし。或は云ふ、彼れは官醫の身を以て、斯くの如き不淨のこととなしたりとて、是等に觸れて官位を褫はれ、終に伏見に移るの止むなきに至りたりと、蓋し當時、斯事なきを保せざれど確ならず。南谿文集に、祭平二郎文あり。天明四年の作なり。蓋し追祭に關するもの、如し。今解剖發露に據りて、天明三年とす。

脚氣病の研究

脚氣に關する所説は、梶原性全の頓悟抄、長田徳木の梅花無盡藏を始めとして、由直瀨道三の醫學天正記には、治驗を掲げ、香川太沖の行餘醫言、後藤長山の校正病因考、水富國繼の漫遊雜記、皆これを論述せるも、未だ彼れの所説の如き創見なし。彼れはまづ統計的に、脚氣は京都、江戸に多くして、他國に病む者、甚だ稀れなり」といひて、地方病なることを推考し、「脚氣は王侯貴人に稀れに、又雇夫、下賤労働の者に無く、唯江戸にては、侯國の武士、勤役に來り居る者は、多く、特別身を營まざる商賈にあり。京にては、商賈の手代、或は終日坐して勤ざる職人、または他邦より來り居る者、養生等に甚だ多し」と論じ、其原因を卑濕に歸して、除濕の法を創めぬ。其法は床下に、藁三尺、深二尺許なる空堀を掘り、地形の低き方に、水氣の下り去るやうに勾度をつけ、其溝の中に、茶椀程の石を數多入れ、置けば、床下の水濕滴りぬけて、濕氣の蒸し昇ること格別減少しといへり。また其療法に向つて、轉地を要する療法として、唱道せり。脚氣に於ける轉地療法の、無二の靈効あることは、醫學者の確信する所なり。而してこの療法を始め、世に紹介せしは、南谿その人といふべし。

脚氣の新療法

住所

天明寛政の交、彼れは城南伏見に移り住めることありき。後また、京都に遷り住みしが如きも、其年月を知らず。按ずるに、南谿集に、伏水之梅溪、余甚愛之。嘗來住二。今歲己未春、又遷於此」とあり。己未は寛政十一年なり。然らば、其已前に歸住せしにや。其居宅は、梅山に相近し。春暖の日毎に、養生うち具して、これに遊びぬ。優遊自適、自ら和靖に比せり。畢竟、梅仙史の談、これによれるか。



一女一男を擧ぐ

た常に栲山の親月齋を賞し、諸州の名勝を見たりと、かしこの如く、明瞭にして、しかも麗なる風景はなし」とて、折節は杖を曳けり。これより先、妻を迎へて女子を設けぬ。四十に今一つ足らぬといふ齡に至りて、始めて男子を設く。親の身の嬉しさは、早く成長せよかし、やがてなに教へん、なにすべき、我身ながらいと程遠きことまでも思ひとれるに、はては笑を催して、

おのが身の老ゆくことは、忘られて、ひとなる子の、末ぞまたる。

瘦身多病

東西遊記を著す

その文體

その子成長して後、春徳といひ、芳裕と稱し、桃仙とせり。天下に漫遊すること、前後四度にして、都合五年餘、それより京に歸りても、日夜治療に奔走し、教授に罷勞し、學問の暇なく、著述の功を映けり。殊に幼少より、甚多病にして、瘦たることは、主なき犬の如く、死に近き病氣を患ふること四度、時疫傷寒各一度、其外一月、二月、秋に臥す。輕病は毎年病ざる事もなしといふは、これ彼れが當時の體なりしに、この頃より不幸にも喘息に罹りて、月に三度も四度も發作して、心を遣り身を働かすること、皆障となれり。さりながら、彼れは勉めて其業を勤み、餘ある暇には、筆硯に親みて著述をなしぬ。寛政七年、東西遊記を刊行す。これ存て、彼れが歴遊せるうちに、見聞せる奇事異聞の實記なり。その記事、皆世人の意外に出るもの、多きのみならず、その文章もなだらかに、申には、雅人孝子のことさへ載せて、懇に説き諭す所あれば、善く文士の間にもてなされて、彼の文名江湖に噴々たりき。彼れ言へらく、「何事も趣を解すると解せざるとに、其味はあることなり。譬へば杜鵑の聲、おもしろしといふものにはあられど、唯その鳴くやりの夜、ふけ雨しめやかなる五月雨の空に、ほのかなる一聲、他の音に比すべきものなし。故に昔より杜鵑の聲、鶯の初音より、人々の待作ることなり。此境を會せざれば、詩も歌も通すべからず」といへり。而して彼れは、愈くこの趣を會得せり。東西遊記の文は、唯ありのまゝを寫して、浮華の迹なし、讀み去り讀み來りて、翻ふべからざる妙味を感ずる所以は、蓋し能くこの趣を解して、これを草せしによるのみ。彼れ詩あり。

答人

子問、我所好、我有煙霞癖。山水常探勝、不與世人匹。興來時言志、草々投紙錄。後復白氏風、何守朝人律。世人將虛文、我國重忠實。大志丈夫事、小技非所必。訪君栲子齋、草草言實室。

東西遊記續篇

遊藝す

病の爲に筆を絶ち醫書の稿を焚く

病歿

著書

老子に私淑す

年譜

彼れは飽くまで眞學に、はた忠實を旨としけり。寛政九年、東西遊記續篇刊行せられ、翌十二年、四遊記續篇刊行せられぬ。かくてなほ東西遊記三篇を世に出さんとし、また其間に、醫書の著述世に出さざるもの巻を重ねたり。彼れ著述に心を勞すれば、宿痼愈々彼れを苦しめ、今止むなく仕を辭して遊藝す。時に四十四歳なりき。これより後は、著述は案より、詩歌俳諧に至るまで、かりそめにも思を費やし難観にたづさばること、聊もあづからざるやうになしぬ。されども猶ほ多年の心勞を以て、草し置ける醫書の稿本の、半成りかゝりたるが、常に心に忘れ難く覺えて、見るにつきて、前々殘る一片の紙に心安じて、我身の病息に沈めるをも、陰陽の妙用を論じ、極めて、餘りに天地の秘を洩せる事を、初めて知りて、この草稿を焼たる後は、心にかゝる事なく、何となくのどやかにて、ながく其後、病も漸く輕くなりぬといへり。その後は、單に醫を以て業となして、只管、餘生を費ふことを勉めぬ。彼は文化三年四月十日を以て卒しぬ。齡五十三。私に臨して、兩院院陽明といふ。洛東原谷金戒光明寺(一)に云光徳院に葬りぬ。六子ありて、長男は即ち春徳なり。近江の三行侯に學び、業を繼ぎて醫となる。次は要人とて、水口氏を嗣ぎ、春素また好素と稱し、同じく醫を業とす。其女は俗人東儀氏に嫁ぎしが、後、剃髮して尼となり、清水の地藏堂に居りしと聞く。二女は九條家の士、田村氏に嫁ぎしといへり。餘の二氏は天せしかば、今にては、男女さへ定かならず。兩院著述する所、前に掲ぐるもの、外に、傷寒論文例、同子障、本草通玄、五臟通言、解屍運刀法、雜病紀聞、備氏醫話、藥量考、讀産論、方意辯、度量衡辯意、漢語律呂考、北窓瑛談、薩州孝子傳、詩文集等ありき。彼れ常に老子を愛讀し、自らこれに註解を加へて一本となす。名けて老子和字解といふ。常に一生その「度而不恃、生而不有」といふ句を守り、予が生涯の趣向これにありとて、「この句を守れば、其功にも誇らず、功に誇らざれば、人の恨を買ふこともなし。自然に志も大になり、動も怠らぬやうになるなり。この句の功德、甚だ大なり。後世に同志の人あらば、味ひ考ふべし」といへり。彼れは能くこの語に賛成せられて、またこの語の人たるを得たり。

〔標註東西遊記上〕 兩院年譜



寶曆	三、一	四月二十一日生。
天明	六、三四	十二月二十日。爲内膳司史生。
同	七、三五	二月二十七日。叙正七位下。○三月十三日。任右見介。
寛政	六、四三	九月十六日。叙從六位下。
同	八、四四	四月四日辭。介。○五月十一日落飾。(法名梅仙)
文化	三、五三	四月十日死。
其子、春徳年譜		
安永	八、一	八月三日生。
寛政	八、一八	二月十六日。叙正七位下。○三月二十五日。任豐後守。
享和	元、二三	三月三十日。辭官返上位配。
(以上、平出經太郎氏)		
著書		
〔近著〕傷寒論分註	一	傷寒論外傳
痘疹水鏡錄	一	痘疹玉環方
東遊記	六	東遊記後編
		傷寒論通言
		藥方小牋
		東遊記三編

西遊記	五	西遊記後編	五	北窓瑣談	二
〔編者補〕詩文集		漢語律呂考	一	國語律呂考	一
傷寒論文例	一	本草通玄		五臟通言	
解屍運刀法		雜病紀聞		橋氏醫話	
藥量考		讀產論		方意辯	
度量衡辯意		薩州孝子傳			
橋本橋經亮					
生	目 二四二〇	桃 園	寶曆一〇年		
姓	國 二四六六	光 格	文化三年四、一〇	目 四七	
學	〔本姓〕橋氏國橋窓、春圃、				
統	〔三十六家〕高橋圖南の門に入て、有職古實を研究し、一世に冠たり、詠歌は蘆庵、宮溪				
	の輩と交りて、殊に善くす。一の風致ありて、超凡の名あり、ゆゑに其門に遊ぶもの、また				
	あほし。				
經	〔同上〕經亮翁は、橋氏にして、橋本を家稱とす。肥後守に任ず、洛西梅宮朝官たり、兼て非				
歷	藏人を務む。少より學を好み、博文強記、時輩に超越す。				







著書

の寶石類書、其他の校正は、専ら翁のせし所なり。昔今其家に蔵して、子孫に傳ふ。  
〔慶著〕橘窓筆語 梅窓筆記 二 橘窓自語 二  
橘窓餘語 四

津村涼庵 正恭

總叙

〔忌辰上〕 津村三郎兵衛、涼庵、名教空、佐竹侯用達、傳馬町に住す、和歌を能くし、雅楽の師なり。文化三年寅五月十六日歿す、東本願寺中善宗寺に葬る。

著書

〔編者補〕 譚海 八 思出草 九 片玉集 一四

僧誠拙

生歿

生 二二九二、中御門、享保一七年、

歿 二四六六、光格、文化三年六、二八、 四七五、

住所 姓名

生地 伊豫國宇和郡高串村、 國 初、鎌倉圓覺寺中佛日庵、後、京都天龍寺、相國寺、  
名 周楞、 國 無用道人、  
〔備考〕〔欄上〕 歌道に通じ、香川景樹と交厚し、或は廢刹を興し、或は弟子をしたらて、遂に相國寺中、心華院にて歿す。その歌集は、熊谷直好の淨書にて、現に佛日庵に蔵す。

(以上、欄上、二)

生歿

生 二二九三、中御門、享保一八年、

歿 二四六六、光格、文化三年七、二五、 四七四、

住所 姓名

生地 近江國八幡村、 國 京都大佛の邊、池田町、 國 京都花岡山、  
名 資芳、 國 蓋、 國 田子、 國 田慮、  
○扇屋某(近江八幡) 蓋、 資規子

(以上、三十六家、上)

伴 蒿 蹊 資芳

學統

〔編者補〕 有賀長伯 資規  
武者小路實岳 蓋蹊 金谷興詩  
比田尙盛

資殿の寵をう

四天王の一人

六如尊者と親交す

〔古學下〕 ハヤウ、家庭ニテ歌ヲヨミナラヒ、人トナリテハ、有賀長伯ニ學ハレ、長伯身マカリシ後ハ、武者小路實岳ニ從レシガ、彼彌モウセ給ヒテ、翁ノヨハヒ、三十七アマリヨリハ、誰ニヨルトモナク、タゞ古ヘチ慕ヒ、オノガ心ノユクマニ、讀ミ出ラレヌ。  
〔三十六家上〕 妙法院一品親王、殊に寵を賜ひ、頻りに召して歌をよましめ、文を作らしめたまふ。また聖護院宮、大佛の閑田廬に御輿を山げさせ給ひて、歌會を催し給ひしなど、人皆譽れとす。專歌をもつて一世に鳴る。當時平安にして、蘆庵、正月、慈延、蓋蹊、これ人、稱して四天王といふ。翁、就中、文詞をよくす。長歌に於いて、又一家の妙をなす。補正行朝臣の墓所の碑に題せる長歌など、人以て感賞す。林泉院六如上人と方外の友たり。  
〔近世發語三〕 伴蒿蹊、京師人。法國學、善和歌、平居優游事、著作、其所、居、閑田廬、故、自稱、閑田子、與、



時人傳を著す

林泉院六如尊者爲「方外交」尊者著作「詩贈」之曰。老來幾部著書成。紙道屏風畫道情。最是紙田開不得。長遺筆未四時耕。高溪乃悅曰。此詩予之寶錄也。著有「閑田耕筆」近世時人傳等書。

性行

「古學下」人トナリ淡泊ニシテ、物ト競ハズ、ソノ著セル時人傳ニテモ、人トナリヲ見ルベシ。又親ニ孝行ヲ盡サレ、年八歳母ヲ喪シ、後勸孝ノ辭ヲ作りテ、其志ヲノブ。

「筆のすさび」高溪は近江八幡の人、京に住す。小男にて、刺鑿す。舌吐大によく談ず。

「三十六家上」新また漢學にも精しく、且佛理をも究めたり。

「閑田詠草」そのさまを云はば、つぼのうちに、山を作り、瀧おとし、いはほをたて、ままとくの草木を、所せくうみおほしたるが如くなるを嫌ひて、自らなる山のたしずまひ、ゆほびかなる河の流れの、あめつちのまゝなる姿をしも、たて、好みける。

「うけらが花」京の高溪がつまの、霜月五日に、にはかにやみて、みまかりぬとて、あはれなる歌ども、文のはしにかきて、おこせければ、返事をついでに、

きのふまで、つばさならべし、おひの、霜夜やいかにも、ひとりわららん。

あまたとし、かゝるたぐひに、ならびまて、猶つねなきば、おどろかれけり。

「同上」高溪が七月廿五日、身まかりぬとき、その子のもとにいひやる、

秋風に、はつかりがねは、わたれども、玉づさかけて、こぬがかなしき。

しら露の、さえははつとも、よゝかけて、玉のひびきは、のこらざらめや。

著書

- 「近著」國文世々の跡 三 譯文童噺 二 近世時人傳 五
- 勝地吐懷編校正 二 かがつちのあらび 一 續近世時人傳 五
- 閑田耕筆 四 大和物語抄補翼 閑田文紳 五

其妻の悼歌

門田の早苗 一

「慶著」津島祭の記 一 國歌八論評 八

「編者補」佐波加刀神社事蹟考 一

### 伴資規

總叙

「古學下」資規ハ資芳ノ養子ナリ、號ヲ直樹ト云、先旨ヲ繼ギテ、國學ヲナシ、世ニ聞エアリ。

(參照) 伴高溪の系圖——六九七頁

著書

- 「續人物」歌辭要解 増補題字要解
- 「慶著」増補題文解

### 比田尙監

總叙

「欄」尙監は、浪華の富豪なり、若きより伴高溪に就きて和歌を學び、才學の譽ありき。嘗て知茂なる松田直兄と共に、季置が狂歌の才名のみ世に高く、そがいと深か、りける和歌の、人に知られざりけるを嘆きて、其詠草の中より、傳ふべきを百首撰びて、「みあれの百草」と題し、世に傳行せり。大鹽後葉の亂に、天滿の社も兵火に焼かれたりけるを、ことはて、後、尙監いらはやく、人に許りて、もと有りし如くに宮居をしつらひて、

添溪門  
みあれの百草  
を刊行す

伴資規 比田尙監



宮はしらふとしくたてし、さとびとのうごかぬ心、かみに見せつる。  
 となん詠みたりける。同じ時、菅公御繪傳といへるを、畫所の土佐某にうつさしめ、御文庫へな  
 さめんとて、其箱の表書きを、當時の儒家、春田厚生に請ひしが、逆木に書きたりけり。神主滋岡功  
 長いかやあらんといひしを、尙監取敢へず、  
 をさめおく、神のみくらのほこなれば、さかきなりとて、なにかいとほん。  
 と書き添へて納めたりき。尙監が公共の爲めに力をつくせしこと、類る多かりしとぞ。尙監に親  
 炙せし中村元道が、その三十五年の忌辰に、手向の歌あり。  
 つくしつる、君がいさをの、かすかずを、しる人まれに、なるが悲しき。  
 と云ふ。

### 和田宗淳

生歿 二四六七、光格、文化四年四、二九、  
 住所 江戸、  
 系圖 江戸、  
 姓 名 江戸白金正源寺、

〔備考〕和歌に名あり。

〔字〕子淳、〔号〕長淳、〔號〕襲明、

(以上、忠貞、上)

### 林長枝

生歿 二四六八、光格、文化五年五、二〇、

住所 江戸、  
 系圖 江戸、  
 姓 名 下谷幡隨意院、  
 ○林諸鳥——長枝

(以上、忠貞、上)

### 加藤橘千蔭

生歿 二三九五、中御門、享保二〇年、  
 住所 二四六八、光格、文化五年九、二、  
 系圖 江戸、  
 姓 名 本所回向院、

(三十六家、上)

〔續人物下〕 家世、江戸ノ興力ニシテ、入町堀ニ住ス。  
 〔三十六家上〕 文化五年九月二日、年七十四にして歿す。墓標は自らかれて、其禮部寺に往き、住  
 持に託し置けり。葬、歿するの日、寺僧來つて曰く、請かれて、予にこれを託し置かれたりとして出せ  
 るに、橘千蔭之墓、と自ら筆して書かれたり。人大いに感嘆して、やがて其書を石にほらす。時に眞  
 明、平春海、文を作つて墓を祭る。其文よく請の平生をつらね、情け外に溢れて、感嘆最深く、人をし  
 て、秋をしほらしむ。

〔本姓〕橘氏、〔通稱〕幼要女、後又左衛門、〔德〕與、〔常世〕鹿、〔荒園〕又芳宜園、又耳梨山人、逸樂窩、  
 江翁

〔續人物下〕 名ハ千蔭、又芳宜園ト號ス、耳梨山人、逸樂窩、江翁ナド、皆別號ナリ。  
 〔續近世叢語二〕 橘千蔭者、江都人。字德興、麻呂、號荒園。又號芳宜園、氏加藤。  
 〔三十六家上〕 年十四にして、加茂縣居翁の門に入らしむ。こゝにして千蔭と名を改め、別名を  
 常世丸といふ。こゝは橘氏によれるなり。







歌は千蔭、文は春海

〔松屋叢話〕 加藤又左衛門備千蔭は、枝直の子也、諱をば芳宜園といふ。うたよむわざによきなう名を得て、東國に此道、武盛になりたるは、平春海と千蔭とのちからによれりし也。千蔭は手かくわざにもことごとくすぐれ、春海は文つくるわざと、まなびの道にたけて、かたみに兩輪のごとく、その名とゆるきたり。ある時、都の小澤蘆菴に、物まなべる小野藤洞、おほやけ事にて、む月のほじめ、江戸へまかりけるに、ことづけて、蘆菴がもとより、

立よらば、たちもよらせよ、備の、かげふむ人は、道まどひせじ。

〔古今集墨帖〕 わが友、備のなごは、策とるわざに名だかゝる人にて、よく古のかんなのさまをしも得にけり。

手跡

〔續近世叢語一〕 千蔭又稱墨妙、其所書、即扇頭紙尾、人爭珍之。文化五年没、年七十四。有集、叢花

交友

〔三十六家上〕 翁、また蘆をも狩野某に就いて學び、最風致あり。偶、自畫自贊のしあり、人もつて賞す。

經歷

〔古學中〕 清原雄風、小澤蘆菴、清水演臣、荷田御風、三島自寛、荒木田久老、加藤孝聖、加藤守万岐、本居宜長、楓取魚彦等、ト親交アリ。

〔續近世叢語二〕 千蔭蚤就之學和歌、師事賀茂氏、後承父職、雖吏務繁冗、不廢文雅、研取不懈、迨天明八年、以疾辭職、乃肆力於所好、精我邦古言之義、又善和歌、老而業愈進、名益顯、於是、自貴胄權威、以達僧祝婦女、爭入其門、承其指責。

万葉集略解

〔三十六家上〕 翁、また文化四年十月、その著す所の、万葉集略解三十卷を官に奉りければ、御覽を賜ひしとぞ。

〔うけらが花六〕 文化二年九月十四日、かしくきおほせことによりて、おのれが、まきにあらはしたる、萬葉集略解三十卷を、十月もらの日、おほやけに奉りければ、白がけ十ひらたまはり

妙法院の官の寵を蒙る

め、かゝること、はためしもなければ、かしくさも、かたじけなさも、いはんかたなくて、みめぐみの、露にしぐれに、神な月、ならの落葉も、いろやそふらん。

〔三十六家上〕

妙法院の官、一品親王、遠く詩の高名なるを聞召し、御使して歌をよませ給ふ。また一年、江戸に下向ましける時、屢々、其の御館に聘して、筆硯紙墨、及、絹など、若干を賜ひ、君前に歌をよみ、鬘髪を寄しめ給ひなどして、寵ことに溢かりけり。又或時、おまへに侍りしに、宮の御手づから御道服をたまひたりし。實に其さかんなる、人皆これをほまれとす。

〔藤垣内答問録〕

加藤の翁、此十年あまりに、仕へわざを退き給ひて、もはら此道に心をよせ給ひ、君は此年頃、縣居の御教のまことをたゞして、たゆみなく物し給へば、やんことなきわたりより、常にこと問はせ給ひ、國々より後集へる人々も、皆其教におもむき、天の下に聞えわたり、かしくき雲の上人も、都に名高き歌人も、只其わたりの歌どもをめで給ふとかや。藤垣の教とはいひながら、御自らの力しるく、とりく、にめてたくなむ承り侍りぬ。

〔三十六家上〕

また翁、京師を知らず、一年上洛の意あつて、江戸を發し、相模國箱根の山下に臻り、ここに於て、其高嶽嶮嶮ならんことをおそれ、思念を断ちて、江戸に歸る。また一奇ならずや。

〔筆のすさび四〕

千蔭は隱居して總髮なり、顔色容貌、さしも歌人と見えたり、耳老いて息女を傍におきて、彼此の言を通ず。

〔泊酒筆話〕

一、又常にいはれしは、おほよそうひまなびのほどは、心よりほか、歌歌おほく出来、または思ふにしたがひ、口にいひ出でらるゝなりもあるものなり。これまことにいてくるにはあらず。考たらずして、うはべの心より、たゞ、出でいてくるのみなり。たのもしき事に思ふべからず。或時はひとり思ひ凝りても、ふつに出来ぬなりもあるものなり。さる時は、我さえのつたなきをうらみて、今は歌よまじ、かくまで出でぬこと、かこたるものなり。そはなか、くに歌の上達すべき關なり。ここにてもおもひたゆめば、つひに此關を越えずして、中途にて、やがて

容貌

性行  
京に上らんと  
歸して箱根より  
歸る

歌の説



雜載

千蔭が妙法院の宮より歌められたる歌並序

みやむものなり。ここに思ひおこして、たゆみなく、此圖をこゆれば、また口ほこれて、読みよくなるものなり。朝夕うたに心をゆだねよむ人は、一年に二たび三たび、此圖に行きかゝるぞかし。うひまなびのともがら、こゝに心をつげよといはれき。又いはれしは、京極貴門も歌に誦なし。古歌をもて師とす。とのたまひたれば、必、その道びきを、しふる人のまれののみ、すべきにもあらず。たゞ其心さす所に、的とする人なくしては、歌のすがたあらずゆくのなり。されば心みにいはせ、三十六人集の内を、よくあぢはへよみて、人々の心にかなひて、をかしとおもへらん歌仙の集を、かりに我師と心のうちに思ひまなぶべし。おほけなけれども、我は其之集を心の師とは、たのみよむなり。といはれき。おもしろきをしへことならずや。三十六歌仙のみにかざるにはあらず。今すこし後の歌仙にもあれ、よくその人の歌を心に味へて、そのすがたを得じとするも、ひとつのかしへかたなるべし。

〔琴後集〕

妙法院宮より橋千蔭が歌めし給へるを喜びてよめる歌並序 村田春海  
妙法院宮は、當今の御いるせの御子におはしますなるが、古へのみやびごと、深く好ませ給ふあまりに、橋千蔭が、名高かるを聞こしめし給ひて、今年やよひ、大舍人岡本保孝が、一條の大臣の御許に、登れるに、仰言給はりて、千蔭がよめる歌の中に、山家閑居などの題なるを、奉らせ給へり。そも、此百年あまり、江戸の大城にして、萬の政まうし給ふまゝに、今は天の下の賑はしさを、只こゝにしも集へたれば、おのづから道々のかしこき人々も、多くいて來て、言の葉に名高かる輩も、これかれ聞ゆめれど、かゝるかしこき、御言を讀ぶりて、世におもておこしなる事は、更に例なきわざになむありける。さるは其身の國たぐひなき事あるのみかば、かくて縣居翁が歌のあらはれぬべき時、至れりとやいはむ。かれ喜ばしさに堪へずして、則歌へらく、

常世もの名におふを、ぢは、言の葉の、千代の古道、ふみわかれて、高き手振を、ま心に、深くえしかば、白玉は、我こそもたれ、光しる、入しもがもと、誇らひて、年は経にけり、然れども、千蔭の酒の、盛ひをば、くみてだにみず、淺き瀬に、たちてたゆたひ、高山は、よぢも登らて、麓へに、ゆきかゝつらふ、世の常の人、ししられは、よしえやし、見ぬ世の後に、願れむ、時こそあらめと、もだしぬて、ありふる朝に、い

かなりし、神の心に、導かし、給ひけらしも、かけまくも、いとゆゑしき、久方の道つ露の、そなたより、聞えあげよと、殊更に、仰せ給へば、年久に、袖に包める、白玉を、拾ひ集めて、御使に、まじげまつりぬ、古への、例はしらす、後の世に、類やはある、かくばかり、稱なるよしに、あふ事を、今の境に、見るが嬉しさ。

かへし歌

みなぞこに、かゝよふ玉の、光こそ、波かきわけて、あらはれにけれ。  
〔うけらが花〕 京の小澤蘆庵がもとへ、千里を隔て侍れど、こゝらの年月、まのあたり、語らひかはし侍る心地せらるゝまゝに、うちつけなるものから、立かへる春のほき言、きこえ侍る。

君もあれも、百世をへつゝ、花鳥に、あくやあかずや、いさ試みむ。  
〔琴後集〕 去年の秋、芳宜園に梅を移しうまつりけるに、其秋翁みまかりにけり。春になりて、其梅のさきそめたるを、もせ子の許より、見よとて、一枝をりて、おこせたるに、詠みておくりける。

村田春海

花さかば、つげむといひし、圓の梅、形見に見むと、思ひかけきや。  
〔同上〕 橋千蔭が家にて、萬葉集、竟實に、鼓傳、春山萬花之、靈、秋山千蔭之、影、時以歌判之といふ歌の心を、道をしける歌。

村田春海

百千鳥、啼づる春は、こちんぐの、花の盛と、にほへるを、折りては、かさし、散りくるを、袖にこき入て、足引の、山ゆき暮らし、思ふどち、心をやりつ、長月の、時雨の、秋は、もみぢ葉の、下てる時と、やつをこえ、遠くも、見さけ、木の本に、おりの遊ばむ、家のごと、紐とさきげつ、春山は、しかもまぐはし、秋山は、かくぞたぬしき、いづれをか、わきてしぬばむ、春花の、ちるは、惜しけど、時きなば、山郭公、いつしかも、つぎてなかむと、夏山に、心ぞ移る、もみぢ葉の、時すぎゆかば、嵐の、み、いまき渡らむ、枯山を、何にすさめむ、そこを、あはれとぞおもふ、秋山を、うべも、昔ゆしぬびけらしも。

〔氣吹舎筆叢下〕 萬葉集、略解を、あかぬものなむりとして、心とめて、見ぬ人もあれども、いと愛たき、帯なり。さるは、契、神岡、閑梨、賀茂、大人の、説を、始め、其餘もよき考をとりて、和よく書つめ、中にも、鈴屋の、翁の、考いとく、多く、やかて、牛に通るほどなり。其は、一考の考には、其出たる、最初にの

萬葉集略解

萬葉集竟實の歌

千蔭を悼める歌

小澤蘆庵におくる歌



み、契沖云とか、宜長云とかありて、ふたゝび其事の出たるをりは、何某云てふ事を除きたれば、千  
 蔭の考への如くなれども、よく心付て見れば、すべて此例にてよき考とて、契沖、藤原の考  
 をおきては、大かた給屋翁の考なり。たまゝ千蔭、春海の考と見ゆるも、大かたは其考より出た  
 る考なり。よく讀て然る事を知るべし。我翁の萬葉集を解れたる物は、たゞ玉乃小學のみありて、  
 是も縁に三まき四まきの考を少かつ、書おかれたるにて、いと残り多き物なるを、この考解を  
 作るをりは、千蔭と春海か許より、伊勢へひたすら文かよはして同ひ極め、さて作終りて、翁の許におくりて、  
 ざと翁の許へ、三たび四たび、まぬ登りなどもして同ひ極め、さて作終りて、翁の許におくりて、  
 悪を訂しをもこひ、さてこの書は、出来つるとなむ。されば我翁の萬葉集の考は、大かた此考に出  
 たれば、よく讀べき物なりけり。ことし此考解を公儀に捧げし時、その題物を千蔭より、春海翁と  
 大平ぬしの許に分おくりしは、實にしほらしくうべなる事なり。

〔帝國文學〕萬葉集略解編成の事情  
 近世古學の開け初めしよりは、歌道に志す者、大かた萬葉集を讀むことはすれど、それまては、一  
 向に人の手觸るゝもなかりしなり。さしも詠歌の流行せし平安朝時代といへども、萬葉集は高  
 閣につかれ上げられて、訓點だにも悉くは附られざりし程なれば、之を讀み見る人の、極めて少  
 かりしを知るべし。鎌倉時代に至り、仙覺律師、これに和點を施し、注釋をさへ加へられしは、當時  
 に於て、誠に珍重すべき事なりしかど、其の訓にも、釋にも、未熟なる所多く、解し難きことども少  
 からざりき。其の後、戦亂打ち振りたれば、又これを研究せんとせし學者も出てずして、中絶せし  
 は遺憾なる次第なりき。然るに徳川時代に至り、謂はゆる古學の開くる初めに當り、契沖、阿闍梨  
 の代匠記出てたるは、更に歎ぶべき事なりしかども、それ亦、寫本なりし上に、水府の磯公の讀に  
 應じて、著述せしが本なれば、物かの縁放ある者の間に、寫し傳へられしに止まり、讀く世に行は  
 れざれば、大方の人は、罔讀する便を得ざりき。其の頃、北村季吟法印の著なる拾遺抄は、全部刊行  
 せられたれども、法印が歌は、空上方の流れなれば、萬葉の解も、釋か編よりたるふし見え、古學者  
 だちの群には入れられざりし故にや、他の著述の湖月抄、春海抄の如くには、もてはやされずし  
 て、摺り出だりし、部類も、少かりし由に聞く。

(關根正直氏)

萬葉略解編成の事情  
 仙覺律師の萬葉集訓點  
 契沖の萬葉代匠記  
 季吟の拾遺抄

實茂、眞淵出づるに及び、大學古學を唱道し、古文學の著述も多かりしが、尤も重きを萬葉集にお  
 き、此の集により、古意を得て、古言を解き、上代の人の眞心を知りて、神世の道にも押し及ぼすべ  
 く、説きたてたるより、古學に志す人も多く、世に出てしなれば、近世の謂はゆる神道古學は、翁の  
 萬葉考より其の端を啓きたるものといふべきなり。かゝれど、其の書は萬葉全集卷の中にて、  
 第一、第二、第三、第十一、第十二、第十三、第十四の六卷を、本集の原書なりとて、此外は皆諸家の集を  
 後に採り收れたる也と斷じて、かの六卷のみを注せしに止まりしかば、萬葉全集を見んとする  
 後の人をば、満足せしめざりき。

眞淵の萬葉考  
 千蔭の萬葉集略解

此時に當りて、全集の歌に注釋せし萬葉集略解は世に出てたり。著者加藤千蔭は、誰れも知る如  
 く、縣門には尤も古意にして、ともかくも高足の弟子と稱せられ、歌よむ業に、筆とる道は、早くよ  
 り上手の名高かりし人なれば、此の信用と、もに、其の著の歡迎せられしも、理りなり。そも、  
 略解は江戸の人の性質をあらはせる様に、淡泊なる解きさまにて、別に考證も發明もなく、唯大  
 意に淺々と解きざりたる迄なれど、又よき方を求めていはい、契沖、春海、眞淵等の先輩の説は、固  
 より、春海、躬道、宜長等の、わが學友だちの考をも、廣く採りて、其の長き所を取りたれば、所説公平  
 にして、偏倚せず。且、悠林簡易にかきなしたるも、一つの取り得となりて、幸ひにも世に弘まりし  
 は、好き機會に出てたる、當代の幸運兒なりしなり。かくて近日まで、讀る事なく、判めて萬葉を讀  
 まむには、まづ略解をと我も教へられ、人にも示すやうに成り來れり。かゝる幸運の會なれば、  
 や、談むともあらざるべけれど、所々に非難の聲の響がれる中に、尤も青鹿なるは、千蔭こそ唯  
 の歌よみにて萬葉など注釋すべき學力なければ、是は春海に譲へて代作せしめしなりと傳ふ  
 る者あり。余の知る人の中に、固く此の説を執し居るあり。揚々として、自己の識見に誇れり。げに  
 も千蔭が、縣門の先輩として、學殖の深からざりしは事實ならむ。さればとて、他人に依頼して、  
 代作せしめたりと迄は、甚しき誣言なり。そも、此の風説は、誰がいひそめたる言かは知られ  
 ど、全く齊東野人の言にして、後世の想像に過ぎざるべし。當時同人間には、ともすれば、此の著を  
 淺薄なりとか、拙劣なりとかいへる言はありしかども、未だ他人の代作なりとは、記せるものな  
 し。例へば小林歌城がある人に贈れる書讀の端に、

春海をして代  
 作せしめたり  
 りといふは非なり



小林歌城の香

序に記し候。千蔭が萬葉略解作り候時、本居へ度々問ひに遣はし候に、悉く丁寧な答に候。此はかく云ひては聞えず、かしこはかく注すべしなど、教示致し、指歸候由、その稿本、後に買物に出候に、小子門弟、中野花翁、他にて此頃見候とて、話候まゝ、それはほしきものなり。買取候に可致と申候によりて、同人其日、其方へ参り候て承り候に、四五日前、富家の町人、甘雨にて買取候由にて、手に入不申候。今よりは四十年前の事にて候。本居が、さばかり助言なしたるにて、だに、注文の細なるは、よみ見て知らるべく候也。同じ書ながら、萬葉の注と、くらへ候へば、跡に申す月と、國魚とのごとくにて候。是れ學問にうとき故にて候也。此書出来し比、演説、小子方へ参候間、殊の外早く上木成候と噂致候時、同人申には、僅かに十二年にて出来候。千蔭なればこそ如斯なれと、大に嘲り申候。此一旨、廣校の一覽針と存候。文官ゆゑに、こはき事を知らずたゞありに書き候故、早く出来候也。それを演説も、あざけりてかく申候なり云々。

此の文、千蔭を罵り盡したれども、しかも其の淺薄なるを嘲るのみにて、一旨代作云々の事に及ばず。春海の門人たりし演説すら、猶千蔭が十二年を費やして、編成したる由をいへるに非ずや。然のみならず、千蔭が、この著述、思ひ立ちし事、自記の文に見えたり。

千蔭が自記文

花は春をもちてかたり、紅葉は秋を得てにほへり、人ばかり己が心のまゝなる者やはある。霞をあはれびては、暮れゆく春を惜み、露を懸みては、過ぎぬる秋をなげく。さらば、又早くれんとしては、うらゝなる春をこそ待つべきに、年波の立ち歸らぬをわびて、せきとやめまほしく思ふは、なぞ。若きは春をいそぎ、老いぬるは年を惜むを思へば、じまほると、食らざるとのけぢめなりけり。数ならぬ身の、老いはふれたるが、何ばかり惜しき事やはある。唯いつまでも、みどり子のひとへ心ならずば、春をのみ待つべきをや。今年ゆくりなく、公の御座にて、ささらぎの物つ方より、五月かけて、むぐらの門とぞたりけるをば、二とせ三年過ぎるばかりになむおぼえぬる。山にこひ、水に戯るゝ日は短くて、垂れこめたる日は、長からむやは。深き御墓にあきて、仕へをしぞきしより、よく思ひ立ちなば、をぢなき身にも、事成りぬべき業もありなむを、いざともいはぬ風、月に、あくがれありきて、徒に過ぐしつるよ。今は唯後の世に、残さんと思ふばかりの名にしも、あらぬ者から、暮れがたき日にうむじて、おほけなく、萬葉集とみんとて、ひめも

略解の著述を  
思ひ立ちたる  
原因

宣長の助言を  
受く

す机におしかゝりて居れば、音の棧の長しともおもひしも、夏野ゆく小庭の角に、おぼえらるゝぞ、さはいへ、大方の世の心ならひに、もれざりけり。つら／＼思ふに、かゝる事なかりせば、かくは思ひ起こさじなと、尙もかしこまりに堪へずて、

名にしおふ、ふみ見る事も、奈瓦の葉に、おくしら露の、めぐみならずや。

こは幼き者の、徒然草よむを聞きぬて、ふとかいたれば、おのづから、彼の法師めがいへることわりに似て、歌のさまさへ、古歌とかんうたには、似つかはしからぬもをかしきや。

千蔭は、父枝直以來、田沼意次子執權の時代に、永く町興力を勤めたる者なれば、松平越中守定信、將軍佐役となりたる上は、懇じて田沼時代の役人の、いづれも不甘居にて、一度は皆替められたる中に、千蔭一人漏れぬべき筈なし。謂はゆる、寛政改革の當時には、千蔭既に辭職後なりしかど、猶蔵録の上、百日の間、押込を命ぜられ、謹慎せしなり。然れども、此の閉門が、千蔭をして略解の著述を思ひ企てしめたりし由は、右の文にて明らかなり。是れ實に、寛政元年の事にて、千蔭が五十二歳の時なりき。

以上の文どもに據りて、略解は春海の代作なりといふ説は、全然證據のなき虚言なりと斷ずべきなり。但し彼の著述は、一々本居に尋ねて、其の助言を得たる由、是れ亦事實にて、此のあたに就いては、他にも彼れこれいふ者あり。其の一例は、伊勢人にして、本居の門生なる、川喜田常道がける文にも、左の言をなせり。

萬葉集略解は、いと心きたなきかきさまなり。彼の書は、もはら吾本居大人の、年比考へおかれたる説どもを乞ひ求めて、それによりてこそ物したれ。さるを彼のはし書に、これを考へたすけたるは、平春海、源朝彦などのみいひて、吾大人にれぎつる事などは、置ばかりもいはず、又註釋の中に、本より吾大人の考なるを、即ておのれの考へととして、其の書のしりに、宣長もしかいへりなどやうに、かきなせる事も多く、又吾大人の、多く例をあげ、書を引いていはれたる事どもを、宣長いはく云々とあげし所には、其の例どもをいはずして、己れが説の中に、ぬすみて引ける事多いと多し。いぎたなきわざならずや。凡てかの書は、萬葉考の説と、香齋の説と、吾友大



玉の小琴

千蔭の宣長におくれる文

老が考を除きては、一つも取るべき説なし。又橋守部が、其の著「盤纏」の中に、右文をまして、實は本居の起りてあけるなり。常道とあるは、唯まをかりたるなり」といへれども、是れはた甚しき邪推といふべし。元來千蔭が考解の思ひ立ち、前にも云へる通りにて、寛政元年の二月より、稿を起し行くうちに、本居が萬葉集一より四までの抄注、玉の小琴は、其の前年、即ち安永八年の冬、脱稿せしにて、寫本ながら關東にも傳はりたりけむ。いづしか千蔭も悶讀し、たまたま、其意見のあへるもあり。又啓蒙せられたるもありけむ。やがて書を致して、彼れが考説を、わが著書中に採らむの許諾を得たり。そは千蔭より本居に贈りし消息文にあり。

(前略)おのれ千蔭、早く賀茂のうしに名つき贈りつれど、いと若かりし時の心念りに、疎かに物しつゝ、なにはの事もわいだめ侍らざりしほどに、おほやけごとにかかゝつらひて、暇なくなん成りにて侍れば、心の外に、うとくなりもて行きて、終にとひ明らむる事なく、大人身まかられつれば、今はた、八千度悔ゆともかひなくなむ。此の四とせまきに、千蔭病によりて、任へをしぞき侍りしより、おふけなく、大人の志をつぎてんと思ひ起しつゝ、萬葉考をくり返し見侍るに、大人こゝらの年月、つとめ給へりし真心は、おぼるげならぬものから、筆の末に至りて、いかにぞやしひごととにやと思しき事ども、まじろひ侍り、巻のついでなど考へられしは、いと理りある事ながら、早く今のついでになりぬと見え侍るを、腹に改むべきならず覺え侍れば、今の本のまゝにて、つばらなる事は、考に譲りて、あらゝかひあつめ見侍りつれど、なほたどたとしき事のみぞ多かる。さるたづさありて、玉の小琴てふ書、もとめつゝ見侍るに、筆まゝしらむきはには侍らぬものから、誠に及び難なる詞へになん覺え侍る。そが中には、千蔭がなぢなき心に、とあらむかゝらむと、思ひめぐらししと、全く事しき事しもまれゝ侍りて、喜ばひに堪へずなん侍る。されば君の御名をあらはし書きつゝ、く覺え侍るなり。云々。

宣長の返書

本居のこれに對へし返事に、(前略)まことや、大人の萬葉考かきつぎ給はんとや、そはよろづよりもめてたく、實を御事、同じ

千蔭と宣長との交情

長宣よりの書

心にいとく嬉しくなん思ひ給ふる。巻のついで、の事宣長が思ひ侍るものたまはすと事ら同じ事になむ侍。そもく、大人の御しわざを、とかくもどき侍るに、いとかしこくは侍れど、さりとて、いかにぞや覺ゆるふしを、さて過さむは、中々の彼の教の心にも違ひてぞ侍らまじ。よろづは、つぎく、に明かになり行かむこそ、學の道のほいには侍らぬ。己が試に片端かきそめ侍りつる、玉の小琴といふ者見給へる由、もとより玉り少き仕度、御覽じ所も侍るまじきは、さるものにて、人の心はいにしへの唐人もいひけるやうに、國の如く、ままゝになむ侍るめれば、御心と同じき事は、ありがたかるべく思ひ給へるを、百が一つも、さると覺さるゝふしの交り侍らむは、思ひ給へかけぬ身の喜びになむ。さるなきの眞玉としも、のたまひかけたる御言の葉の露の光はいとまげゆく、恥かしくなん云々。

うれしきは、掘りかねの井を、思ふにも、汲む手にあまる、みづぐさの跡。(下略)かく互に契り交はして、後しばしば、稿本を本居に見せ、本居も懇にわが考案を聞きそへて、返ししなり。そは、家蔵の本居より、千蔭に贈りし書讀の文にて知らるゝ如く、兩人の間柄、始終うるはしかりしなり。

芳書拜見仕候。先以御平安御座被成奉賀候。拙者無事罷在候。乍違外、御道念被下問敷候。先違面者、年始御慶書も被下、御念被入候御儀、尋拜見仕候。此方より、其儀もなく、甚失禮仕候。多謝此平御容。御可被下候。萬葉御解十六卷拜見仕候。段々御成業、珍重之玉奉存候。如何任御本を頼申候段、失敬御高免可被下候。外宮荒木田久老も、萬葉之註段々出精に、面少々上木も出来之候子に承申候。十六之卷、竹取翁長歌考も、面白事共御座候に付、一二此度御本へ書入申候。若し御取も被成候は、久老之名御出被道候様、に致度候。總體卷々に善惡、珍重考も御座候。抄法院宮様、色紙被道、御詠歌所望に付、御認御上げ被、御又御長歌も、御添被成候由、拜見被仰付、珍重拜讀仕、感服に不堪奉存候。乍彈珠更御秀逸と奉存候。現右之宮様へ入御覽候物は、御内々、天覽にも被入候御様子に相聞候へば、此度之御詠共も、大方左様、に御座可有と、別御覽候。御儀、御同前いか計りか珍重奉存候御事に御座候。先は右御返事迄、如斯御座候。甚謝書御用、御可被下候。尙期後信可申、草々恐惶謹言。

加藤千蔭

(雜載)



四月九日

本居宣長

寛政八年より  
文化九年迄に  
全部出版

かくて、寛政八年、まづ巻一より巻五までの一帙上梓し、其の後、文化九年まで、全部數冊に劃き  
畢へしが、一帙成る毎に、必ず本居に送本したれば、本居亦其程度謝状を送りて、共に其度謝  
を獻べる趣、眞心より出でたるさま、紙上に溢れて見られたり。今其の狀共引き載せんは、餘りに  
うるさければ、略すべし。若し彼の守部のいへる如く、本居翁に惹れる心ありたらば、(凡例に於  
名を掲げずとか、又翁の親を千蔭の考の如く記したりとかにて、感情をわしくしたるむには、翁の  
程こそあれ、後々には疎略にも見過ごし、甚しくは謝絶をもしたらむに、甘巻の末まで、いと懇に  
四讀して、數多所にわが考案を書き添へたりしにても、守部のいへる如き事は、なかりしを疑す  
べく、且かの「玉の小琴」を四巻までに止めて、五巻以下をかき續がざりしも、既に千蔭が略解のあ  
らましを聞き、その助成すべく哭りてより、以下の考説は、略解の上に載すればとて、わざと書き  
さして止めたり、とさへいふに非ずや。

そも、川喜田が文に、「彼の端書にこれを考へ助けたるは、平春海、源門徒などのみいひて、汗火  
人にれぎつる事などは、露ばかりもいはず」と書けるは、全く事情に違はず、且本書を熟讀せずし  
て、忘断せし言なり。かの春海、源門徒等は、皆千蔭と同門の中にも、尤も隔意なき親友にて、遠慮な  
き同柄なれば、特別なる言事の考説を探りたる所のみ、其の名を掲げ、詳細の助けには、一々に  
其の名を掲げずして略したれば、さてこそ稿成りて後、凡例の中に、云々とは記したるなれ。之に  
反して、本居翁は、同門とはいへ、面識もなければ、春海等とは、一つ並の交はりならず。仍て其の考  
説は、細大となく、一々其所に、其の名を註しきたり。されば又更めて、凡例中に記すに及ばざれば  
なり。

さて享和元年に、本居は没し、其の後數年を経て、略解は全部刻成せしが、文化元年に至り、將軍家  
より、要解一部献上すべき由仰せ出だされ、又御褒美として、白銀十枚を賜はりぬ。

御褒の、眞にしぐれに、神無月、ならの落葉も、色やそふらむ。

と「うけらが花」にある歌は、此の時の詠なり。かくて此の歌びを、本居にも分けむとにや、わざと  
其の嗣子、大平が御脚をたて、其の事を報じ、且御褒美の分慶を、宣長翁の靈前に供へたりし

大平の謝状

はいかに懇篤なる志ならざや。その仔細、大平より千蔭に附いし謝状に詳なり。

御狀拜見仕候。道日寒氣増長之處、愈御清泰被成御座候由、奉敬賀候。嗣子、無異親在候。千蔭御來  
意可被下候。然者、今般御著述、萬葉略解、御献上之儀、戸田采女正殿を以て、御仰與當十五日御狀  
上相成、爲御褒美、白銀十枚御拜領被成候由、委細御吹聴之趣、重疊目出度奉存候。誠に御名譽之  
至り、同學之拙子共迄、御同意恐悦奉存候。時又、御拜領之品、爲御配分、家前御前へ相供可申、御  
厨被下、御恩情不淺、奉存候。即廿八日夜、相手向申候。春庭より、宜敷御禮可申上候申出候。昨  
日安守興枝、其外社友いづれへも吹聴申候。一統謹有がり申候。右御歌旁、御報如此御座候。諸  
後音之時候、恐惶謹言。

十月晦日

加藤千蔭 校

本居三四右衛門

見せ給へる御言の業よ。神無月、しぐれふりおける古ことの折ふしにも、相かなひて、御褒の重  
の光も、ことにかたよめてたく、おぼえ侍り。とりあへず、大平

例の垣根のくち葉、かきよせて、御らむするも、なごがましうなん。

千蔭がいつまでも、本居の餘蘊を思ひて、没後までも、等閑ならぬ志を致し、事、見るべく、且本居  
方に於て、千蔭が舊誼を忘れざりし厚意をば、瞭しけん事、知られたり。然るに、略解は春海が手に  
成りたる由の既、千蔭が遺誼を早考なりとする既、はた本居が怒りて云々といへる既、どのの  
るは、跡かたもなき忘説と、邪推となりと信するを以て、聊か野郎を費し、略解編成の事情を記し  
つ。

富小路彌の返

〔泊酒筆話〕

一、芳宜園のあるじ、萬葉集界解を述作せられて、板にえられしを、かかれての心しり  
なりければ、富小路殿、良直卿のみもとにまゐらせられけるに、其かへしあり。

未接芝眉頗癡。無已鴻便附寄候。秋冷之節、起居清静候哉。令承知度候。抑、萬葉集界解之大作、湯  
望之趣、季置申述有之候哉。不斜預惠投。領取感愧之至に候。蒙賜之歌、日々解、早來之聲、清、歌、ゆ  
不過之、速可申謝候處。海紅花、不能其義、運久之罪。可令高懸、給此一頓、聊賀、與、珠、玉、鏡、光、之、德、榮、

加藤千蔭

(雜載)

七一五



候趣意に而件、幽候故、笑留は可爲、柔懷候。尙書餘可在此、後、草々、難光筆候也。  
 八月十三日  
 道而、不審之事、如丘山、候間、道々可及、其間、無痛心、當示之、後、新、望、候。  
 閑夏、安、布、愚、古々、春、暹、午、天、白、雨、肥、美、には、宮、馬、離、空、民、依、幸、無、左、四、能、々、同、其。  
 萬々爲、道、白、重、專、一、に、候。

此書版にそへて、給へる一幅とあるは、中山前大納言愛親卿の筆にて、新地に備は、みさへ花さへ、その葉さへ、枝に霜おけど、いやとこほの木。といふ萬葉の歌を、眞字にて書き給へるなり。また、この書版のうち、にみえたる、かげあふぐの御歌のかへし、干、  
 むさしの、小草がうへも、雲のより、もちさぬ月の、かげあふぐかな。  
 一、又或時、芳宜園のあるじ、友だちの許へ、卯花をおくりやらるゝとて、  
 雲に月に、まがへる花を、みる時は、最しも、憶、こそやれ君を。  
 これは、白氏文集の詩句なるを、みやびにとりなされしが、をかしきなり。この歌、芳宜園のみつからかゝれたる短さくを、門人光孝某が家に持ちつたへたり。

〔傍廂〕 加藤千蔭翁の月次合日に、我若かりし時、季鷹、縣主と安田、鶴と三人にて行きけるに、何くれと物語りしける中に、千蔭翁のいはく、近頃は木居宜長こそ、金髪になりたれといはれしを、傍にて聞きて、駒弦がいはく、宜長を假名野とのたまふ千蔭先生は、眞名野にやといひければ、千蔭翁にはきこえず。人々は打ちたふれてわらひぬ。季鷹縣主にもきこえぬこそ、をかしかりしか。又或やんことなき君の御まへにて、人々物がたりしける時に、守の殿のたまはく、近頃季鷹が狂歌に、  
 我耳の、遠くなりしは、年をへて、聞えぬ歌を、よみしむくいか。  
 とよみしは、いとおもしろしとのたまひければ、御まへに居たるくすし某の、年老いたるが、さばかりの歌、おのれもよみ侍るなり。さまでほめさせ給ふべきにあらすといへば、彼殿、さらばよめとのたまふに、彼くすしがとりあへず。  
 我耳の、遠くなりしは、年をへて、さかぬくすりを、とりし報いか。

庚申狂歌

本居宜長の書簡

といひければ、むらゐのつみなも、とがめ給はずて、こよなう入興し給ひけり。斯くいふ我も、今は耳遠し。  
 〔同上〕 千蔭大人の別荘にて、庚申祭の夜、季鷹大人を招かれて、千蔭翁のよめる歌、  
 とあるに、季鷹翁のかへしに、  
 耳はいと、千蔭に見ゆれど、蓋若の、江去舟とや、遠さかるらん。  
 とよまれたり。こは元眞集に、  
 離波渦、こげど小舟は、蓋若の、江去程こそ、久しかりけれ。  
 とあるをとりしなり。  
 〔編者補〕 一筆啓上仕候。向暑の節、愈御平安御座候哉、承度奉存候。拙生、無事罷在候。乍、座外御安念可被下候。先送て三月朔日の芳翰、相達し若御見仕候。此方より、三月廿日頃、萬葉御解十八、御草稿返上、書状差出候也。定て相達可申奉存候。同十九上御草稿、此度返上仕候。最早、御解十相成、御成業の程細々目出度、御同前に大悦仕候。扱先達御願申上候。古事記、頃短歌、無御掛置、御集め被下、千蔭翁存候。殊に大名方杯の詠も御座候て、別て集の光輝に相成、大悦不遇之奉存候。尙又残り候分も、相集り候は、御越被下度、何分宜しく奉願上候。右御芳詠も、被成下、不浸辱く拜受仕候。是は先可申上候處、前後相成申候。右諸詠の内、意味違候様の覺え候處も御座候は、可申上の仰下候に付、任簡易乍失禮末に申上候。  
 一、楓の落葉、跡はいまだ出来不申候由、久老は、總體あまり深く考へ入候に付、自分の考も道々先きのは不宣候事共、有之候様、に覺え候ては、いよゝゝ定めかれて、御書致候様、御子に御座候。御々には甚宜き考も見え申候。同人當正月より上京、今に京師に逗留にて、萬葉讀本など有之候事に御座候。何とぞ京師も古學聞け申候様、に仕度奉存候。  
 一、肥後長瀬風寺、此度出府にて、序に參宮、當地にも一宿致、久々にて送申候。益出精の様子に御座候。先は右等の趣申上度如此存候。尙期後會恐惶謹言。  
 五月七日  
 本居宜長

加藤千蔭

(雜載)

七二七



答小野勝義書

加藤千蔭 撰 (帝國博物館藏)

〔答小野勝義書〕 或人問へらく、其師の教と、みづからの歌とは、異なるやうに思はるゝは、いかなる事にかと問ふ。千蔭答へていふ。おほよそ、おのが心おきてと、人に教ふるも、二しならむやうはなきことわりなるを、心おきてと、教と、ことなる事あるものなり。おのれ、うひまなびより師の教へられつるは、萬葉集のよき歌を撰びてとれ。古今集のころは、やしたくみになりもて伊きて、よわくなりたれども、萬葉につゞきて、まればべきものなり。それより後の姿を、心にかくる事なかれ。後にも、鎌倉の右大臣は、いにしへより、をいしければ、こはまれば、よといはれき。されど、師のよまれたる歌に、古今集のころより、はるかに後ざまなるもまじれりき。おのれは、師の教のまゝに、心には萬葉集の中のしらべよきと、古今集とによる事とはし侍れど、あまたの中には、いと後ざまなるも出くるは、時世の然らしむるにて、おのづからなることわりや侍らむ。かれつらゝ、思ひめぐらして、おのれが心おきてとせる事あり。あらゝ、いふべし。そもそも古へ人の歌は、心をたれとして、其心のまゝを、よめるものなれば、古へを慕ふとならば、今とても古へ人にならひて、心のまゝをよむべきなり。されど古へは、みやび言のみにて、まことび言のなかりければ、心のまゝをいひ出でたるが、やがてみやびなり、後の世は、まことび言多くなりて、みやび言消失せられたれば、今はみやび言は、もとめずしては出でこずなん。然りとはいへど、今も古へにならひて、心のまゝにのみ出で、言をみやびになしなば、おのづから古へに通ふべきもの也。こは誰もしれる事ながら、たとへば、月の歌をまうけてよまんに、今の心をまづ月にうち向ひたらん時、心になして、その月につけて、まゝ、心の動き出る事を、みやびになだらかにいひ侍るなり。心はおのが心すら、あした夕べにかはりゆくものなれば、まして人々の心のまゝをいひ侍るに、一つことの出づべきかは、さる時は、おのづから一ふしあるも、恐らかなる事もしひて求めずして出ることわりなり。其心といふ事、大事なるべし。古竹部入道が、人に教ふるに、たゞすき給へ。すけば歌は出くる物ぞといひしとかや。すくとほ、もとめてみやび心になせといふ事なるべし。今も心を古へ人の如く、すなほにみやびになして、まて其すなほにみやびなる心より、いひ出べきわざ也。歌はをさなななれといひしも、是なるべし。大方古へ人の心は、をさなきが如きものな

千蔭大人を祭る文

れば也。さて又、すがたは時代にかゝらば、よき歌を味へて、おのが姿とすべし。よき歌といふは、萬葉の中の歌を、近き世の歌にまじへ、近世の歌を萬葉にまじふとも、互にまじりて異なる事なきもの也。たとへば、古くは、蛙鳴く、神なび川にかげ見えて、今や疾くらむ、山吹の花。月も日も、かはりゆけども、ひさなる三室の山のとつ宮どころ。近世には、立かへり、またも来てみん、まつしまや、なしまのとま屋、涙にあらずな。狩りくらし、かた野の眞榮、をりしきて、流の川せの、月をみる。誰、などのたぐひなり。さて常にとなへて、心さへ清らにおほゆるものは、古今集の大歌所のみ歌なり。こはもと、歌はうたふべき物なれば、うたひ物の爲に撰ばれたるぞ、歌のまこと、のしらべといふものならん。又思ふに、心のあらはるゝは、戀の歌なり。古今の戀の歌は、萬葉の相聞の歌にちかく、うちきゝては、淺きやうなれど、心深し。夫より後の戀の歌は、萬葉、古今の頃とは、遠かにかはりて、うちきゝて深きやうなれど、入たちて見れば淺し。あるは詞のみあやつりて、ことわりわきがたきぞ多かる。然る故は、戀はことに心より出くる物なれば、古へと今とのけぢめ、かくわかるゝなるべし。近き頃、古風を好むといふとも、おのづからうちには、古風近體など、わけてよむものあり。こはたゞ、人の口まねをするにて、おのが心をよみ出るには、あらず、歌の道のよこはしれるものにして、おのれがとらざる所なり。おのれが心にうかべる事の、其心のまゝなる事を、なだらかによみえたる時は、人に見せてほこらむとにも、あらず、只よるこぼし、く、をりからえまほしく思ふ物の、思はずめの前にあらはれ出たる心地せらるゝも、あやしき物ぞかし。さて其よみ出たる歌には、さまたて人の譽むべきも、あらざらめど、おのが心のたのしきにて、ことたるわざ也。けり。かくおのれが心おきては、時世にかゝらば、只よき歌を本とせんと思へども、人にしかをしへなば、そらに、しあゆぶとか、とりとめもなく、をしへ受くる人は、迷ふべければ、只師の教へられしまゝに、人にもいひきかすのみなり。されども、人の心は、おもての如しとかいふめれば、教うくる人は、た、おのがじゝ、思ふ心ことなるべきことわり也。今思ふに、師の教と、みづからの歌のかはれるやうにおほゆるは、かゝるよしにやあらむかし。

〔琴後集〕

祭、秀宜園大人、文

村田春海

加藤千蔭

(雜載)

七一九



こゝに文化の五とせ九月八日、平香海、隨て芳宜園の大人のおくつきのみまへに、菊の御花一枝をたむけ、香の木一ひらを焼て、うなれつきてまうさく、あはれかなしきかも。君はわれにすといひて、一とせのこのかみにおほすなるか、いまそのかみを思ひいづるに、君はまきにまかりのひにおほして、我はまだわらはにてぞ侍りける。常に縣府の庭に、物まなびにゆきかひたる時、あしたにまゐるとしては、君のみはかしのしりへに従ひ、ゆふべにまかるとしては、君の御袖のもとにすがりて、相うるはしみまつれる事、親子はらからにもなにかことならん。香よむとては、君を誦ともたふとみ、歌つくとては、われを弟のつらにぞ、をしへたまひける。申比にして、香はつかへの道にいとまなくおほし、われは世のさかにかいづらひて、おのづから、うとさかたにも過つるを、君つかへをなし、月をおもふとては、君が舟にあひのり、うき事とも、かたみにへだてなく、心をかほ道しるべをなし、月をおもふとては、君が舟にあひのり、うき事とも、かたみにへだてなく、心をかほともによるこびて、世にありつるわざの、まめごと、あだこと、かたみにへだてなく、心をかほせる事、今にはたとせ、其初めをくりかへしかぞふれば、あひ友たる事、すてに五十とせにぞあまりける。さるを今、おくれたてまつりて、いつの世にかあひみん。いづれの時にかこと、はん。常なきは人の身のならひぞとしるも、これをいかてかなげかざらん。かゝるをたれか、はよくたへん。あはれかなしきかも。文の林よ、におとるへ、百の葉の道、日々にくたりゆけるを、夏夜の露、世に出で、今をすて、いかにしへにかへり、背雲の高き心しらひをもとめ、しづはたのあやあるみやびごとをたふとみ、いかにしへにかへり、背雲の高き心しらひをもとめ、しづはたのあやあるみやびて、猶あやしみとがむるたぐひはおほく、たまあひてよくうけ引人なまのあたり相うづなひ、とほき心をおとしてあまねくさとし、廣くいざなひしり、ちかき人はまのあたり相うづなひ、とほき人は、ほるかになびき、いかにしへぶりの歌、世に盛になりたるは、誠におのちからによりてなり。そのみづからよみ出給へるうたを見るに、ふるさしらべ、あたらしきすがた、とりく、にそなはらざるはなし。そのいにしへをうつせるは、藤原家業の御世におよび、後のたくみにならへるは、瀬河島羽の御時にくだらず。心におもふ事は、口につくまざる事なく、ゆめによるゝものは、國にのせざる事なんあらざりける。これをみて、たかきもみじかきも、めてたふとまざる人なし。又

千蔭を悼む歌

ことこのみの人、は、その名を君にいられては、身のおもておこしとおもひて、世にもほこり、君のうたを得ては、あたまひなきたからにもかへじといひてぞ、ふかくよるこびける。しかるを、今このがれの聲、たちまちやみて、玉のひびき、ふたしび聞えずなりぬるは、わがどちのなげきのみかは。大かたの世人のつれひともいひつべし。これをいかてか、をしまざらん。かゝるを、たれかは、したはざらん。あはれかなしきかも。わがかくことあげするを、泉のしたにも、さやかにさこしめし、天かけりて、ほるかにみそなはせとなんまうす。

〔同上〕 千蔭なくなりて後、千天子の許より、歌どもかきつられて、見せにおこせたる草子の、端つ方に、水かれし古江にたてる草の名に、うらなく露の情かけて、とあるかへし。

もろ共に、もとの心を、くみて見む、古江の水は、よしあせぬとも。

千蔭、みまかりて、七日にあたりける日、菊花一枝おくとて、

思ひきや、山路の菊を、たをりきて、袖になみだの、酒なまむとは。

千蔭が、一めぐりの忌に、紅葉送秋といふことを、

もみぢ葉の、すぐる習を、歎きつゝ、今年もあきに、またや別れむ。

同じ人の、三年の忌に、月添秋思といふことを、

春秋の、すさみはあまた、ある中に、月を哀と、いひしきみはも。

〔文三、七〕 氣吹舎筆叢ニ、コトシ萬葉略解ヲ公儀ニ捧ゲシ時云々ト記サレ、本居大平氏ノ文三、

芳宜園翁萬葉集ノ略解、スベテ三十卷、コノゴロカシヨキ仰ゴト察リケレバ云々ト見エケレド、

今年トイヒ、此ノ頃トノミニテ、年號ノ知ラレヌガ遺體サニ、ヒト年、弘ク世人ニトシシ時、伊豆國

三島在ル秋山光隆氏ヨリ、ソレニ答フトテ、贈リケレシ文書ドモテ、コノゴロ校定ヨリ見出タリ

クレバ、寫シテ進ラヌ。内藤氏ノ徳川幕府文教偉蹟考ノ補遺ノ一端トイヒツベキ。

子九月十四日、采女正殿、專阿彌ヲ以御渡、(文化元年子九月十四日也。采女正殿云々ハ、即土佐守ノ

覺書ナリ)

加藤千蔭

(雜載)

七二一

小田切土佐守  
又左衛門父、加藤千蔭



右萬葉集略解、著述開板致候由、右書内寮部、爲呈上候様可致候。

加藤千蔭

右者戸田采女頭、被仰渡之。(此ハ土佐守ヨリ渡シタル書付ナリ)

十月十五日、采女正殿御直渡、拜領物ハ川尻甚五郎へ、今日中ト申渡候。(同年也。是ノ采女正殿云々ハ、即土佐守ノ覺書ナリ)

小田切土佐守

小田切土佐守組與力、又左衛門父、加藤千蔭

銀拾枚

右著述致候、萬葉集略解寮部、差上候ニ付、書面之通被下候間、其段可被申渡候。被下候様ハ、御納戸頭相談、可被受取候。

又左衛門父、加藤千蔭

其方著述致候、萬葉集略解寮部、差上候ニ付、銀十枚被下之。

右者戸田采女正頭被仰渡之。

子十月 (同日土佐守ヨリ千蔭へ、渡サレタル書付ナリ)  
清雄、因云、萬葉集略解ハ三十卷アリ。氣吹合卷數ニ、突冲阿爾梨、其夜大人ノ説ヲ始メ、其餘モヨク考ナトリテ、ホドヨク書ツメ、中ニモ鈴屋ノ前ノ考イトノ多ク、ヤガサキニ過ラレホドナリ云々。コノ略解ヲ作ルナリハ、千蔭春海(村田)ガ許ヨリ、伊勢へ、ヒタスリ文カヨハシテ、明レ、イタ彼部ノ中ヨリ、ソザト前ノ許へ、三タビ四タビマキ登リナドモシテ、同ロ極メ、サテ作テ、其ノ許ニオクリテ、善惡ノ訂シテモコヒ、サテコノ書ハ出来ツトナン云々。コトシ此略解ヲ、公儀ニ納メシ時、ソノ賜物ヲ、千蔭ヨリ春海君ト、大平メシノ許ニ分オクリシハ、實ニレホクシテ、イハナキ事ナリ云々。ト記サレタリ。(小田清雄氏)

其碑銘

〔事實文編三六〕 荒岡橋翁墓碑銘

林 述 書

翁。以精于我古言之義、又善歌咏。其名流聞於世、自貴門權戚、以迄庶民婦女、苟嗜讀翁者、莫不稱其門牆而趨也。其京一品法院親王、嚴發其什徒、實之餘、則道服一領、官亦命上其所、若萬葉集、實則翁如干。於是名益顯著、而人倍仰焉。古汀之渾、味久矣。自稱哭冲、荷田亦請首唱之。而加茂其淵、與翁如集、成之。其功亦匪少云。翁又稱撰抄其所、揮酒、即扇頭紙尾、人甲登之。翁補姓、加藤氏、於千蔭、字德典、呂。號荒岡。又號芳宜園。稱又左衛門系、出於四院大臣諸兄公。其裔有肥後守永恒、號德源、德源、德源、德源、因有藤雅之譽。其未歸佛也。生列官、效貞々々。稱加藤氏。住勢州。其十世、彈正景光。任北島氏。食十入邑。居勢寺村城。七傳至孫左衛門景之時、機田右府、城北島氏。自是絕本仕途。子孫亦漸不。孫左衛門五世孫。曰又左衛門枝直。始稱翁於大府。入與力隊。謀町奉行。越前守大同忠相。實爲享保五年事。性喜歌咏。與賀茂氏友善。翁乃其子也。因以師事賀茂氏。後承父職。雖更務數允。翁且研取佛學。值天明八年。以疾辭職。乃肆力於所好。老而樂逾進。有集名荒花編。刊布于世。文化五年。九月二日。病歿。得壽七十四歲。葬于城東本庄。面向院。先考塋側。前配深谷氏。配部筑氏。各生二女子。其一適三村氏。餘皆夭。子直隆。替職。乃與女婿三村親雄。謀叙行實。案銘於余。余素知翁。翁晚歲。隱田河四。月夕花晨。來往自。余時時款段。助之。對燈燈。抵掌談。不知官稱之在身矣。嗚呼。逝水流。音存在。日憶。往。今。恍如隔世。方執碑筆。不禁涕泗之橫集也。銘曰。吁翁之業。雖受於師。而得之家。庭可矣。家庭之風。而道之義。可矣。日河秋風。長柄木片。古曾部之遺韻。遺哉。能存一綫。

著書

- 〔近著三〕萬葉集畧解 三〇 香取日記 一 古今和歌集序畧帖 一
- ゆきかひぶり 三 新百人一首色紙形 一 萬葉新採百首 一
- うけらが花前後 八 東歌父枝直集 三 月並消息 一
- 〔慶著〕玉あられ論 一 大歌所御歌記 一 新撰月百首 一
- 玉川紀行 一

加藤千蔭

(雜載)

七三三



### 高井宣風 八穂

總叙  
〔鑑定〕 江戸ノ人ナリ。通稱伊十郎、千蔭、春海ノ諸友ト交リテ、類リニ唱フ。從ヒ學ブモノ多シ。

〔慶著〕 鈴屋舎門、文政時代。

〔一話一言〕 江戸麹町にすめる高井宣風(伊十郎)和歌を業とす。授行者の賢に、目に見えぬ、鬼もなびきて、宵柳のかつらき山や、わけ初にけん。

〔慶著〕 今古假名遣 一 古詞類題和歌集 二

### 岡田眞澄

總叙  
〔古學〕 岡田眞澄ハ、稱ヲ美毛比磨ト云家ノ名ヲ隣月樓ト呼ベリ。幕府ノ儒員、寒泉ノ嗣子ナリ。寒泉ハ儒員ヨリ縣令イトケナキヲヨリ、家庭ノ教ヲウケ、人トナリテハ、京國ノ學問ニ心ヲ入ラレ、橘千蔭ニ從ヒ、歌ヨミ、モノ書コトヲマナハレ、手跡モ歌モ、世ニユルサレシ人ナリ。マタ假字ハ、モト草書ヨリワカレ來レル所ナルニ、其源ノ文字ノ知レガタクナリヌルモノアルヲナゲカレ、五十音ノ次第ニシタガヒテ、クハシウ考ヘラレ、頭書ニ古人ノ書體ヲモアケラレ、書法ヲ學ブ人ニ便リストテ、假字考ト云書ヲ著ハサ

著書

〔同上〕 本朝書話 本朝墨帖論 假字類聚  
假字類辨 述假字格 假字考

### 秋山章富南

生歿 二三八三、中御門、享保八年七三、  
二四六八、光格、文化五年一一五、目八六、

〔生地〕 伊豆郡深郡安久村、國全上。

〔編者補〕 伊豆萩原正夫。來靜岡客舍。謂余撰富南秋山詩文曰。我伊豆古來未有傳記之撰。而富南詩。慨然纂輯地誌。積十數年之風霜。撰伊豆州志稿十三卷。及海島志二卷。自述脫俗事。至人物事。一覽瞭然。先人正平。以翁功於我。豆將述碑垂不朽。未果而卒。不肯繼遺志。而有志者。繼碑為遺詩。敬請文以表之。嗟翁香。功於豆人。如此。誦其書。而不知其人。可乎。辭之不得。乃序曰。翁名章。字子成。稱文藏。富南。本州深郡安久村人。生於享保八年七月三日。卒於文化五年十一月五日。壽八十六。其先出於甲州武田氏。武田氏亡。適至伊豆。為郡士。家子此。父味處。稱忠左衛門。母會田氏。翁幼而慕。為重八之所育。母及弟。爾身子立。性又瀟灑。已無意仕宦。又不欲為良商。曰。有保性命。安樂先祀可也。按。同讀。書。耽詩賦。尚意氣豪縱。自喜。後悔其過。潛心經學。隱居授徒。從游者自遠而至。中年。有得於道德性命之旨。播然謂。聖人之學。在於修身。修身而後及家國。聖賢千言萬語。不外此旨。宋諸大儒。雖見高邁。而貴以修身為本。故專講倫理性命醇粹。非後世諸儒所能及。余將著書立言。以闡明聖賢為己之學。而門資才

(以上、碑文)

從ひ學ぶ者多し  
祖先 幼にして孤

高井宣風 岡田眞澄 秋山章 七二五







波あり、自ら曰ふ。鹿の鶴居と名付しは、聖人鶴居齋食の謂に非ず。鶴は常居なしといふによれるなりとなり。

〔三十六家上〕 四歳にして孤となり、上田氏に養はる。其妓女の子にして、娼家に人となるを恥ぢ、後遂に其家業を擱いて、千金を獲て、盡く書籍にかへて、一小屋に就いて、晝夜苦學し、醫を以て業とす。時に年三十八なり。

〔續近世叢語三〕 年三十八、羅火災、失家資、徙居於京師。無幾、去如攝之長柄、住于水濱。又反于京師。既而厭城中熱鬧、遂住於南禪寺中。更號餘齋。又號無腸居士。柄逸屏迹、專攻我邦之學。

〔三十六家上〕 古學、歌を專門とす。初め藤原宇万伎門に入り、博文強記にして、眼に過ぐれば、

となす。こゝを以て、また書を藏せず。室中唯一二の茶具あるのみ。

翁人と爲り、翁介甫直にして、富貴をみると、鶴居の如く、俗士をして、毀頹となす。凡て世に順ふ事、を欲せず。妄に人と交らず。或時門人某、翁の著書を寫し、持ち行きて、其疑あるのふしを質問せんとするに、忽其書を奪ひ取り、碎裂して曰く、斯の如き妄説を後世に遺し、覽者に疑惑を生ぜしむ。宜しからざる所なりと。平日机の邊りに、藤心をおきて、著述する所のもの、ことごとく、其中に投ず。一日著す所の、萬葉集注、及、筆記八十餘卷、凡て徒に命じて、廢井中に投ず。友人村瀬持孝、これを聞き、嘆惜して其故を問ふに、翁笑つて曰く、一時の漫筆、意に未だ盡きざるもの甚多し。しかるに年既に老いて、刪修の功に就くこと能はず。且、夢中に夢を説き、痴人に痴ふと、これを井中に投じて、我こころを清めんにかじと。後友人昇道に謂つて曰く、僕不才、且、不學、しらす、七句たり。現に夢路を行くに等し。今や此年をして、吾生涯とす。文字の縁一切これを絶つ。今よりして、後、昨日の吾にあらず。唯、嬰兒の遊戯をなして、天年を終らんのみ。こゝに於て、南禪寺中、西福寺にトし、蓋地を紅梅樹下に散け、且、棺を造りて、寺僧に託す。

性行

爲人翁介甫直

原稿を藤華中に投ず

文學の縁を断つ

奇人

逸話

痘を病める兒を診す

賊意

閑居の幽趣

雜載

〔續近世叢語三〕 秋成、雖中身攻、業、而才氣超絕、不欲信於他人、雖、不、所、爲、拘於法、則、其所、持論、多與世不合矣。然、不、爾、其所、著者、奇矣。而其人亦奇矣。

〔同上〕 江都太田南畝、嘗見秋成、奇其文詞、至是、製長夜室記、有言曰、噫、翁無用於天、獨問天、亦無用於翁、無用之用、知者希矣。白日昭々、長夜冥々、昭々之中、冥々之中、亦有昭々者否、是國奇翁、而人所、以不、奇、翁也。

〔三十六家上〕 こゝに痘を病めるの兒あり。甚、難症にして、諸醫之を治療せんことを肯はず。翁之れを領承して、忽ち功を顯はさんことを誓ひ、若し治せざれば、汝と再會を得ずと、堅く約す。しかるに痘者、終に治せずして死す。親たる者、先に翁の大意を惡み、大にこれを道る。こゝに於て、翁の曰く、されば吾、虚言をせず。今日より生涯醫を廢す。且、汝と再び面せず。と直に家具調度の類、一もこれを抛へず。赤身にして出奔す。某、おどろきて、しかなし給はずともありなん、と止むれども聽かず。凡て家財を舍つると、鶴居の如くして去り、京師に徙居す。

〔同上〕 また津國長柄郷に卜居せし時、賊の入りしこと有り。我より、まづしき人の、世にもあれ、うばらからだち、ひまくぐるなり。と詠詠して、其賊の穿ちし壁の段れを補修せず。賊意と疑して、夏日風を入るるに便なりとす。凡て人の意外に出づ。實に近世古學者中の一時人なり。

〔續近世叢語三〕 上田秋成、字居長柄、攝津、或曰、村居寂寂、必有幽趣。秋成曰、然、不能、無愛惜者。曰、遠山青、鶴居、嶺、野陰、雲成、編、茶花、錦、霜、葉、丹、青、春、晴、秋、夕、月、夜、放、懸、深、更、寒、雪、春、雨、蕭、蕭、颯、颯、總、角、驅、憤、時、調、且、叱、野、寺、鐘、聲、夕、悲、且、待、霜、如、食、露、爲、城、遠、寄、鮮、美、新、設、先、嘗、是、可、愛、者、矣、元、早、新、雨、三、冬、無、被、狐、牀、糲、食、三、月、垂、蚊、帳、非、綿、或、紙、蚊、帳、入、絳、絳、房、人、來、則、盤、絲、布、網、除、即、帳、春、夜、蝸、鳴、蟬、吟、秋、風、暴、吹、密、禾、野、鼠、飢、穿、墻、狐、狸、嘗、盤、飯、或、水、濁、或、柴、薪、乏、無、別、無、話、貧、民、饑、鬼、風、正、困、王、是、可、惜、者、矣、

〔假字世説〕 無腸翁、上田餘齋、又休四と號す。京都の人、いはく、むかし男、友だち、かいつられて、住吉の郡、すみよしの郷の、住吉の社に詣り、霜月のはじめ比にて、夕まじり方の、空おぼつかなく霜がれて、海吹く風の、騒じみて、いと寒し。いこま山を見れば、西に入る日の影ぞ、所々赤瓦て、あいなうあらはなり。今宮村を北に、横をれきたれば、長町の南がしらなり。むつかしげなる家ども、びしびしと立ちならびたる中に、はたこやぞ所得がほながら、時なられば、田舎人の、宿れるもまれ



まれにて、火おこさぬ夏のすびつのと打ながめて過ぐる宵物、くだ物、あきなふ家は、よし賣たてかこひて、たばね薪ばかり、炭それこれと願はし。鹽魚何やかや、しいら日置の切實ほど、鯛のいまゝか皿に盛りたる、又何とかいふ魚のあぶり物、しびの大魚、いまはしげに、切りさいなみたるに、にしんのしたゝかげに、食こしらせし、たうきび餅、あかむしの切目だかなるにも、大膳の土風やかづくらん。香の物、くき漬のほひ、花やかなる中に、芋むす湯畑ぞあたゝげなる。日は西に沈みかづ、風いとあらく吹きたち、あつこえて着たるさへ、夕じり身にしみておほゆ。此あたりには、竹杖の片手は、十一二なるわらべにひかせて、ゆくゆくうちたふるべくあゆみぐるしくす。此あたりにて、米を呼ばれど、聲をしあげば、聞きしりたらんものぞ、堀じみたる物に、面白しつゝ、あたる、うばらの手に蒸菜、二かぶばかり、くりさけて、物えたり願にゆくもあり。おざり法師の、かしら髪おどろにおひのびて、つゞれの肩のひまより、氷れる肌のあらはれたるが、何事やらん、國ごとしつゝ、おざりゆくはげふのさむきをかこつたるべし。はやく宿とれるは、一睡が、二睡が餅、これかれともめありく。此あきなふ家も、こゝに年月住みふりたるは、さるものらも、いぶせういやしめす。是めすか、それぞよかめるなど、こゝろよげなり。(下界)此語あるやんことなき御方に、無恥と名つきたる心をよみて奉れるうた。

津の國のなにはにつけて、にくまるゝ、戸間の蟹の、横ばしる身は。

村田春海

春海よりの消

〔琴後集〕 上田秋成がもとへ  
春たちかへるのどけきは、わきて都の寒こそゆかしう侍れ。いまはいはほの中なる、すまひをふりすて給ひて、ちまたの花、柳にたちまじらひ給ふらんば、いかに心ゆく御すみかならまし。  
すこもれる、谷の鶯、いかなれば、みやこのはるに、心ひかれし。となん聞えまほしき。されど、うき世の塵の、のがれがたかなるも、騎市のうちに隠れけん。古人のためしにならひ給ふべければ、世のさがしらぬ人々とのみ、みやびかはし給ふらんば、山住のつれなくならんよりは、とおしおまぬらするものから、いたづらに、千里のよそにありて、萬まのあたり聞え承らぬこそ、あかぬわざなれ。さはいへ、鳥の雛の行かひだに絶ずば、中々に遠くてちかきたぐひとや、思ひなぐさみ侍

人口に膾炙せる歌

らん。柳の糸のくりかへしつゝ、今年も、とだえなく、聞えまぬらばやと思ふを、ゆめ雲の鳴音、なかしみたまひそ。  
〔編旅漫録上〕 京にて今の人物は、皆川文蔵と、上田余麿のみ。しかれども、文蔵は難行修らずと聞ゆ。秋成は、世をいとうて、人に交はらず。今上方にて、人口に膾炙する歌、

風さわぐ、みどりのはやし、根をたちて、戸さゝぬ御代に、宵ばかの宿。  
おなじこゝろを、

くまさかの、物見の松も、かれにけり、何いたづらに、年をぬすまむ。

つゞら冊子

〔三十六家上〕 門人はかりて密に家集を刊刻せんとして、既に露に音ぐ。前大に怒つて曰く、何ぞ斯の如きよしなきをなさんとするや。世に在る限は、かかる事はさせじと、時に門人聞つて曰く、いな此作者の翁は、既に世を遺れて今はおはさず。いかにんぞしか我が物顔にはのたまふぞといふに、翁微笑して、吾刀を以て紙を穿れりといひて、口を閉ぢられたりと。故に既に刺して露

茶道に細し

〔同上〕 最前茶に於て大に法則を立て、中興せり。かつて清風取言三巻を著して、辨説を詳かにす。茶家これを慕稱す。

著書

〔近著〕冠辭考續貂 七 落くぼ物語校 六 伊勢物語古意校 六

よしやあしや 一 縣居歌集校 一 静舎歌集同 一

万葉集見安補注池永泰良筆記 五 靈語通 一 古今集打聽校補 二〇

大和物語校 二

〔慶著〕痾癖談くせものがたり 漢委奴王金印考

御嶽草紙

春日物語

水やり花 雨月物語

上田秋成

七三一



夏野の露

諸藝聞耳世間猿

〔編者補〕清風預言 三

### 深澤 薫

生 歿

目 二四〇一、櫻 町、寛保元年、

目 二四六九、光 格、文化六年、目六九、

字 南公、園君山、

(以上、慶應、和)

〔備考〕江戸の人にして、三日月藩士、國典に精しく、且漢學に通ず。

〔慶著〕國風發蒙 一〇

骨董記

四〇餘

詩文集

姓 名

著 書

### 清原雄風

生 歿

目 二四〇七、櫻 町、延享四年、

目 二四七〇、光 格、文化七年八、二〇、目六四、

(古學、下)

〔古學下〕八月十八日、其教子ナル、正木千幹ガ家ノ歌ノ會ニ招カレ、十九日、家ニ歸リシガ、イ  
ツキヨナク、廿日ニ身マカリヌ。

〔生地〕豊後國岡、江戶、上總、下總、

(古學、下)

住 所

姓 名

總 叙

逸非道統と交  
人となり疎遠

奇行其一

奇行其二

亡命して諸方  
に流浪す

奇行其四

奇行其五

酒家の主骨と  
なる

〔本姓〕森氏、國忠次郎、國藏玄達、伯高、園、又楊伯、又雲巢道人、

〔續近世談話〕

清原雄風、名、字、伯高、初、渡、良、國、以、楊、伯、行、氏、從、豐、後、岡、人、少、承、父、業、爲、詩、好、學、善、

詩、游、筑、前、與、逸、非、道、統、交、而、試、國、典、爲、詩、詞、章、道、統、以、爲、良、友、藩、主、親、山、公、聞、其、有、文、學、舉、爲、學、館、司、業、

使、其、弟、玄、甫、承、其、業、於是、從、居、學、館、更、稱、忠、次、郎、

〔三十六家下〕雄風翁は豐後國の人なり。初名は、森、字、伯高、渡を良國と云ふ。俗姓は森氏にして、

父の業を嗣て國となる。學を好み、善於詩、嘗て筑前に遊びて、逸非道統と交り、國典司業を嗣

試、詩、道、統、も、また、良、友、と、す。國、侯、翁、の、文、章、に、長、じ、た、る、を、聞、き、舉、て、學、館、の、司、業、た、ら、し、め、其、弟、を

して、國業を嗣しむ。こゝに於て、學館に從り、俗稱を忠次郎と呼ぶ。翁爲人疎遠にして、國典を不備

亂髮を束れず、居室を掃はず、塵埃の中に塊座し、青絲衣服食器の類、左右に置置たり。客ありて至

れば、僅に膝をいゝまてなり。平生諸生來りて業を問へば、必ず先角力の戯をなして、さて後業

を授く。或時、佩刀を贖得、その利鈍を試みんとす。偶一友人の家に性しに、室中に鐵の劍あり、即か

の刀を按てこれを撃つ。其家人大いに驚き走る。また僧寮に寓す。游かに猪肉を烹て食ふ。翁これ

を知て大いに叱するに、則ち俳歌を口占し、爽然として行く。また事に際して、門を杜しことあり。

數日、醉、悶、に、不、勝、しかば、ひそかに出て遊行す。しかるに途中、官長に遇て、即ち面を蔽ふて走る。其

狂態、またかくのごとし。居ること數年、官務を厭ひ、去て亡命し、所々流浪し、遂に名を變じ、居止定

まらず。均しく、雲水僧の如し。始め、江戸に寓し、國侯の器、某、類、る、或、類、を、授、け、す。翁、の、有、才、なる、を

知り、翁子となさ入とす。翁これを知ひ、のち翁を誘ひ、片紙に遺世若揭居士の六字を書し、特とこ

れを併せて、紙綫を以て客舎の窓格子に結び、若者て行く。後果して其罪を獲ると、翁しかして上

總に、瑤り、某寺の斷髮となる。一日、主僧、半、面、美人の詩題に沈思す。翁これを知り、筆を執りて、承す

に、主僧大いに感嘆し、翁に謂て曰く、明日詩客を招かん。翁は、汝また陪座せよと、翁辭謝し、翌朝に

深澤 薫 清原雄風

七三三



頭々先生  
橋千陸と交る  
文名高く諸侯  
に召さる

著書

〔慶著〕古人贈答歌抄三 一  
新撰六帖 二  
雄風家集 二  
家中吟野集 一

### 原久胤

總叙

〔續歌學全書〕 原久胤は、清原雄風のをしへ子にて、下谷三味線堀に住み、最も歌にす  
診せんと請、主人許容す。請診しをばりて、藥を買、調劑して遣るに、病速に癒。こゝに於て、主人ます  
ます奇とし、一小臣を遣り、これに居らしむ。里人衆を受け、或は藥を吟もの多し。主人屬々要を委  
らんことを勤む。請これを不憚、人のおくれるところの金を委して行く。其後また来りて居るこ  
と年あり。官の騎吏、租を收るの役に来りて、里正の家に宿す。請性て取事を勤く。定は則ち請の門  
人たり。請を見て驚嘆して曰く、いかんぞ先生、かゝるところに居給ふや。其意を不憚と、則ち里正  
に謂て曰く、彼人はこれ常人に非ず。よく其意をせよと、こゝに於て、里人ます、歌重す。請平生  
に謂て曰く、彼人はこれ常人に非ず。よく其意をせよと、こゝに於て、里人ます、歌重す。請平生  
座すること、其際を請頭す。是を以て人異名して頭々先生といふ。後下谷の香取に移、請す。時に  
加藤千陸と交り、結び、詠評して頻りに贈答なせり。こゝに寛政の季年、江戸に歸居して田町に  
卜居し、小澤玄遠と稱して醫を業とす。然れども其好むところにあらずりければ、此に汲々せず、  
獨り書を讀み、また詩を作りて、自ら樂しむ。或は歌を詠て情を述べつゝ、千陸、春海の二翁と交遊  
し、送に醫事を廢して、専ら詠歌を治め、こゝにして更に清原雄風と稱し、頻りに道を究む。こゝに  
於て、名聲大いに高く、諸侯これを召て客となす。こゝに至て、請主調劑、其調劑をゆるし、郡門に出  
入せしめける。請もとよりして、榮利に淡く、さらに居室を設けず。凡て事に拘はらざりければ、貴  
族其操を高しとして、就て教を受んとすれば、辭して曰く、能に往ば、ひとり花鳥を作り、露月に吟  
じて娛樂とす。また山野園林をもつて、居宅となすと。請甚だ酒を好み、平生、賦土に萬葉集中、大伴  
旅人卿の歌、酒詞十三首を、自ら書して、これを展覧して、問を遣る。

著書

### 桃澤夢宅 匡衡

生歿

生 二二九八、櫻町、元文三年、  
歿 二四七〇、光格、文化七年、目七三。

住所

〔生地〕 信濃伊那郡春近莊梅戸郷、〔同〕同上、京國梅戸郷、西岸寺、

姓名

〔桂園叢書〕 里正を勤む、澄月の門に入りて師の號を繼ぎ、垂雲軒と號す。後、芥木を呼び  
て其號を譲り、國に歸る。始、香川景樹と交り善し、後、其説に服して弟子の禮をとれりと  
いふ。

學統

〔夢宅歌集〕

吾師、桃澤夢宅居士は、信濃國伊那郡春近莊梅戸郷の人なり。早くより京なりけ  
る澄月法師を師として、斯道に心をよせけり。然るを六十近き頃、ほひ、月師の講をうけて、垂雲軒  
のあとをつぎて、五とせ六とせあるじたりしかども、國に待つ人々等のなきにしもあらず、年も  
いたう老ぬれば、旅のすまひ心ぐるしとて、其處をまた人にもものしおきて、もとの國にひきこも  
りしは、享和となれる始、年の冬になむ。それよりよつの時、こゝのかへりばかりへて、文化七年  
といふに身まかりぬ。若かりし程の歌は、心にもかなはずやおぼしむ。京にはべりける程の歌  
ばかりをかいとめ、それも櫃の底に深くひめおかれて、誰しる人もなくて、あまた年へにけるな

原久胤 桃澤夢宅

七三五



べに家々出ばみたるを、今のあるじ、このころ見出たるなりけり。さればかくて、空しくしみの  
菓となしはてむも、ゆかりある身にはすてがたく、はた詠風も花實そなはりてめてたく侍れば、  
いかにもして、梓にのぼせむと、かくは選みつれど、おのれひとりの力にもかなひがたくて、い  
だ本意をとげざるのみなむ、いとく口をしかりき。

天保二年辛卯三月

宮下正平識

其一 夢宅の消息文

〔桂園遺芳〕 然者、去年中も、正月師より、御内々被仰下候我事、此間も段々御内々御物語有  
之候は、近年和歌も上達に付、當時順を立つれば、大恩師次に香川府生次に我等次に江戸備田  
主水次に山脇と申仁と被仰も、はや京都にて宗匠も被立候に付、是非共京都へ引越、御物語相  
續いたし候様にと、突々御深切に被仰下候。先は身に取れて、無此上大帝と存候へども、御物語  
相續いたし候には、法林ならんば不叶儀故、刺懸候様にと、御すゝめに候。我等も、當時は、や  
在所に居候ても、畢竟不用の身分に候へば、何卒仰にまかせ、我刺懸、宗匠様を申受、一度京都に  
て、歌謡もあげ見申度と存候。右に付、宗匠中も、段々内意有之と、かく京都にて暮らし候様にと  
申され候。しかし、刺懸の儀も、先らくすりなれば宜しく候へとも、俄道心にはちと不好事故、先  
しかと心底も不定候。右の譯合に有之候故、四五年も此方にて暮し見可申哉、又は右様にては  
不宜候哉、とくと御談の上、御定可被申候。たとへ、罷下候様に被申候とも、我等方より、此内  
意申遣候儀、一向御沙汰なしになんぞ俄に無縁我等不歸候ては、相叶不申儀を被申立候て、固  
のもの、四月初旬頃にも可被遣候か、左なく候ては、歸り候儀も致しがたき譯合に候。何分御事  
へ可被成候。同くは、八九月比まても、滞留致し度存候。もはや、此節先師にも、御老疾にて、我等  
候をとくより、目を御かぞへ被遊候て、御待被下候山、外々の物語にて承候。左様成事故、同くは  
八九月十月比迄も、何卒此方に滞留いたし度候。左候は、十分道も手に入可申と存候。……此  
度、合席へも罷出候て、歴々へつき合申候處、至極用ひられ候て、取付より先外間も宜く致大慶  
候。御安堵可給候。ことに、去秋比より、我等歌ども、正月師、此方に御寄留被遣、宗匠中へも兼て御  
吹聴被下候故、名あるよみ手の分は、大抵拙歌もよく存知被居候。いづ方の會へ出候ても、引け  
を取不申、何分被申候。二月二十五日、(寛政九年) 桃澤一右衛門侍。桃澤茂兵衛。

其二

これ夢宅が京より信濃なる子匡選に附りし消息なり。かくて夢宅は、つひに、正月につきて、香  
軒のあるじとなりき。香川府生は、景樹の養父、新なるべし。夢宅の玄孫、桃澤夢宅の腹に、  
夢宅初の名は、匡選、通稱を茂兵衛と云ひ、號を啓山、又、景思亭と云ふ。信濃國伊那郡藤戸郷の  
主なり。文化七年に歿す。年七十三。墓は本村西峯寺にあり。子匡選、通稱を興一右衛門と云ふ。  
○當座の儀も、後住の人を望み候所、當座香光寺大觀遺像、御供いたし置候。東方多内殿と申侍、二  
十五六歳と相見え申候。和歌は大恩子の門弟にて、相應によみ、手もよくかき、人物至極宜候。我  
等方へも、折々相見え申候。此仁大觀遺像方、暇を乞ひ、來春は和歌執行に可致上京言申候に付、  
幸と存付、大恩子へ致内談候所、至極宜可有之と被申候。……大形相詞可申存候。左様候へば、一  
年何かと教申候。……我等儀も、明後春は、罷下候儀に存居候。十一月晦日、(寛政十一年) 桃澤興  
一右衛門殿。同啓山。  
當座とは、垂雲軒なり。此前月の消息には、  
香光寺大觀遺像の用人、東方多内と申侍、……此人元來上州の座にて、年輪は二十四五歳と見  
申候が……  
となり。

斧木の消息

○下細上京の所、大きに延引仕候。……其御座相續の儀、對冬申上候通、彌御世話申上度申存候間、  
……來月末此方出立にて、……遠からず得費頗高々可申上候。二月十七日、(寛政十二年) 桃澤  
夢宅様。東方多内謹明。  
包紙に「後に斧木と被申候」と匡選の手にて記せり。斧木が信濃より、京なる夢宅に附りし消息な  
り。かくて夢宅は、垂雲軒を斧木に譲りて、享和三年に國に歸りき。(井上通泰氏)

著書

〔慶著〕神樂催馬樂集釋義 一 夢宅和歌集  
〔編者補〕初郭公 一 みなしご 一



### 村田春海

生 歿

二四〇六、櫻町、延享三年、  
二四七一、光格、文化八年二、一三、  
四六六、

(以上、三十六家、下)

住 所

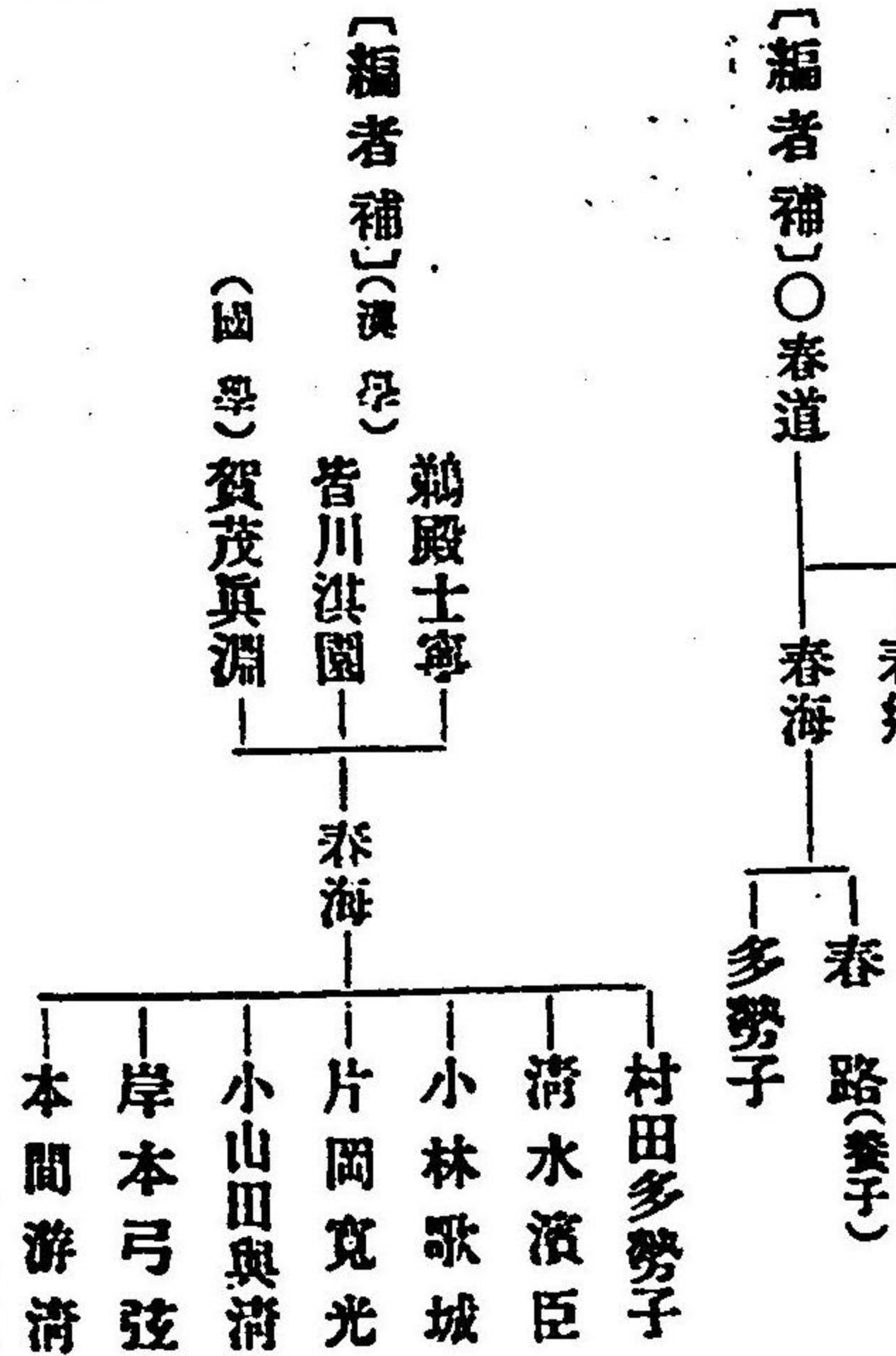
江戸深川本誓寺、

姓 名

平氏、**國**平四郎、**國**士觀、**國**琴後翁、**國**錦、**國**織、**國**齋、

〔三十六家下〕 眞家、一の古學を蔵して、これを珍とす。依て琴後の號あり。  
〔續人物下〕 名ハ春海、字ハ士觀、錦、更ト號シ、一ニ琴後翁ト號ス。通稱ハ平四郎。

系 圖



學 統

師

縣門に入る

學 說

彼も人なり我も人なり

〔三十六家下〕 初め服部仲英に從ひ、後、勅殿士尊に就き、また京師に出て、皆川淇園にも就て疑ひを問ふ。皆く有名の儒家と交りて、博學淹通、和漢に通ず。故に文章を作るに五ては、意を漢土に取り、詞を皇國にいとめて、別に一體を開きたり。

〔同上〕 伯、春海と俱に縣居の門に入り、古學を勉め、また歌に妙なり。其文詞においては、實に世に超出して、一家の妙を究む。

〔琴後集〕 此道々にゆきとほりて、萬たどしからぬは、國我師にしごりのやの筋のみなむおはしける。新こゝのことは、すべて縣居の大人に、とひきかれたる由は、誰もよくしれる事なれば、いはいは、もろこしまなびは、はじめ、服部仲英ぬしに、名簿おくられしを、仲英ぬし身まかられては、勅殿士尊ぬしに、隨ひ、中ごろ都に上りて、皆川伯恭ぬしにとひ聞かれし事多く、又後には、佐木學儒、安達文作などいへる、世にすぐれたる博士だちに、あした夕べ、睡びともなはれしかば、から歌にも、其名聞えて、なまの博士、口あかすまじくなむおはしける。(清水濱臣)

〔續近世叢語〕 春海嘗論道云。我邦之所道。周公孔子之道。曾、周、公、孔、子、之、道。而、則、取、道、於、我、太、古。吾未之聞也。故和字非我字。假漢字。充我音也。衣服冠履。皆唐所制度也。百官有司。皆唐所制度也。律令格式。皆唐所制度也。博士立明經文章。天文陰陽律呂音韻。不立和學。故言詩也。已。歌、學、者、者。出、自、大、江、匡、房、戲、稱、和、學、歌、學、之、名。考、之、古、未、之、有、也。和、學、者、儒、者、之、道。木、朝、與、故、言、詩、也。已。歌、學、者、儒、者、而、作、歌、也。已。吾、儒、聖、賢、所、亦、儒、也。儒、而、作、歌、者、也。木、朝、制、度、文、物。已。曾、事、周、公、孔、子、道、法。而、其、儒、者、亦、多。木、朝、之、俗。少、而、儒、老、而、佛。自、中、古、以、來、盡、然。由、是、觀、之。非、儒、則、佛。會、此、二、道。而、別、道。吾、未、之、聞、也。今、之、和、學、者。豈、我、邦、別、無、道。兼、強、附、會。妄、引、我、古、史。歌、人、歌、已。吾、安、得、不、辨、之。哉。春、海、道、學、實、古、言、之、教。不、曲、從、其、所、道。持、論、平、正、如、此。

〔泊酒筆話〕 一、吾師(春海)の常にいはれしは、與沖阿國、縣居翁などを、今の人の心よりは、四、兩口もありし人のやうに思へど、さらに今の人のことなるにはあらず。彼も人なり我も人なり。かづからほこるにはあらねど、與沖阿國、縣居翁、まのあたり木居氏などの如き、その才氣をたくもへば、われも此三人におとれりと思はず。絶えておよばぬ事は、三人のひとだちは、精神すくやかにして、若きより、老の身にいたるまで、學の道にうむ事をしらず、きはめて、つとめし人だちなり。

村田春海

(學統)

七三九



われは幼よりほしいまゝに、おひたちて、酒色にふけるのみにして、物につとむるといふ事な  
 さず。一夜もまどろまずをれば、つとめては倦みつかれて、物のやくにたゝず。一日つとめて、二日  
 物のやくにたゝぬ故に、何事も心に思ふばかりの事を、十がひとつをなしをへずして、いたづ  
 らに老いくづなるゝに至れるなり。これ身のおこたりとはいひながら、まことは生れたるの  
 よわく、病におかされるゝ事、常にして、物をつとむるにたへぬが故なり。此三人の人だちは、つれに  
 文机のもとをばなれぬ身なればこそ、人はさもおもはれ、學のかたにかとはなれたる身ならば、  
 馬道車借をわざとして、五月みな月の照はたゞき、露月しはすのよりこほるゝるにはたしつる  
 はきにて、ひめもすに立ちはしるゝも、身にいたづきしらぬばかりの、すこやかさにこそあるべ  
 けれ。されば學の道にも、何のわざにも、身のすくやかならぬは、よろづ口をしきものぞかしとい  
 はれき。今演臣が身の常にかよわく、病がちにて、學の道にこゝつかぬにつけて、吾師の訓、思ひ出  
 てあるゝことつれになむ。

道は周公孔子  
をとる

交友

和泉眞國が令  
の論

〔三十六家下〕

翁、平生、道を論ずるに、余は古言、歌は舞居前に學ぶ。しかれども道とする所は、周  
 公孔子の道を道とす。我國周公孔子の道を捨て、別に道といふ事、いまだ聞かず、といへりとぞ。  
 思ふにこれらは、先に嚴しく異國をおとしめ、聖賢をも卑しめしを、憤りてのことなるべし。

〔古學〕上田秋成云。春海ノ親カヲケルハ、白川侯、皆川淇園、源應舉、濱田侯、清原雄風、加茂  
 季鷹、三嶋自寛、大窪天民、大學頭林銜、市川寛齋、藤堂侯、服部仲英、鶴殿士寧、佐々木學備、安  
 達文伸等ナリト云。

〔同上〕

或人云。和泉眞國が令ノ論ハ、至極云レタルコトナリ。春海ソノ問フ所ニ答ヘズレテ、本  
 居ノ學風ヲノミ論ズルハ、オトナシカラズ。サレド、眞國モ春海ニ問フニ、之ヲ其ノ家ニ於テヤメ  
 シテ、彌人廣座ニテ、部下有名ノ大家ヲ説スルハ、少年ノコトナルベキレド、春海ノ答レザル所  
 以ナリ。春海モタトヒ無名ノ少年ノ云コトナレバトテ、道理ニニツハナケレバ、尤ナルコトハ尤  
 ナリトシ、眞國ノ論ヲ稱揚シタランニハ、眞國却テ説破セラルハ、ヨリモ、懐入りテ亦爾スルナラ  
 ヲ。

歌風

經歷

白川侯に召さ  
る

性行  
財利に淡し

〔琴後集〕 大人の歌の上を論ぜむは、おほけなく、深きむれば、我どちのしるべきにもあらぬ  
 ど、只思ひあがれる心高さと、優なる趣とは、きはこと、世の歌人だちと同じ日に、語るべきには  
 あらず。又かの秀歌一首もつは、歌よみなり。二首は上手なり。三首はありがたし。と長藤庵のいた  
 まひしによらば、此集のよしなどをば、いかばかりめておべきものにか。(平書屋)

〔撰者小傳〕

父兄と共に、賀茂眞淵に就て、國學を受け、春海尤名を得たり。元富饒に生るとい  
 へども、性寛優にして、時事に關せず。よつて家産を破る。白川侯其才を受し給ひ、召て侍同とせら  
 れ、月俸を贈らる。

〔三十六家下〕 翁、千座と俱に召して、妙法院一品親王、ことに寵をたまひ、殊歌を奉りて、屢々物  
 を賜ふ。

〔同上〕 性、豪にして、財利に淡く、竟に家産を失ふ。しかれども和漢の學、文章に富み、其名  
 を天下に振ひ、猶千載の後葉に傳へん。されば家産を失ふもまた非ならずと、人稱すと、

〔琴後集〕 翁若くして、なりはひの道にうとく、遂に家をはふらかして、百千の寶を失  
 ひ、はては事たらぬがちに、年月を送られしかど、老てのち、言の葉にとみ、學に富まれた  
 り。いてや、百千の寶は、只しばし生けるが程の富なり、言の葉と學とは、とこしへになき

跡までの富なり。翁たからに貧しく、おはせしかど、言の葉と學とに富まれたり。誠に天  
 の下の寶の玉とは、翁をこそいふべけれ。誰かはうらやまざらむ。誰かは慕はざらむ。今  
 此言の葉のふみ、世にあまねく、廣ごりてあひだおかず、學の書ども板に承られゆかば、  
 我翁を天の下の寶の玉なり、といふことの偽ならぬこと知られぬべし。

〔訓蒙淺語〕 我十五六歳の頃、和歌師春海、藍工芙蓉の兩人亡父(太田錦城)と懇意にて、每度老へ  
 來りしが、兩人共に、舌は腰體の如しとも言ふべき辯者にて、至極面白き人物なり。併し是角眞國

他人の悪口は  
鐵錘の蒲焼  
りも旨し



春海と千蔭及び漸蹊

世に求むるなく風月を娛とす

は好物にて、兩人共に人の悪口は、殿の藩境よりも言しと言はれしに付、亡父歸にて、あれは説不徳の事と云へり。我等も亡父の傍にて、毎々兩人の興に乗じて、調諷するを聞きしに、人の陰私(内証の事)までも、一々披露に迫り、悪くにも聞きに聞き共あり。子父の事許以爲直者と云ふは、此兩人のことにや。息夫躬の歴試は、人長其口と漢書に云ひしは、至極尤千萬なり。其事は既説を請記して、世説にて悪口を云ひ、春海は和漢の書を記憶し、夫を引き、悪口種子とし、面白く讀ひなされたり。荷子の傷人之言、深於矛戟と云ひしは、此兩人の如き口給のことにて、今俗に如劍と云ふ譯なり。

〔筆のすさび〕 春海、予(菅茶山)に述しとき、昔の歌よみ人は、多半儒生なり。古今集の撰者の官職にても見るべしなどかたりし。春海、名山の詩をこひあつむとて、予に後同様の詩をつくらしむ。其後程なく身まかりしとき、其詩はいくばか疎まりけむ。同じ時、千蔭にもあひし。みな水村定重を介とす。定重俗稱俊成といふ。興力衆なり。千蔭は隱居して、顔色容觀さしも歌人と見えたり。耳しひて、息女を傍におきて、彼此の言を通す。春海は牛乳にて、頭大に下ほそりたる類なり。一面習知のことし。蓬落の人なりし。高蹊は近江入幡の人、京に住す。小男にて、朝妻す。音吐大によく談ず。

〔琴後集〕 翁世に求むる心なくして、やむごとなき、御前わたりに召さるゝ事好まれず。たゞ花にあくがれ、月にうかるゝ外には、朝夕文机のもと去らず。おはして筆とるわざにのみ、あかしくらされしかど、ともすれば、物まなびする人の爲に、妨げられ、かくすれば病の床に起臥して、思ふ事いはてやまれたる事少なからず。書きして、書へられざりしもの數あまたなりき。歌をのみ、たてゝ物せられしとはあらねど、おのづから此かたに世にしられ、人に用ひられつゝ、やう／＼天の下、たかきも短きも、老たるも、若きも、しるしらぬ、歌よみ人とだにいへば、千蔭、春海と、口にいにはざるものなきやうには

雜載

運吟

なりおはしにけり。

〔泊酒筆話〕 一、吾師は常によみ出でらるゝ歌、いと運吟にして、人の許に行きて、其むしろにのぞみて、よまるゝ歌もある時は、けふはよみ得ぬなりとて、ひめもす考へられたるまゝにて、むなしくかへらるゝ事たび／＼なりき。文詞なども、筆とられてより、いくたびか稿をかへて、讀心におちぬほほどは、其まゝ、厨子のうちに巻き入れおかれて、心のおもむけるなり、とう出ては、消しおぎなひなどせられしこと常なり。さればみづからゆるして、消せらるゝにおよびては、誤れる事は、なさ／＼なかりしなり。荒木田久老神主は、其こゝろおきて大にことにして、早吟なるのみならず、序文など人にこはれて、ものせらるゝなりなども、筆をとりにて、紙にむかへば、調落たまちにあつとて、案をも設けず、たゞちに筆を下されしとぞ。秀才なる事は、ほめ聞ゆべき事なれど、さればこそ、其文詞ともすれば、考たらぬ事の打ちまじるなりありき。又あまり筆のはしるにまかせられて、とかく考へらるゝまては、なかりし事も有りしとぞ。今いづれをかよしといはん。わが家の佛たふとぶとにはあられど、使頼口傳抄にもいはれたることありき。其詞に、讀うたをよまんには、いそぐまじきなり。いまだ昔よりとくよめるには、かしこき事なし。されば實之などは、歌一首を十日廿日にこそ、よみたれとあり。しかのみならず、たとひ筆とりて、すなはちなれる文詞なりとも、其時こそ、いははつき筆づかひをほめて、いさゝかの統あらむも、みゆるしてめづべけれ。後世につたはりたらん、誰かみる人ごとにむかひて、此文は案をもまうけず物したるなり、さればいさゝかの統はありぬべきことかと、は、ことわりいふ人のあらむ。其かりはたとひ、千度もしたび書き消しあらむとも、統なき玉とならむには、後世につたはりて、誰人もげにめづべきものなるをや。此おとりまきりいかに有らん。世の歌人のさだめいふ所をかまほし。

文は和漢の長をとる  
小山田興清春海の文を評す

村田春海

(雜載)

七四三



やかならず。はた體のおきてかなはざるも見ゆ。この外、かしこにことばをおこし、こゝに筆を下すものあまたなりと雖も、まさしきすぢを思ひあきらめしは、たえてぞなかりける。わが小山田典清師、村田春海、ひとり此むねを得て、詞を古へにとり、心を今にもうけ、體をからくにかりて、錦をおり、繡をさへよそほへて、文かく道のほしたておこされしは、今むかしにたぐひなき功也。けり。かくて今の學者だちもおほかた、師の文體にまなびぬれど、なほ一編の文章を、源氏物語の抄書せしさまにものせしがあり。また序跋記志論、説辭、傳書、碑文、明文、これかれの文體を、別だになく書ひがめしもあり。師の高きいさを、ほと／＼堆になんおちぬべらなる。此時にしも、さえずぐれたるをのこ出来て、かしの柳、秋葉の跡をおひ、師のこゝろさしをもおしひるめて、何くれの文章ども、儒者の手を假ずして、書つべきまてに、事おこしたらんには、いと／＼こゝちよかんめり。抑も儒釋の徒に、漢文請ものほあまたなるに、學者に文章こふものも、すくなかるは、此道に人なくして、みさかりに振へる時なかりしかば、おのづから世傳もおとしめつる也。たとへ、漢國の書籍なりとも、中國にて刊行せんには、中國の文章もて、序跋凡例などを、書べきがことわりなるに、轉倒錯置の心もとなき漢文を、くはふるはいと／＼うるさきおうへに、異國につたはりもしたらんには、いよ／＼耻がましきわざなるべければ、中々に中國文を承したらんこそやことなきおもておこしにはあらめ。あな日月地におちすば、中國にも轉柳、秋葉がさえなくだしたまへかし。余が過信烈にまねびて、香を焼つ、天つ神に祈れるは、たゞこのことにこそ。

〔古學〕 博雅淹通ニシテ、和歌及和文ニ堪能ナキ、其和文ヲカケルヲ、法則ヲ庶寮入家ニカキ、詞ヲコ、ニトリテ、一家ノ體ヲナセリ。時人及アモノナシ。紀氏以來ノ能文ト稱セリ。モノ書キヨトモ、マダ拙カラズ。カナハ佐理卿、其之等ヲマナビ、文字ハ米法ヲ撰セリ。使殿ニシテ品格イヤシカラズ。

〔松屋叢話〕 うたよむわざは、いふもさら也。假名文、書出ること、古今にたぐひなくて、ひとりの體をぞ得られたる。また漢學さへすぐれて、詩文などいとめてたうものせられけり。あるとき、つくり出られしからうた。

醉鄉主人本財雄。開國津波江城東。家僅千指判。書食。茶封翁。是難王公。主人。書性且。醉。怡。何。

紀氏以來の能文家

詩

春海の稻掛主にまわらする書

然策。讀。香。學。劍。兩。不。成。疑。酒。沈。酒。惟。自。道。日。入。醉。那。登。禪。丘。隨。意。交。游。無。所。擇。相。送。和。數。少。年。場。不。捨。寶。金。供。結。客。花。前。歌。舞。東。山。春。月。下。鴈。詠。水。濱。自。謂。行。樂。長。苦。此。事。知。浮。雲。變。雲。新。漢。中。之。物。一。且。盡。願。同。長。劍。向。誰。親。昔。時。編。經。兄。典。弟。今。日。何。異。行。路。人。嗚。呼。世。間。守。錢。奴。難。笑。坎。壈。難。此。身。

〔贈稻掛大平書〕 雲井の雁のゆきかひは、絶てほどへにたれど、清き池による波の、たひらかにおはすらんことは、風のおとのほのかに聞わたり侍ること、嬉しけれ。又此年頃は、ちまたの塵に立ち交はり給はて、千世の古道、踏みわけて、詞の林にのみ、明し暮し給ふとよ。さるはかやびたる御すさみこそ多からめと、まづはゆかしうなむ。此頃承るは、我縣居の翁の手紙を、さへる人々の言の葉を集めて、八十浦の玉とて物し給へるが、猶洩れたるもこそとて、千座春海事に物學べる人々の歌をさへに、廣く求め給ふとなむ。思ふに給の屋の大人、今は世にならぶ人なう、學の道にかしこうおはして、藍よりも青しと雖も、許しきこえたるに、歌の事は、國おぼしうるかたありて、縣居の教には更に從ひ給はて、おのれと一つの門をこそ立て給ひにたれ。されば大人に從ひ學び給ふらん人々は、今にありては、賀茂川の古き流をくまん事をば、か／＼しからぬ哉ぞと、おぼしもけちぬべきを、猶まめなる御心に、源を忘れ給はて、かゝる事をさへ、おぼしおこしにけるは、かしこき御心深さにこそあなれ。春海は、童に侍りし時より、縣居の庭を、踏みならし侍りて、あまた年、翁の歌の事いはるゝを、常に聞侍りつれば、其早う耳なれたるすぢの、悦こばしう覺え侍りて、愚なる心のうつろひ難くて、世の人のいはん事は、とまれかくまれ、更に改むべき事とも思ひたらず。今に翁の教をのみ、深く信じ侍るになむ。されどそは心ひとしき人とこそ、かたみにあげつらひもすれ。ならひ異なる人には、いかてかまれば、もさきこえ侍らむ。然はあれど、今縣居の手振の歌あつめ給ふとあれば、君にはいかてかまれば、しをり侍るべき。さるは翁の古へを、書まれば、大凡の趣をかつか、聞え侍らむ。其よしあしは、猶御心に、探み給へ。翁の古よりを、書まれたる事を、大方の心おくれたる人の思ふには、古へを本とし、古へを尊とむなるは、萬のなりはしなれば、只其ことわりをおして、古へをよしとのみいふにぞあるらむ。歌の事、深く思ひ知りて、古を慕ふには、あらしかしなどいふめり。そは歌の事よく知らぬのみかば、翁の心をも、能く知りて、おのがわいだめなきまゝに、しか思ふにこそあれ。いと心淺しや。又翁を慕ふともがら、翁のよめる歌

縣居翁の歌見對する意

村田春海

(雜載)

七四五







をたゞさば、いかてか口あかすべきなどいひて、其初學の人と共に、おのがもとに來れり。其初學の人も、心懸き人にて、ひそかに我を試むるになん侍りしとは、後にこそ聞しか。其折はさる事とは思ひもかけ侍られば、まらうど所かき拂ひて、其人をすみて、いかなる御心にて、かゝる蘆虫の露をばふみ分け給へると、いひ侍りしかば、其歌人、聲はやりかいて、いひ侍るは、餘屑の香の散に、心得ぬ事の侍れば、君とかたみにあげつらひて、勝まけをこそ定め侍らめといへり。春海いらへに、何とかはいはれ侍らむ。あやしの御事好み。弓矢とる人などの、其業試むるには、さるためしもありとこそ聞き侍れ。花になれ、月を慕ふ身の、物あらがひする事は、ならひ侍らず。君は君の好み給ふ教を尊とみ給へ。我はわが立てたるすぢをこそ、獨悦び侍らめといひ侍しかば、歌會とて勝負を定め、難陳などいふ事の侍るも、古へより此道のならひには侍らずや。わが難じ侍らむ事を、まづ聞給へとて、あながちにいはんとするを、あらゝかにいなむべきやうも侍られば、心にもあらねど、さらばのたまふこと、一わたり承り侍らん。我も心得たる筋をば、御答も申すべしといひ侍りしかば、其人のいひけらく、難屑の筋があげつらひ、ことわりあるやうに侍れど、古の歌はまことにて、後の歌は偽なれば、後の偽なる手振を捨て、古の誠なる心ばへを學ぶべしといふは、甚うけられ侍らず。後の歌は題を設けておのが心にあらぬことを、作りいてたるものには侍れど、それも世の中にありとある人の、權々に思ふ心をうつつしてよみ出る事に侍れば、其事にあたりてよむと、其事をそらに設けてよむとのわかちあるのみにて、其心ばへはおつる所、異なる事なし。もしそらに設けてよむを、偽にてわろしとせば、すべて題詠の歌はよむべからず。口には後の世の歌を偽りなりといひながら、其古へ振、尊とむといふ人も、題を設けてよむには侍らずやといへり。春海答へけらく、君の給ふ事は、只大よそを、そらにはかりて、のたまふならむ。古へと後との歌を、くはしく味ひ給ひたらんには、さることほのたまはざらまし。心を靜にして、よく味ひ見侍る時は、彼まことなる心はべと、偽なる巧とは、白きと黒きとのわかるゝが如くに見え侍るものな、いかてわいだめなくは、おぼすらむ。新が古へのまことなる歌にならへといひ侍るは、古へ人の如く、其事にあたりてのみよみ出ても、そらに設けてはよむべからずといふには侍らず。たとへそらに設けて誅まんにも、其おのづからなる、まことの心ばへを、失はざらんやう

歌評其一

に、よむべきことなり、との教なり。歌は心を迷ふるものなれば、事に當りてよみ出づらんを、まことの歌なりとせむ事は、もとより論あるべき事にも侍らず。されば事を設けて誅まむ歌も、其まこととによみ出たる歌の心ばへにならひて、偽りたるふしなからんやうに、あるべき事も、これ又更に論あるまじき事なり。さて事を設けてよむ事も、必後世の世のみに侍らず。既に古への歌にも多く侍り。然れども、後の題詠とは、其趣いと異なり。亭子の帝、四河にみゆきし給へる時の、九つの題などは、始に題を設けてよめるなり。さて其よみまは、題は題にて、其日の有さまを、草らいていひ侍れば、まことに其事、其所に當りてよめらむに異なる事なし。かゝれば、新は題を設けて、人によまするには、此月次給などの題を常にとりいて侍りしなり。又、花山、一條の御時には、既に後の世の如くなる題もおほくいて來ぬれど、後の世の如くなる一ふし、題詠のくせあるよみまは、猶いて來侍られば、まことを失へる事は侍らざりき。かれ新の古へ振を學ぶには、花山、一條の御時よりかみつ方をとれと教へ侍るは、此趣を深く考へ知りたればなり。世下りて題詠に強くなりての後、人々題をのみ巧みに、よみかなへんとかまふるまは、此文字を讀まじ、彼文字を強くいばむなどいふ事にのみ心移りて、いつしかと心のまことを失ふ事を、ば、忘れもて來ぬるになむ。今後の世の歌のまことならぬふしを、一つ二つとりいて、あげつらひ侍らむ。これになづらへて、題詠盛に成ての世の、わろさくせいてこしを、思ひ辨へ給へかし。池水半氷といふ題にて、池水を、いかに嵐の、ふき分けて、氷れるほどの、こほらざるらむ。此歌、題の半といふ文字を、強よみかなへんとし給へるに、ひかれて、歌のまことを失ひ給へるになむ。其歌は、池の氷の給へる事、氷れる所と、氷らぬ所と、つゆたがはず、ひとしからん事は、あるまじきことなり。よし、おのづからに、さる事ありとも、そはばかり知らるべき事にも侍らず。又、池の氷を見む人の心にも、かたへは氷り、かたへは氷らずなど、大方には思ひもすべけれど、必しかひとしからんといふ事は、思ひよるべき事にも侍らず。さるをまことに午なるに、いひなさんとし給へるより、其まことの心ばへを失ふ事を忘れ給へるなり。歌は幼なき心ばへのあるこそ、あはれば深けれ。かくさかしく、氷の結び、むすばざるを、ばかりくらぶる事あるべき事かば、午といふ文字は、よみかなへ給へるや

村田春海

(雜載)

七四九



歌評其二

うなれど、何のみやびかなるふしもなく、深き味もなく、徒らに心あらはれて、猶なし。古への人は、事を歌けてよめる歌にも、かゝる偽なる趣をよめる事は待らざりき。さて半といふ文字を、此題などの如くに用ひたるは、必まことに半なるをいふにはあらうて、大方の有様をいへるなり。是を此題の眼なりなど、思はゞ違ひ侍りぬべし。此題などをまことの心を失はずして誅まむには、必半なるよしをば、おながちにいへても、大凡にさもありぬべきけしきを、心を籠めていひなきば、かへりて半水れる有様の、おのづからに見るばかりにも有ぬべき事なるをや。古への人の歌には、世にあるまじき事をいひ出でたる事も侍れど、それらも皆まことを失へる事は侍らず。鹿山中に海をなすかといひ、山の端にけて、入れずもあらなむなどいへるは、ことさなるやうにきこゆれど、其造りたる池のいみじく廣きを見て、疑ふ事もなく、直ちに海なりと思ひ定めていへるが、まことの心ばへにて、其池を愛づる心も籠りて味ひあり。又山の端は動くべきものなられど、其動く事なき山も、逃げよと思ひ入りたるは、月を慕ふあまりに、幼なく思ひなしたるにて、心のまこと深きなり。此二つは、世の中に絶てあるまじき事をいへるなれど、其まことなり。氷らぬほどの氷らざるらんとのあるは、たま／＼は、世にありしつべき事なれど、其いひなし。鹿にぞ侍りける。又、かへる雁、今はの心あり明に、月と花との名こそ惜しけれ。これもまことの心ばへを失なひ給へる歌なり。凡草木鳥獸雲風の類の、心なき物を、心あるさまにいひなす事は、歌の常にて、更に論なき事には侍れど、それらもいひさまによりて、まことの心の侍る事なり。そは我心のまことを、其物に移していひ侍ると、幼き心ばへにて、心なきものし、心あるやうに思へるいひなしとは、聞く人もあはれと思ひて、心を動かさし侍るなり。然るを我心にもなき心をかまへて、いひよする時は、いかに巧にいひなすとも、聞く人の心を動かさす事は侍らずなむ。伊勢の御の歌に、春風立つを見すて、いへるは、雁は心なき物には侍れど、我花をあはれと思ふ心の深きにつけて、かくばかり頼ひなき花の、やがて咲ぬべきを、なぞや見捨ては行くならむと、幼なく思へるにて、其花を愛づる事の深き、我心をいへん爲に、雁を心あるものにして、それによせていへるなれば、あはれ深し。さるを似たる事とはいへど、踏る雁に見捨られなば、月花の名をくだすべしといふ事、は、我月花をあはれと思ふ心を、うつしいへるにはあらうて、春風立つを見捨て、といへる歌のあ

歌評其三

るにたよりて、うはの空に作り出給へるいひなしなり。月花を見てあはれと思ひ、面白しと思ふは、人のまことの心なり。踏る雁の見捨るによりて、月花の爲に、其名だてのあしからん事を、情しと思はるゝといふは、まことの心ならず。これも人などの、月花をめでざらむ事なとがめいはんには、かくやうにいふふしも侍るべし。心もなき雁に見捨られたりて、さばかりに月花の意なりと思ふべき事かば、伊勢の御の歌は、雁を借りて我心をいへる也。此歌は、雁と月花とを、情に心あるものまことにいひなし給へるのみにて、味更になし。同じさまなる事をいへるも、古への歌は、心深く、後の歌は、心淺きを見たまへ。又、櫻色の庭の春風、踏もなし、とは、ぞ人の、意とだに見む。此櫻色の庭の春風といふ事、心得ぬ詞なり。凡櫻色などいふは、櫻ならぬ物を、櫻にたとへいはんには、いふべき事なり。櫻をさして櫻色とはいふべからず。然るに櫻を吹きさそふ風の、色ありて、目に見ゆるは、則ち櫻の花なるに、それをさして櫻色といはん事は、拙なひなきいしにこそ侍れ。もしこれをたすけて、花をさしていふには、あらず。風をさしていふなりともいふべけれど、踏る事ならず。其故は、風は形なく、目に見えぬ物なれば、櫻色といふ時は、必其風の肉なる花をさしていふより外の事なればなり。これも色なる風とか、風も色あるなどやうに、色とのかいはむは難なかるべし。只に櫻色といひては、櫻ならず。こは新らしき事を、一ふしいはんとして、踏りて横さまに流るゝに、心のつき給はざりしもの也。いひふりたる事なれど、花さそふ風の、有様をたとへむには、雲とか波とかいひむより、ほかの事あるべからず。此歌ぬしの名高うおはするに、なづまで、心をたひらかにして見給へ。いと異さまなる詞には侍らずや。さて、とは、ぞ人の、意とだに見む。とあるは、在五中將の歌を、もととしてよみ給へるなれど、中將の歌は、主人に向ひていへるなれば、深き心あり。然るを誰ともなく大よそに、とは、ぞ人の、意といひては、味更になし。只うはべのみを取つくるひたる歌にこそ侍りけれ。又、鳴く千鳥、袖の涙を、とひこかし、所土舟の、よるの寐覺に。此歌は伊勢物語の歌をもとにて、袖の涙を、袖の涙の事としてよみ給へるにて、其心はかなしき事ありて、鳴くらん千鳥よ、我寐覺の袖の涙を、とへかしといふ事を、かくとりなし給へる也。こは只詞によりて、とり作り給へる歌にて、心よりよみ給へる歌には侍らず。其故は、なく千鳥に、袖の涙をとへといふ事、をかしくふしにてもなく、又深き心ある事にも侍らぬを、袖の涙と

歌評其四

村田春海

(雜載)



歌評其五

いふ詞の縁にて、千鳥をいひ、唐土舟ともみ給へる也。さて唐土舟は、よるといふ鳥の岸にて、勢物語の歌の詞をかけ合はせ給へる也。これ心をばよそにして、詞をのみ辨れるには侍らすや。此頃の人の歌には、此類の歌いと多し。昔心は何の味もなく、只詞の縁と古歌のよみ合せなどとなもてあやなせるのみの業なり。打見ては巧なるやうなれど、心のまことより出たるにはあらで、只うはべをとりつくるへるものなれば、人の心を動かす事なし。心源き末の世の手紙とこそ覺ゆれ。古への歌の、のどやかなる邊に思ひ比ぶれば、其巧に力を用ひたる所、かへりてみやびかならぬ業にこそ侍りけれ。又、難波江、霞まね波も、霞みけり、うつるも曇る。月夜に。此歌は隠詠にのみ心なれたる人は、巧なりとて誰も愛づる歌に侍れど、よく見れば、まことの氣色を寓したる歌には侍らす。一わたりうち見ても、詞のあや巧にて珍らかなれど、只其霞まね波の霞むやうに見ゆる故を、あながちにこまかにことわりたるのみにて、難波江の月夜の縁、けにさぞあらんと思ひやられて、人の心を動かすばかりのふしは侍らす。古の人の、氣色を寓しいへる歌は、ふと見ても只何ともなきが如くに侍れど、歌に其つきて、其所の縁のけにさこそと思はれ侍る也。かの聲うちそふる沖つ白波。などいへるは、其浦の縁を、今もみる心地のし侍るにはあらずや。又、春の心、のどけしとて、何かせむ、たえて櫻のなき世なりせば、此歌類なきとりなし也。藤平朝臣の歌に、春の心はのどけからまし。といへるは、花を愛づる事の深く、花故に心の暖なき事を強くいへるにて、かくばかりに、花に心のあくがれむより、中々に縁といふものなからまし。かばと、花を慕ふ心のやらん方なく、苦しき道に思はるゝ事をいへる也。さといへばとて、たえて縁のなからましとかば春の心は長閑にてよかるべしといへるにはあらず。さるをそれを打反して、のどけしとて何かせんといひては、藤平朝臣の歌を、縁といふものなからず、心の暖なき事を願へる事として、それをとがめたるやうにきこえて、本歌の心にそむけり。春の心はのどけかましちといひてこそ、心籠りて味も深けれ。のどけしとて何かせんといふ事は、花を愛てん人の心には、さはいふにや及ぶべき。藤平朝臣の、定まりたる常のことわりを、さといひて、心の暖なき事を知らせたるものなるを、それを又打かへしていひては、只常のことわりとなれば、何の味もなし。すべて上にいへる類の事、此頃の歌にはいと多し。悉く拾ひ出て、いはいむには、縁も侍ら

歌評其六

新古今集  
藤原俊成  
西行法師

藤原俊成  
西行法師

さるべし。これ昔、隠詠の悪しきならはしより、かく異ざまなる手紙には侍れる業になむ。新古今集にむねとあげられたる、其頃の歌人の中には、俊成三位は、既に早き時よりおはしたる人にて、其世に獨勝れ給ひ、西行法師は、塵に染まぬ心の、おのづから人に異なるにや。此二人には、其頃のわるき辭ある歌は見えず。此外なる人は、皆辭ある歌なきはなし。さはいへど、すべて其世の歌人は、誰も歌よむ事に深く心をを用ひたれば、多かる中には、古への歌のまことある心にそむかぬ歌もなきにしも侍らす。又、たまたまは、いとすぐれて古への人の人に、恥ぢざらむ歌も侍りけり。然るを後の世に、此頃の歌を愛づる人は、只わるき一ふしある歌のみ愛て、よき歌をば、かへりて見しわきまへ侍らぬこそ、心得ぬ業なれ。新古今よりなといひて、人のもてはやすは、昔隠詠の悪しきならはしより出て、まこととを失へる歌のみ多きぞかし。さは侍らぬかといひ侍りしかば、其歌人、くび打顔ぶけて、とばかり物も得いばて侍りしが、又隠していへらく、古へ縁の歌といは、いづれの御時の歌のさまを學ぶといふ事を、正しく定めてよむべき事に侍るを、其のあげつらひにて、藤原奈良の御時より、花山一條の御時迄をおしこめて學ぶべし。と侍るは心得難し。藤原奈良の御時のさまを學ばんとならば、心も詞も、必其御時の様を學ぶべし。宇多隱岐の御時なるも、花山一條の御時なるも、皆其世の心詞あり。もし大方に宇多隱岐の御時と、花山一條の御時とを、おしこめていはん事は、猶さもいふべし。藤原奈良の御時なるは、いと遠に異なるには侍らずや。此世々の心詞を、わかちもなく、取まじへたらんには、いづれの世の委とも知られぬ歌にて來侍りぬべし。そを古へよりといは、いかでかいひ侍らん。答へていはいはく、翁の古へ縁の歌といは、君ののたまうとは心ばへいと異なり。翁の古へ縁といへるは、大方に廣く古へをさして、いひ侍るなり。必いづれの御時など、狭く思ひ侍るにはあらす。そはもほら、古へ人のみやびかに、まことなる心ばへと、ゆるやかにのどかなる委詞とを、學び侍る事にてぞ侍る。其まことを失へるふしの侍らぬ世は、花山一條の御時よりかみつかなれば、花山一條の御時迄を學ぶべし。と侍るも、なりのなり。萬葉はもと撰べる集なられば、調悪き歌なむ多くまじれる。古へを縁とむといふにひかれて、萬葉のわるき調なる歌を、な學びよ。又、花山一條の御時には、前後の世のゆるやかなら



ぬ詞も交れり。そは能く選みてならふことなけれ。詞は必やすらかにして耳立ふしなき詞を  
 み用ひよ。又萬葉の古言には、世々の歌人の拾ひ残して、いはざる詞に、めてたき詞多あり。そ  
 れをよくとりなしたらんは、珍らかなるべし。一首を能くいひと、のへたらんには、古へと後と  
 の詞をまじへ用ふとも、其けぢめ見ゆべからず。心詞の大方は、いにしへにならひて、さてあた  
 しく珍らしきふしをこそよむべけれ。後の世の運びなる手振は、捨つとも、又いたく古へにな  
 づむ事なけれ。歌は我心をのぶるものなれば、一つわが姿をよむべき也とぞいひ侍りける。か  
 古へを大方に學ぶといふ事は、心ゆかぬ事のやうにおほすべけれど、今にありて古へを學ぶに  
 ば、さらてはかなはぬことわりなむ侍る。君のしたまふ如く、必それの世の手振と定めてよみ出  
 てむとするには、我いはまほしき事をも、其世の人の心ばへにかなはずといはず。いはてはえ  
 あらぬ詞も、其世にいはぬ詞なりとていはて止みなむには、心も詞もいふべきふし少なく、か  
 こに憚り、こゝになづまば、いかてか我心をのぶる歌ならむ、そは人の口まねをなし、我心にもあ  
 らぬにせ物つくる戯れ業にこそ侍れ。爲りてうはべのみ強て似せたらんは、ふと見ては古へめ  
 きて見ゆとも、能く味ひなば古ならぬ所、あらはれぬべし。大方に古へを學びて、心のまことより  
 よみ出る時には、古へならぬことも、おのづから古へにかなふべきふしも侍るもの也。又いつれ  
 の世の姿とも知られぬ歌、いて來ぬべしとのたまふは、いと心得侍らず。歌は世々の姿、人々の姿  
 あるものに侍れば、いづれの世の姿ともなく古へならず、今ならず、一ふし断なるさまよみ出  
 んは、めてつべき事には侍らずや、新たに珍しきふしをよみいてんとは、誰も思ひ侍れど、新いひ  
 ふるしたる事をのみ多くいはては、えあらぬものにて、世々の姿を離れて、一つの姿をよみ出  
 んは、いと難き業ぞかし。かにかくに、古へを學ぶは、大方に學び侍ること、まことのすぢには侍り  
 けれ。君の尊とみ給ふ京極中納言の君も、心は古へ報にそめよ。詞は古人にならへ。とのたまへる  
 は、大方に古へを學ぶとの教には侍らずや。古へより世々に歌人の數多く侍る事は、道の真砂に  
 もまさりぬべくて、とりくんに歌のさまもわかれ侍りつれど、珠更に人の口まねをなし、あなが  
 ちに、にせ物作るやうなる歌を詠出たる人は、たえて一人だに侍らざりき。かゝれば、侍らざらんか、と尋へ侍りし  
 いづれの世の姿と定めてよみむ事は、此道のまことのすぢには侍らざらんか、と尋へ侍りし

橋常樹  
日下部高豐  
加藤千陸

千陸、師の  
歌風を興す

かば、其歌人、更に又いひ侍る事もなく、まかりいひ侍りぬ。かく答へ侍りつるおちくは、春海  
 か私の心よりいひ侍りしにはあらず。これ昔、新の教なくみ侍るなれば、くゞしきなが  
 ことゝは思ひ侍りながら、洩さずきこえまゐるになむ。昔新に物學びたる人、あまた侍りつれど、  
 古への香の上など考へると、人は多く侍りて、歌よむ事を學びたる人は、稀になん侍りける。歌の  
 事は、新の心高うかまへられたるすぢにて、其人ならぬ人は、歌の心を傳ふと、かたりなんとして、  
 ち人に人を誘はれ侍る事もなかりき。其頃、新の心を得て、歌よみ侍りけるは、橋常樹、日下部高豐な  
 どぞ侍りし。これにたちならびては、千陸なむ、歌の心をば得侍るとて、新も常にめていはれ侍り  
 しなり。然るを常樹、高豐は、早う失せ侍りて、新も世にあらすなりて、新の志を繼きて、古言の學  
 を人に教ふる人、これかれ侍りつれど、其人々昔歌よまぬ人になむ侍りける。さるを從ひ學ぶ人  
 の、歌の事とひ侍る時に、われは歌よむ事は、え學ばずなん有けるよなど、いはんを絶ら思ひける  
 にや、ことの心をよくとどらて、みだりに人の耳驚くばかりなる、あやしくやう廻りたる歌を  
 よみ出て侍りて、これ縣居の手振なりといひ侍りしかば、其教を受くる人、それをまことと思ひ  
 て、さる手振の歌をならひよむ人あまたいて來侍りて、縣居の手振の歌は、只眞まなるものと、  
 世の人もいひあへりし也。さるを此十歳あまりこなた、千陸つかへを遣き侍りて、此道にのみ心  
 をよせ侍りしかば、おのづから慕ひ來る人あまた侍りて、歌の心知れる人いひてまうて來ぬれ  
 ば、今は縣居の手ぶりの眞まならぬ事も、やうやうあらはれ侍るになむ。世にまことなるすぢ  
 の事は、終に埋もれぬならひぞかし。近き頃は、縣居の教に從ふと、あらはにいはれど、ひそかに  
 まれび習ふ人も、世にこれかれ侍るめり。又いとまかしこう侍ること、世の上にて、千陸が歌  
 めてさせ給ふ御かたおほしきとして、其よめる歌ども率らせ給へり。又都に其名高き歌人も、今  
 世の歌よみは、只千陸こそあれなど、いひ侍るなりとぞ。かくて今よりは、縣居の歌の教、世にあら  
 はれゆき侍りて、古へのまことある手振を慕ふ人も、數多いて來侍りぬべくなんあるは、悦ばし  
 き業になん。かゝれば、こたび、君の物し給ふらむ業も、新が心をよく洩み給ひて、續み給はし  
 きわざになむ、あなかしこ。かく思ふ事心に殘さて、きこえ侍るを、さしすぐいたりと、なとがめ給  
 ひそ。



大平よりの返

三月廿八日 稻掛のぬしの御許へ

稻掛大平

「答村田春海書」 村田君の御許に参らする返事  
 過にし春の頃、登井の雁のかきつられ、音づれ給へりし御文よ。稲垣の年をまへ隔て  
 て、いと覺束なく、心にはかゝらぬ折侍られど、何くれとほどにいとなむ葉の葉ければ、こな  
 たよりにはふりはへてしも、きこえ侍らざりつるを、たひらかにおはしますなる御有様、うけ給は  
 るより先婦しう、見奉りもて行くに、縣居の大人の歌の歌を、世の人の思ひひがめたるよしを、つ  
 ぶさにことわり教へ給へること、かう物うくおもなきものとしも、おもほしげたて、へだて給  
 はぬ御志の、みやびの道にとりても、いと頼もしくなむ。加藤の翁、此十年あまりこなた、仕へわざ  
 を退き給ひて、もはら此道に心をよせ給ひ、君はた此年頃、縣居の御教のまことをたゞして、たゆ  
 みなく物し給へば、やんことなきわたりより、常にこと同はせ給ひ、國々より参り集へる人々  
 も、其教におもむき、天の下に聞えわたり、かしこき雲の上人も、都に名高き歌人も、只其わたり  
 の歌どもをめて給ふとかや。縣居の教とはいひながら、御自らの力しるく、とりくにめてたくな  
 む承り侍りぬる、さて物あらそひは、よき人の好むまじき葉なれど、あがりての代のみやび事に  
 も、春秋の争といふ事も見え、かの腹立ちたりし歌人のいへりけむ、歌合はいふも夏なり、水歌の  
 花、給合などいふ事も、早くよりきこえ、又歌の委を、近代古林などいひて申ひたる事も、物に見え  
 たらば、此度の御論ひも、いとみやびたる葉かなと、興ある事に見給ふれば、おのれひとり見遣し  
 侍らんも、ちなく、親しき友達にも見せ侍りつるを、見る人ども見もてゆくまゝに、とあれば  
 かゝりなど定めあへりけるを、さるおのうらとけごとを、きこえさせむも、片腹痛けれ  
 ど、御徒然ならん秋の一夜は、さぶらふ人々に讀ませつゝ、まぎらばし給はんくまはひにもと、み  
 だりがはしういひしるひたるまゝに、本末もたどらず、音き續けて侍るを、伊勢の海によせける  
 波の、返り事とは聞えさせ侍るになむ。近き頃、萬葉風の歌よむ人、多く出て來ぬれば、大平が許に  
 も、そこかしこより見せにおこせたるも、又殊更に物のついでに、乞求めて侍るも、そこらつど  
 ひて侍りければ、それ選り出でて、八十浦の玉と名づけて、弄ばんとし侍る事は、古き代の人のお  
 詞を、千五百年の後の今にして、いとよくまれば、うつつせるさまなる功の、めてたく、はた神代の傳

萬葉風の歌

縣居翁の歌  
論一説

又一説

へ事もうとからず。我みがとのもとの手振も遠はず、いふ言の葉のさまも、伊がみ風れざりつる  
 程の、源を、慕へる心ばへのまめ、しうおしはかられて、いみじう尊とまるも心よりなりけり。  
 こればしも、もとより縣居の大人の御心にならなひて、いとよき事なるべくぞ覺え侍る。其よしは、  
 わがみかどの物學びといふは、古への道を尋ねて、神代の妙なる有様を、我もさとり、人にも承し  
 侍るなむむれとたつる本意にはありける。今更なるきこえ事には侍れど、古への道をさとり明  
 らめ、神代の尊とき物の始のことわりを、ほのかにも辨へてんには、萬葉集の歌をよく思ひ解き  
 て、其代の詞をよく知り、雄々しく直かりつる人の眞心を知らては、得あらぬ業になん侍ればぞ  
 かし。さるはかの大人の、萬葉考の編書のおち、又新學などいふものに、つぶさにあげつるひ  
 匠給へるを見侍りて、げにさる事と深く信じて侍るになむ。さるを此度こまやかに教へ給ひあげ  
 つるひ給へる、御文のくだり、は、其旨遠ひたるやうなるこそ、いとあやしけれ。などやうにい  
 へば、一人がいふやう、抑此文に、縣居の大人の教とて、標々いはれたる中に、花山一徹の御時、至  
 りては、附下れる世の標も出來ぬれど、新古への心ばへのの残りたるふしも、多かれば、まねびなら  
 ふべき標も少からずとあるを、或歌人の、心得難く思へる由いへる。符に、新の古へ標といへるは、  
 大方に廣く古へをさして、いひ侍るなり。必いつれの御時などと、興く思ひ侍るにはあらず。そは  
 専ら古人のみやびかに、まことなる心ばへと、ゆるやかにのどかなる葉詞とを、参り侍る事にて  
 ぞ侍る。とあんなるを、今よく思ひわたし侍れば、古へ標といふ事を、しひて花山一徹の御時迄に  
 いひ廣げたる也。古へを大方に學ぶべしとふ事を、くり返し、いひたてられたるは、今の世に  
 古へ標とて物する人々、花山一徹の御時の、よるづのみやび葉の盛なりける程を、おのが古へ標  
 の方に領じ入れて、こゝに憚り、かしこになづむ事なく、所を廣くなして、参らかに新らしき事を  
 よみ出んと、かしこくかまへたるものなるべし。縣居の大人の著はし給へる書どもに見えたる、  
 古へといふ事は、まさしく萬葉集のほどをさしてのたまへる事、いちじるかなるをやなど、此度  
 の御あげつるひを、いひ破らんとて、もとより淺はかなる人の、誇りがにいひつゝくるも、いと厭  
 くしや。又一人は、さなのたまひそ。己れ等は、かくなむ思ひより侍るといふやう、先づ縣居の  
 大人のよみ給へりし歌とて、四十四五首短歌の限を集めて、かの大人、始の程の、後の世の風によ

村田春海

(雜載)

七五七



又一説

み給へりしは更にいはず、又いたく上つ代の振に、長歌事もよみ給へりしかど、後にはそれをも心をなつかずおぼしければ、物にもかきとめ給はざりけるを、只此一巻ぞ、我意す言なるると、かきとめ置給へりしかば、此委ぞかの御本意にはありけるとて、字万使の調の傳へ給へりしとて、人の見せけるを、寫しもたるを、其歌どもの中には、全く萬葉風といふべきも交れど、多くは、本の句は古代の心調ながら、末の句に至りて、俄にゆくりなく後の世めきたる事も交り、或はあざやかに、文字どまりにのみとぢめたるなども見ゆるは、ひとへに萬葉風にはあらぬを、いとあやしき事と、年頃疑はれ、又上つ代の百の心を考へ給へる註釋こそ、こし方行末にもあり、世に秀給へる大人なれ、其古へ振の文とて、かき給へるも、勢のみ強く、強しき所あれど、餘りに筆の力すぐれ給へるけにやあらむ、しひて聊なる事、とのへにかかはり給はざりつる所々など交れるを思へば、此短歌ども、萬葉風ながら、ことに一つの姿なるべし。唐やまと、昔より物の始を起せる人は、さのみこまやかに物にかしはらぬ所あるものなれば、此大人も、餘の木にしかおぼしとりて、今一わたり考へたゞし給はん、いとまなくやや、み給ひにけむ。いとかしこく、心高く思ひおこし給へるにあはせては、又かたなりに行き足らば、ぬ所々も交れるを、さしもかいはらて、其まゝに記し置き給へりけるにこそと、思なる心の、中々に傳もなく、しかおしはかりて待りつるを、今よく思ひ合せ待れば、疾く萬葉風にのみより給へるにはあらで、廣く今の京、花山、一條の御世迄を、とり給へる御心の仕業なりけりといへば、さかし、其歌ども、後の世めきたる事どもの交れるを、かしこきかげと頼みて、此くだりくへ、古へを大方に學ぶべしといひ、又かの大人のすぐれたる事をいはんには、古へ振の歌を唱へられたるをこそ、よるづが中にとり出でて、いふべき事にぞ、などいはれたるなるべし。などいふもあり。今一人がいふやう、それどそは、廣く物見しれるさえの、きは異なる人こそ、後の世しき姿くせをば、いとよく辨へて、調なだらかに、調のどやかに、難なくしたゝめ出づべけれど、さやうに、藤原泰夏、其の御時より、花山一條の御時迄の歌を通し見て、そが中によきふしと悪しきふしとを、心に辨へ置きて、其世々に上り下りて、心のひく方につきて學ぶべしとは、あまりに打ゆるべたる數にて、おのがなみくのなほくしききは、そらにしめゆふ心進して、そこはかとたつきなく思ひ思ふべし。みづから

又一説

正風林

は、心高く古へ振と思ひ上りて物すべけれど、さては少しもかどあらむ人の、眼にも耳にもとまふしは、少なくて、數多くよみ出む中には、ようせすば、むげに近き世の、遠しき方の心も、調も、ひきまぜつべう、うしろめだしや。などいひしるふ程に、昔人々、思ひくへに、いひ試むとて、只大方の歌の論ひになりゆくもあやし。又一人後鳥羽、土御門の御時なるは、其頃一ふし異様なる手紙の出て、まことなき歌のみ多く、調もどかなる姿を失ひ來ぬれば、まねびならふべくもあらずなむとのいさめは、誠にする事にて、何がしなるとしかなん思ひとりて侍るを、かの頃ほひは、人々歌よむ業に、殊に心を碎きて、其さま妙にあやしうすぐれたる御代なりければ、さる歌人の夜、聲となく思ひいれて、われ人に劣らじと、きほひあへるから、心も調も珍らかに面白きふしの、多く出來けるまゝに、そなたさまにのみ、進みもてゆきて、あながちなるふしも交り來て、道にいかにぞや、覺ゆるさまとはなりけるなり。されどそのかみの人々の歌には、前にも後にも、類なくすぐれたるが多ければ、今ともかくもいひくたさん、且はおふけなき業ぞかし。調いはい、調は三代集にならひ、心は人のいひふるさぬ事をとの教などは、此度のあげつろひの心ばへにも、ひとしきをなや。又それより後は、更にいふべくもあらずとのきは、後深草、龜山の御時の程より、大よそ今の世に至るまでをいひたるにや。さるは漸々に、歌の道とて、これを物するをわざとのことにて、たて、其家などとのしり、師のつたへなどいふ事を、ことごとく、しくしてあがめて、其のりにいさゝかもそむかじと思ひ守り、應よみのみ多くて、其姿は、或は人の家の調度おるに、さまざま置き並べたらんやうなるも、又思ふ心をたゞこととのやうに、續けたるものあり。又人の味ふるさぬ様を思ひ巡らして、一ふしに又一ふしを、とわりなくもつけたるなど、すべて何の句はしきくさはひも見えず。心にくくゆかしき限もなければ、いと淺々しう品下りたる。げにいふべくもあられど、此際にも、又きざみくありて、其程のならば、しにかはらで、かのたゞしくことわりたるよきみちびきに從ひて、調なだらかに、心調たゞしく、やすらかならんと心して、つゆにてもあやしく、異さまなる巧は、まぜじと慎しめるは、耳とまり、目とまるもありて、かのすぐれたる代の歌人たちの、心に任せていひ出たるには、まさりざまなるも、選り出でつべうなむ。これを今の世に、正風林とかやいひて、皆題よみのものとして、此りに從ひ、此委を學ぶとはいひは、いへ



又一説

ど、ともすれば、一ふしに一ふしを、たくめる方にぞ、流れやすかめる。さるは中世の世のみやび  
 わざば、いかなりけ人物とも知らず。只近き代の人よみ置ける歌をのみ見て、それにならひも  
 し、一ふし添へしして、心を道りて過すなむいと淺ましきならひなりける。中世の人々の家の集  
 又様々の物語文などを、朝夕に弄びて、其世のみやびわざを心にしめて、腹の内に満たしめたり  
 ん人の、見る物、聞く物に觸れて、百の業に現はれ出たらんぞ、物のめはれのまことを道へず、何の  
 ふしもなく打よみたるやうなるも、打聞かま、に、體にも、をかしうも、あはれにも、感しうも、あ  
 らむかしなどもいふなり。又は寛保實曆などの頃、はひより、萬葉風、に思ひよれるも、新古今風、に  
 ひくも、又古今集より金葉詞花のわたりまでを志して、物するもありて、懐々にわかれたる愛、  
 いづれもおのがじしの立てたるむれあめれば、今いつれをいかにとことわらんこととは、いと難  
 しかし。されど此三つの委も、其程の委をよく守りて、いとしくけぢめ見えたるは、きはことな  
 るを、なほしきしが、しひてもてつけたるは、そこかしこ打あはず、片腹痛き事多くて、かの藤よ  
 みにのみか、つらふ後の委の、品下れるにも、中々けおされぬべかんめりなどいふ。さて又かの  
 或歌人にいひ聞かせ給ひつる、新古今集の頃、ほひの委、詞に心入れて、えんにをかしようよめる歌  
 どもを難じ給へる、御あげつるひどもを見て、又一人がいふやう、此あげつるひの中には、情いか  
 にぞや、覚えて、うけられぬふし、しなきにはあらねど、大方かの代、の歌どもを、難せんには、此  
 あげつらひのやうに、まことを失へりて見ゆる事、多かれば、大むねは遠へるにあらねば、いか  
 にぞやと心得ぬふし、くも昔おしこめて、げにさる事と聞なし侍り。此異さまなる手紙の、まこ  
 とを失へるは、早く千載集の中にも、委詞優に消らなるが見ゆるなむ、其始めなりける。何がし  
 抄に、かの近代古林の争とて、懐々いひたる中に、此異さまなる委を、中頃、に心よせたるかたさま  
 より、は、すいふることのやうに思ひて、だるま宗とかや、難りたる由見えたり。其だるま宗の人々の  
 思ひ給へるやうは、中頃の委の世に、よみふるしたるは、大方一やうに定まれるやうなるを、俗に  
 近し、見所なしなどいひおとして、更に古風にかへりて、幽玄林とかや、もてはやしめたる也。中  
 頃の方の俗に近しといふは、後拾遺より千載集迄の中に、物のことわりなどいひよそへ、興の  
 か、いりをむねと、とりなしたるなどいへるなるべし。古風にかへすと、古今集の中に、心ひと

又一説

へにして、委詞のひらかにたけ高くよめるに、よれるをいふ也。されどしか、古風による事をむね  
 として、それ又一つのさまとなりて、其中には、中々に厭へる中頃の懐にも劣りて、異さまなる事  
 のいでこしなり。すべてのこと、よき事も餘りに盛になりぬれば、心懸しきふしの出くるわざ  
 しあれば、こは必かくあるべきことわりなり。そのかみの人々、かくまことを失へるよなど、後の  
 人に、隠られん物とは、思ひはかり給はんや。これなんかしこき人の、さかしうしいてたることは、  
 かへりて思はずなる横さまのひがことも、引き出る例なりける。されば、今かの新古今の歌をわ  
 るしといひて、歌はかくこそあるべきものなれと、思ひ定めたるあげつるひも、又後の世の人、い  
 かにいひまし。とてもかくても、おだしう世に從ひて、おのづからに、遊り行く勢あらば、それにさ  
 かふ事なくて、さておしうもてまがり、いやしうおらはふれ行かむ事どもは、もてか、げつ、こ  
 とが中に、てにをはの定りと、詞のつかひさまとの、過ちだになくば、世のつねに、なだらかに思ひ  
 靜まりて、此道のみは、今迄も猶、から心に、もうつろはす、道々しきさかしら、こも交らぬを、悦び  
 に思ひて、えせ、しう人の目と、むまじきをも、あながちに、致し思ふまじうなむ。さて古風と  
 は、大方に、廣く古へをさして、必いつれの御時などと、興く限る事なくて、一首をよくと、のへた  
 らんには、たとへ、後との詞を交へ用ふとも、其けぢめ見ゆべからず。心詞の大方は、古へにならひ  
 て、さて新らしく、珍らしきふしを、こよむべければ、後の、隠しげなる手紙は、すつとも、又いたく古  
 へになづむ事なかれ。歌は我心を、迷ぶるものなれば、一つ我委をよむべきなり、との教は、いと心  
 高くめてたけれど、それが中に我委といふ事こそ、いと、大事なるべければ、萬葉集の巻々をよ  
 く明らめ、後の代々の、撰集どもをもよく心得て、おのが物となし得たらむ人こそ、古へのまこと  
 を失はぬほどの、御代、の問を上り下り、代々の歌人の、拾ひ残せる、めてたき詞を、おのが物と  
 は、とりなし、つべけれ。未だしき程の人々の、此教を教と立て、新らしく、珍らしきふしなどを、心  
 がけむほどに、もとより身は今の世の人にして、又代々に、うつろひきたる、後の歌とて、むげに  
 ことものならねば、おのづから入り、亂れて、とりはづしては、隠しき後の、心詞などの、まじり行か  
 むには、彼幽玄林ならねど、味氣なく、いひ定むるもあり。又一人は、又思ひ侍るに、此幽玄の教は、心は、藤原  
 や、猶苦しからむと、味氣なく、いひ定むるもあり。又一人は、又思ひ侍るに、此幽玄の教は、心は、藤原

村田春海

(雜載)

七六一